



小笠原諸島世界自然遺産 に関する基礎資料集

令和7年度版

小笠原諸島
世界自然遺産地域連絡会議
事務局



はじめに

日頃より世界自然遺産行政にご理解、ご協力いただきありがとうございます。

小笠原諸島は平成23年6月に世界自然遺産に登録され、14年が経過しました。この素晴らしい小笠原の自然環境を守り、将来に引き継いでいくために、日々、様々な主体が多くのお組を行っているところです。

「小笠原諸島世界自然遺産に関する基礎資料集」は、世界自然遺産小笠原諸島の現状や取組状況を関係者や地域のみなさまと共有するため、毎年度末に世界自然遺産の管理を担う各行政機関が連携して最新情報を取りまとめて発行しているものです。

- 「1. 小笠原諸島の社会的状況（生活、産業）」
 - …小笠原村の人口や来島者数、遺産関連施設の利用状況
- 「2. 小笠原諸島の生物多様性の保全対策の進展」
 - …今年度、特に環境省・林野庁・東京都・小笠原村等の行政機関が実施した遺産関連事業の実施状況
- 「3. 世界遺産に関する基礎資料」
 - …世界遺産のしくみ等に関する基本的な情報

遺産登録後の平成25年度から毎年、ウェブサイトで公表しております。過去の基礎資料集については小笠原世界遺産センターウェブサイト (<https://ogasawara-info.jp/>) をご覧ください。



令和8年3月
小笠原諸島世界自然遺産地域連絡会議事務局
(環境省・林野庁・東京都・小笠原村)

小笠原世界遺産センターHP
< <http://ogasawara-info.jp/> >



- 目次 -

1. 小笠原諸島の社会的状況（生活、産業）

1-1	小笠原村の人口の推移	1
1-2	小笠原世界遺産関連の事業費推移	2
1-3	小笠原村の給水量の推移	4
1-4	小笠原村のごみ量・リサイクル率の推移	4
1-5	来島者数（おがさわら丸、ははしま丸、観光船）	5
1-6	施設利用者数（小笠原世界遺産センター、ビジターセンター、海洋センター、ローズ記念館）	8
1-7	村営バスの利用状況（利用者数、売上額）	10
1-8	ラム酒販売本数	10
1-9	入林者数の推移（父島、母島）	11
1-10	南島上陸者数の推移	11
1-11	小笠原諸島における許認可件数の推移	12
1-12	観光満足度調査の結果	12
1-13	水揚げ量（父島漁協、母島漁協）	13
1-14	農産物生産額	14

2. 小笠原諸島の生物多様性の保全対策の進展

2-1	森林生態系修復事業の実施状況	15
2-2	植生回復事業の実施状況	20
2-3	希少植物の保全状況	22
2-4	ネズミ防除対策の状況	24
2-5	陸産貝類の保全状況	27
2-6	陸産貝類の生息を脅かす外来種対策の状況	33
2-7	希少昆虫類の保全状況（ハンミョウ、トンボ、シジミ）	36
2-8	グリーンアノール防除対策の状況	38
2-9	希少鳥獣類の保全状況（カラスバト、カワラヒワ、アホウドリ、オオコウモリ等）	41
2-10	ノネコへの対応状況	43
2-11	新たな外来種の侵入・拡散防止対策の実施	44
2-12	西之島総合学術調査事業	46
2-13	住民参加・普及啓発等	46

3. 世界遺産に関する基礎資料

3-1	世界遺産の定義	50
3-2	世界遺産の登録状況（世界、件数）	51
3-3	世界遺産の登録条件	51
3-4	世界自然遺産の基準	52
3-5	小笠原諸島の世界遺産までの経緯（時系列）	52
3-6	小笠原諸島の世界遺産の登録基準	53
3-7	小笠原諸島の世界遺産の区域	53

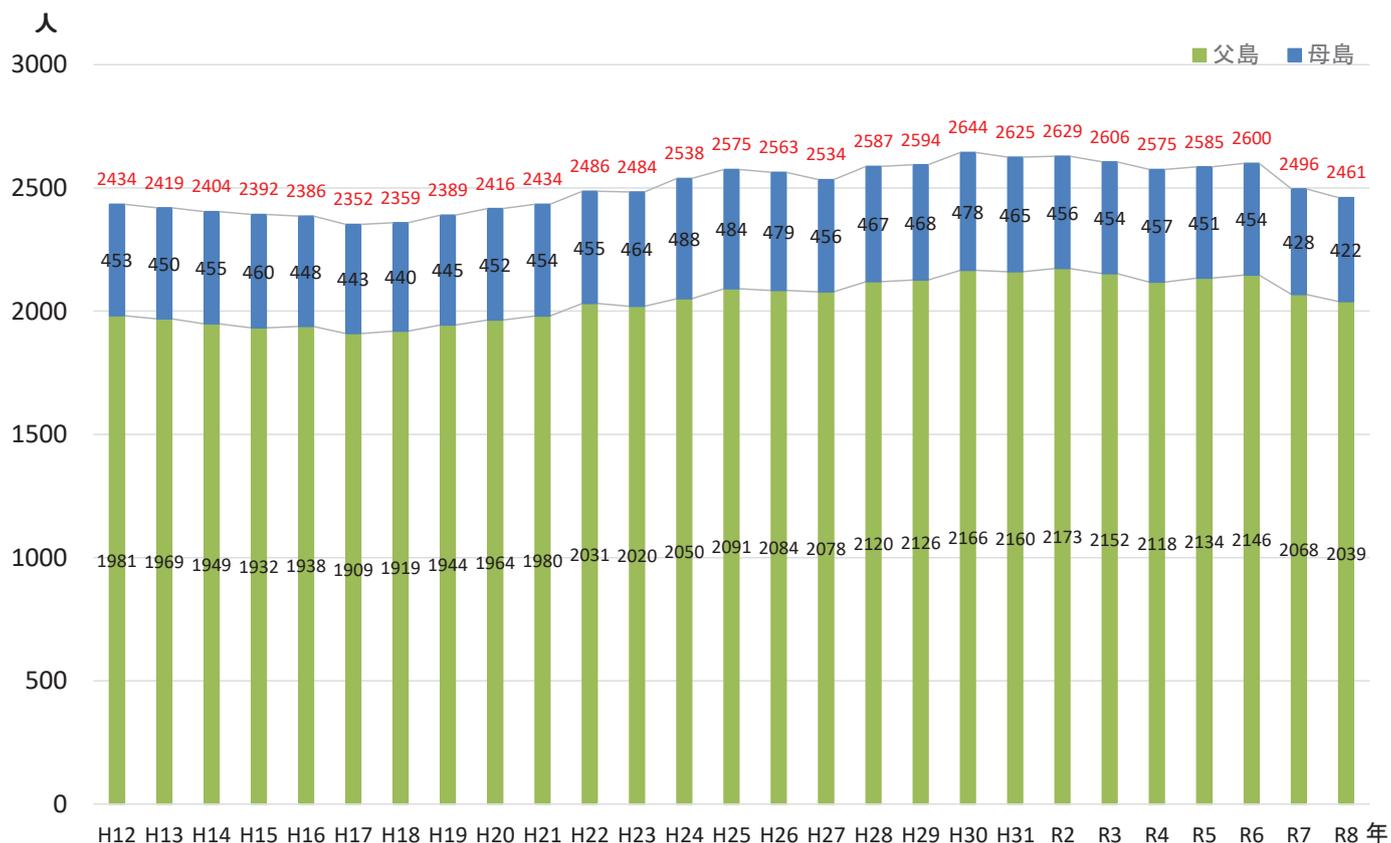
1. 小笠原諸島の社会的状況（生活、産業）

- 1-1 小笠原村の人口の推移
- 1-2 小笠原世界遺産関連の事業費推移
- 1-3 小笠原村の給水量の推移
- 1-4 小笠原村のごみ量・リサイクル率の推移
- 1-5 来島者数（おがさわら丸、ははしま丸、観光船）
- 1-6 施設利用者数（小笠原世界遺産センター、
ビジターセンター、海洋センター、ローズ記念館）
- 1-7 村営バスの利用状況（利用者数、売上額）
- 1-8 ラム酒販売本数
- 1-9 入林者数の推移（父島、母島）
- 1-10 南島上陸者数の推移
- 1-11 小笠原諸島における許認可件数の推移
- 1-12 観光満足度調査の結果
- 1-13 水揚げ量（父島漁協、母島漁協）
- 1-14 農産物生産額

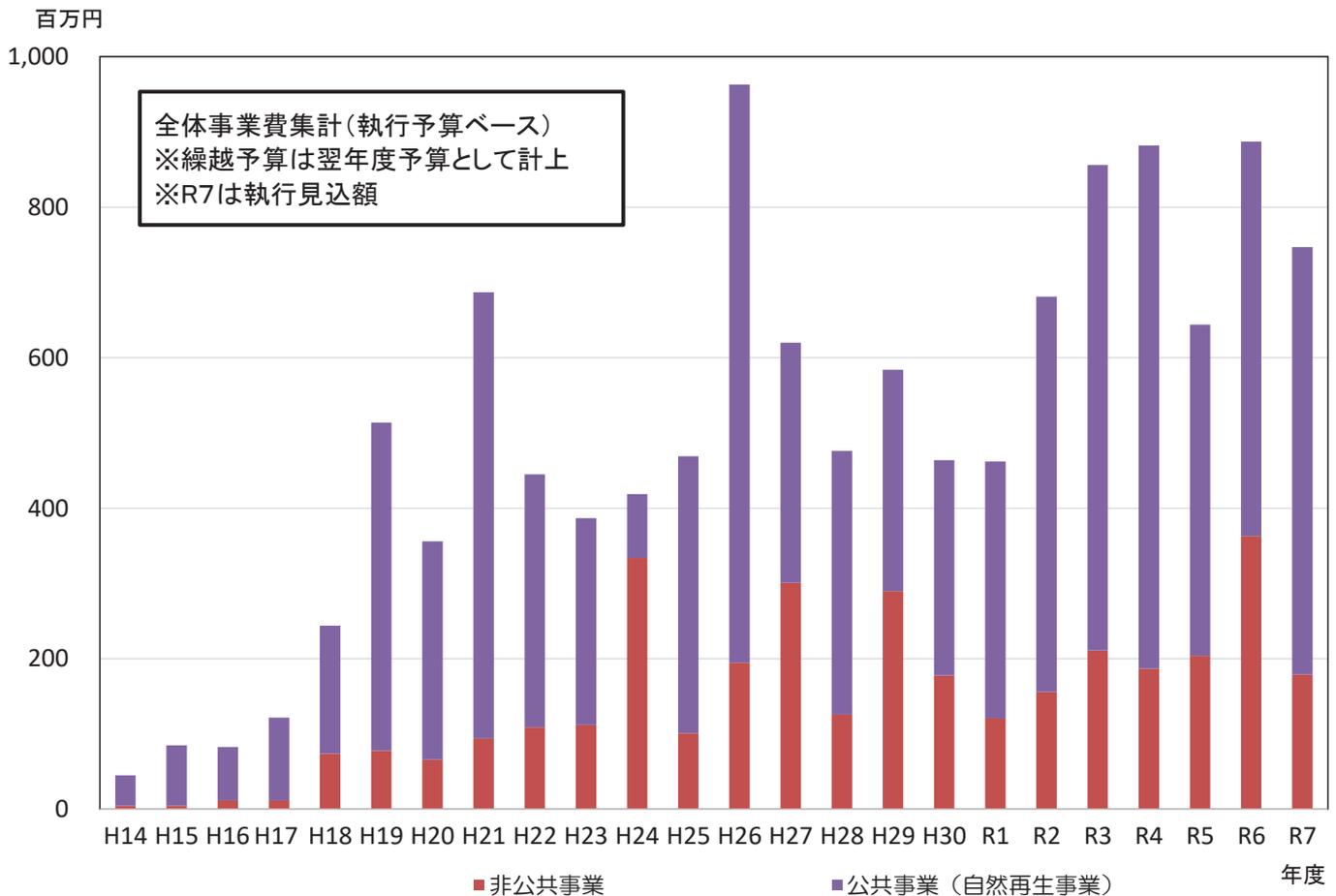
1-1 小笠原村の人口の推移

○平成12年以降の人口の推移

数値は住基人口で各年1月1日時点

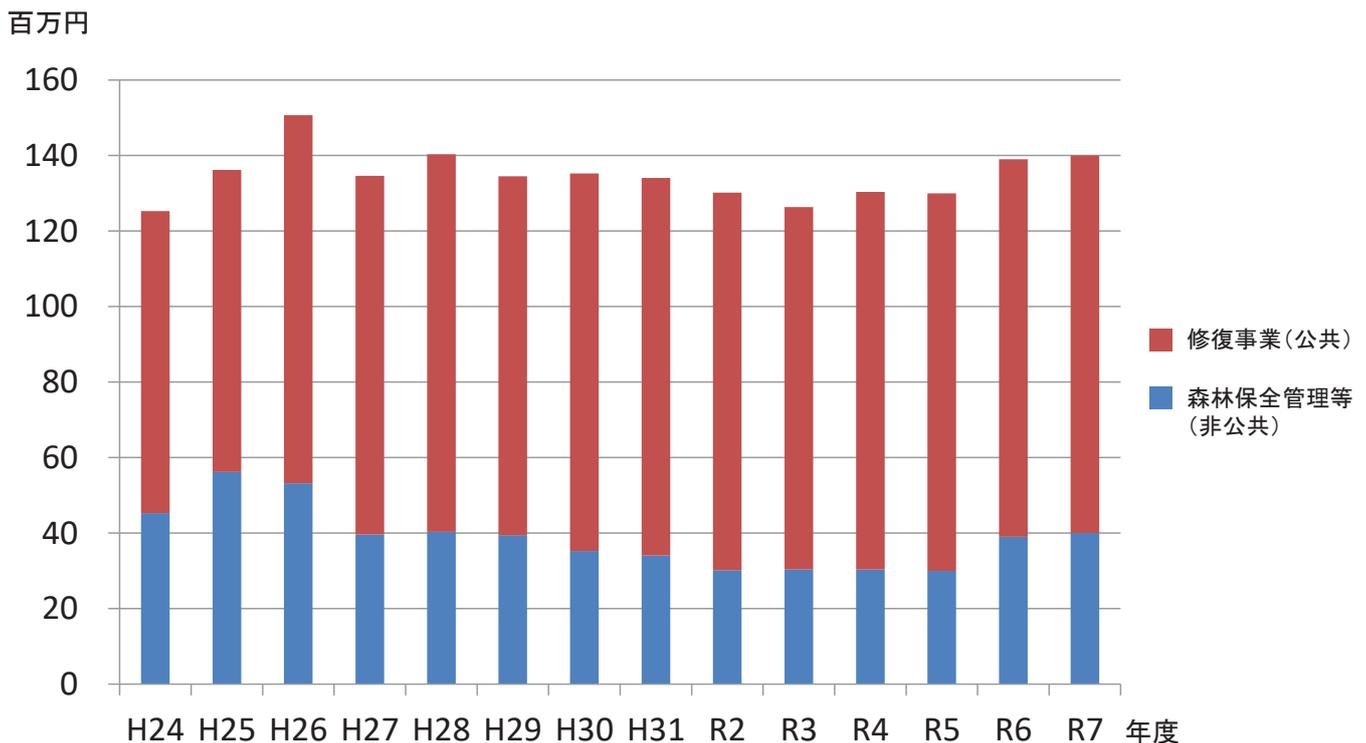


1-2 小笠原世界遺産関連の事業費推移（環境省）



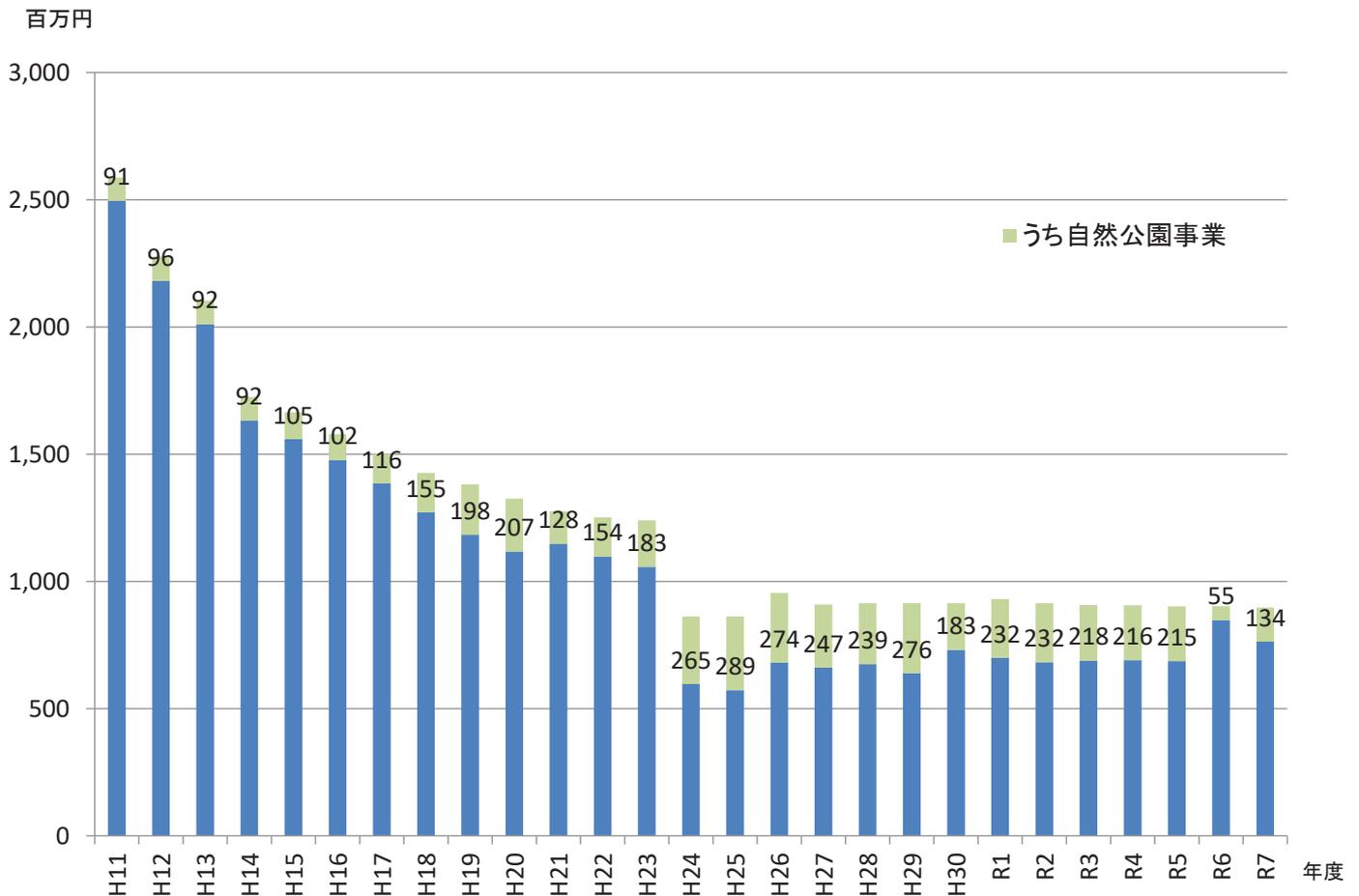
1-2 小笠原世界遺産関連の事業費推移（林野庁）

林野庁小笠原外来種対策等事業費内訳

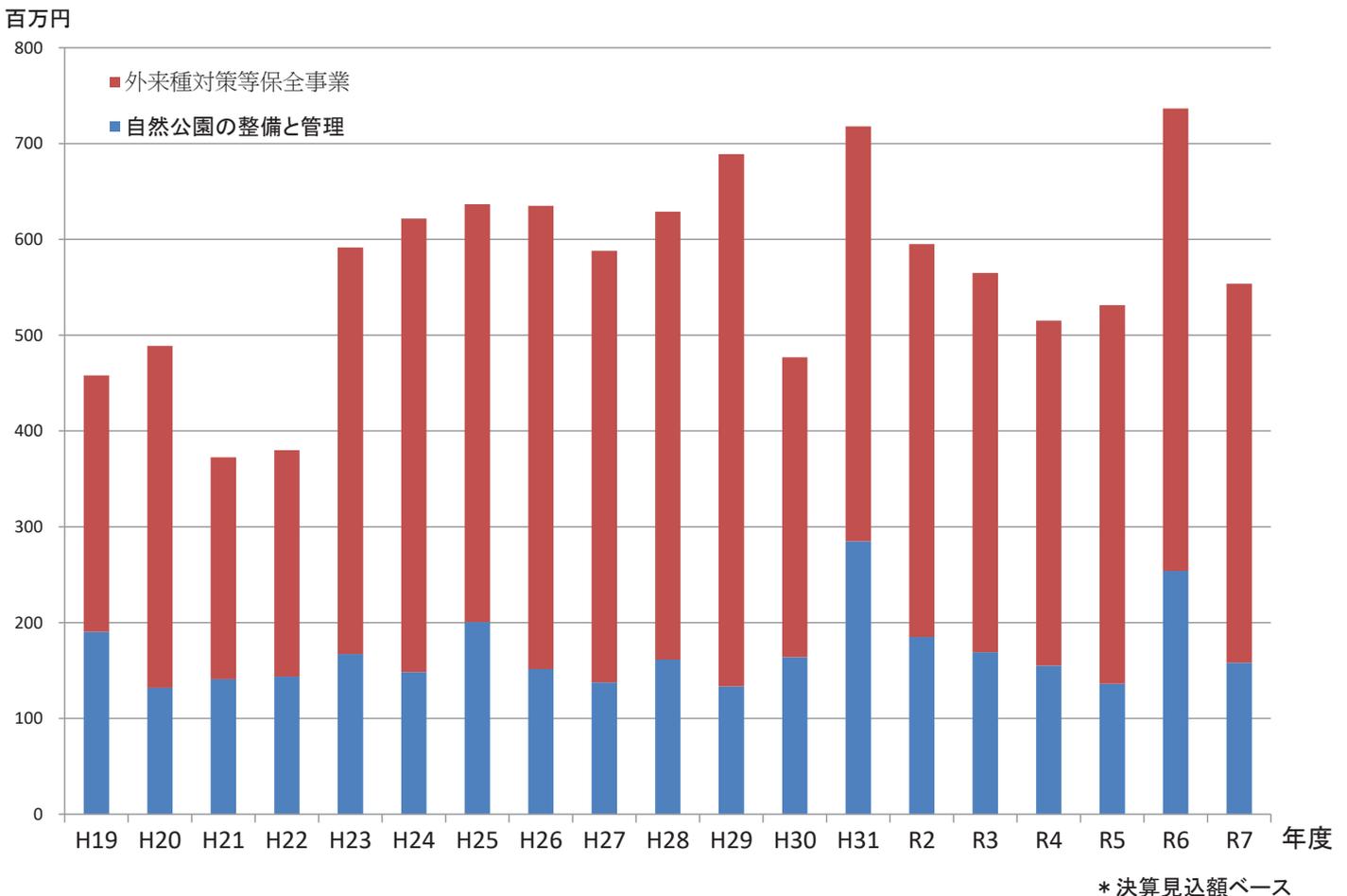


注: 森林保全管理等とは、保護林等整備・保全対策、希少野生生物保護管理対策である。

1-2 小笠原諸島振興開発事業費推移

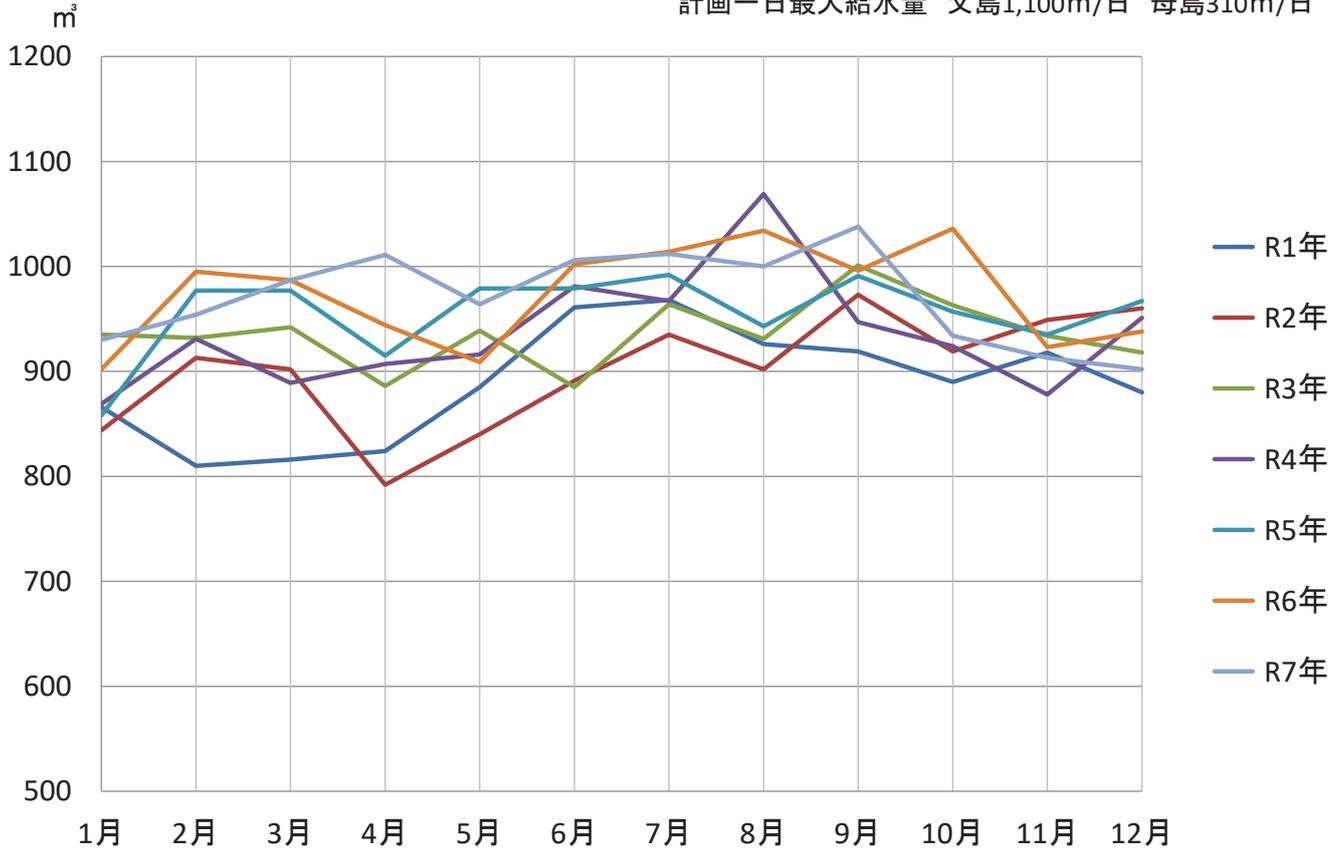


1-2 小笠原世界遺産関連の事業費推移（東京都）

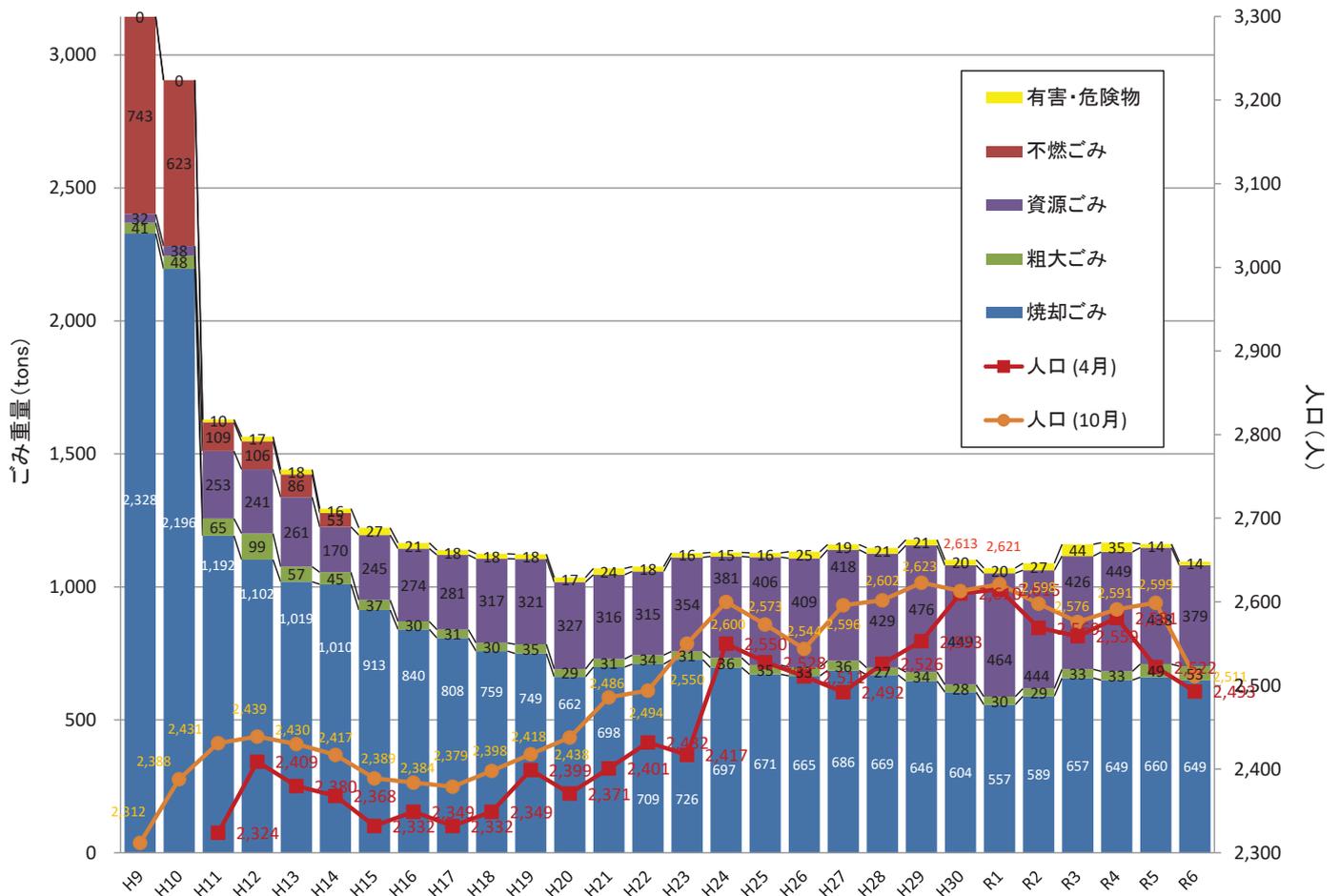


1-3 小笠原村の給水量の推移

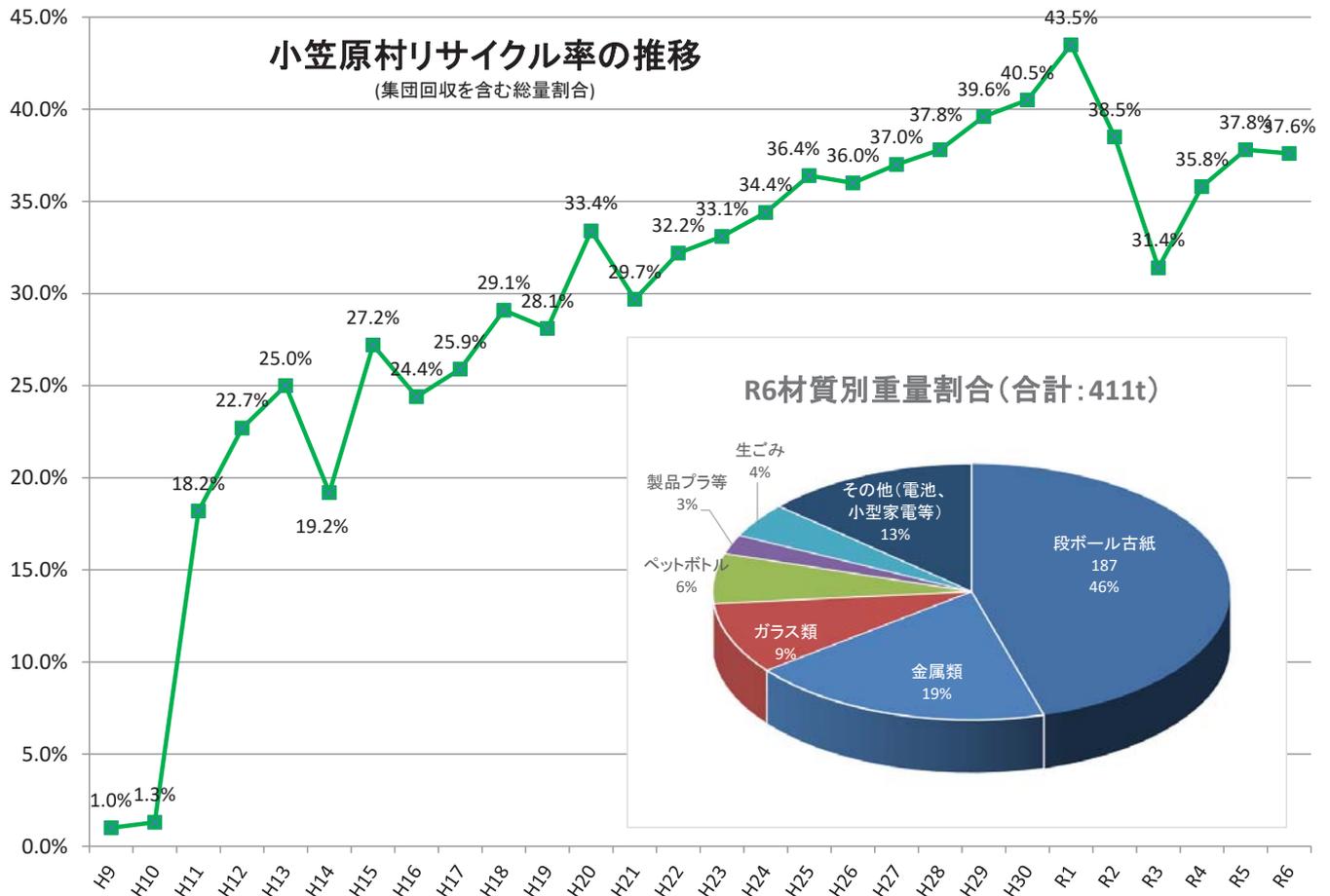
計画一日最大給水量 父島1,100m³/日 母島310m³/日



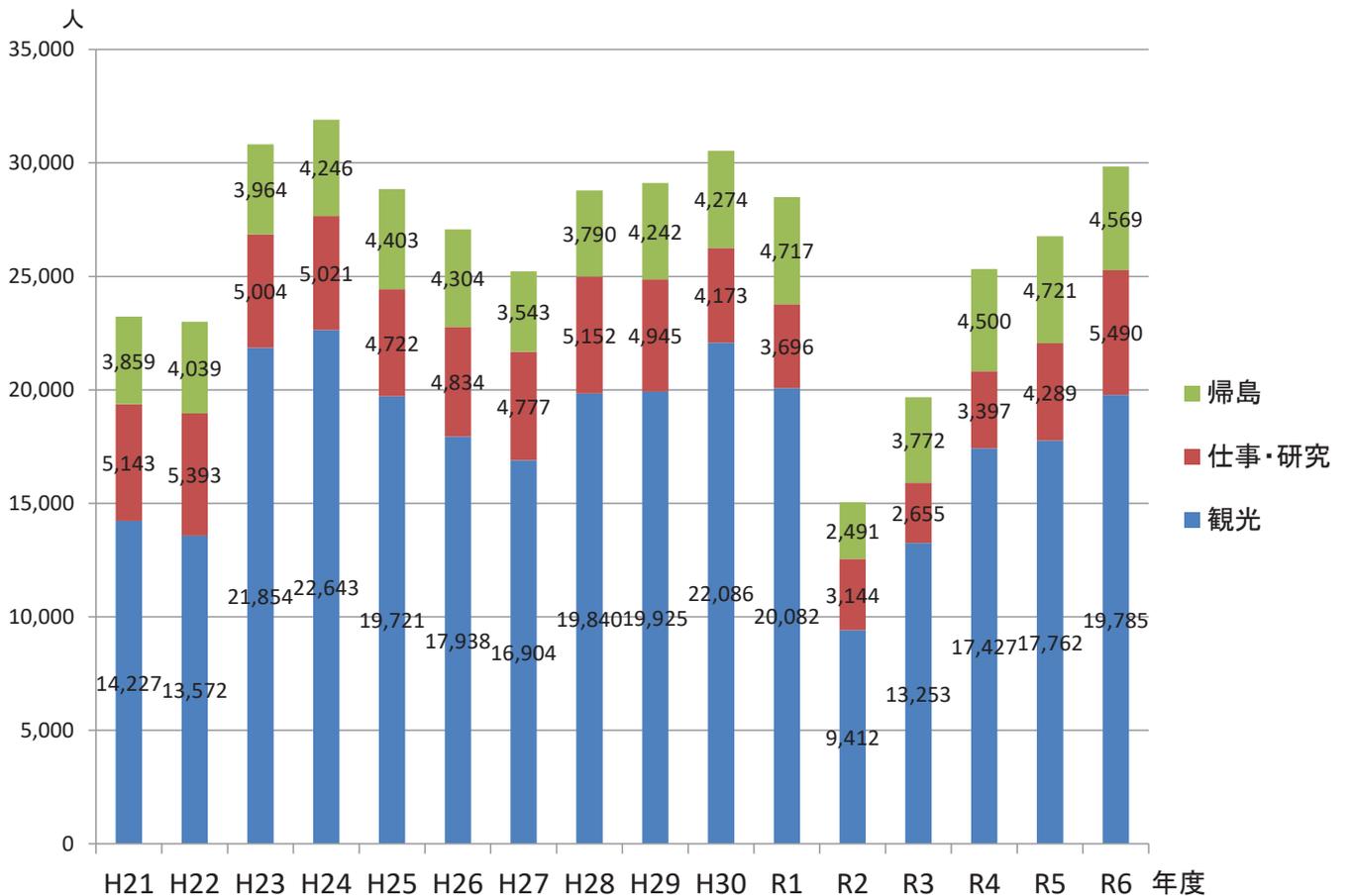
1-4 小笠原村のごみ量の推移



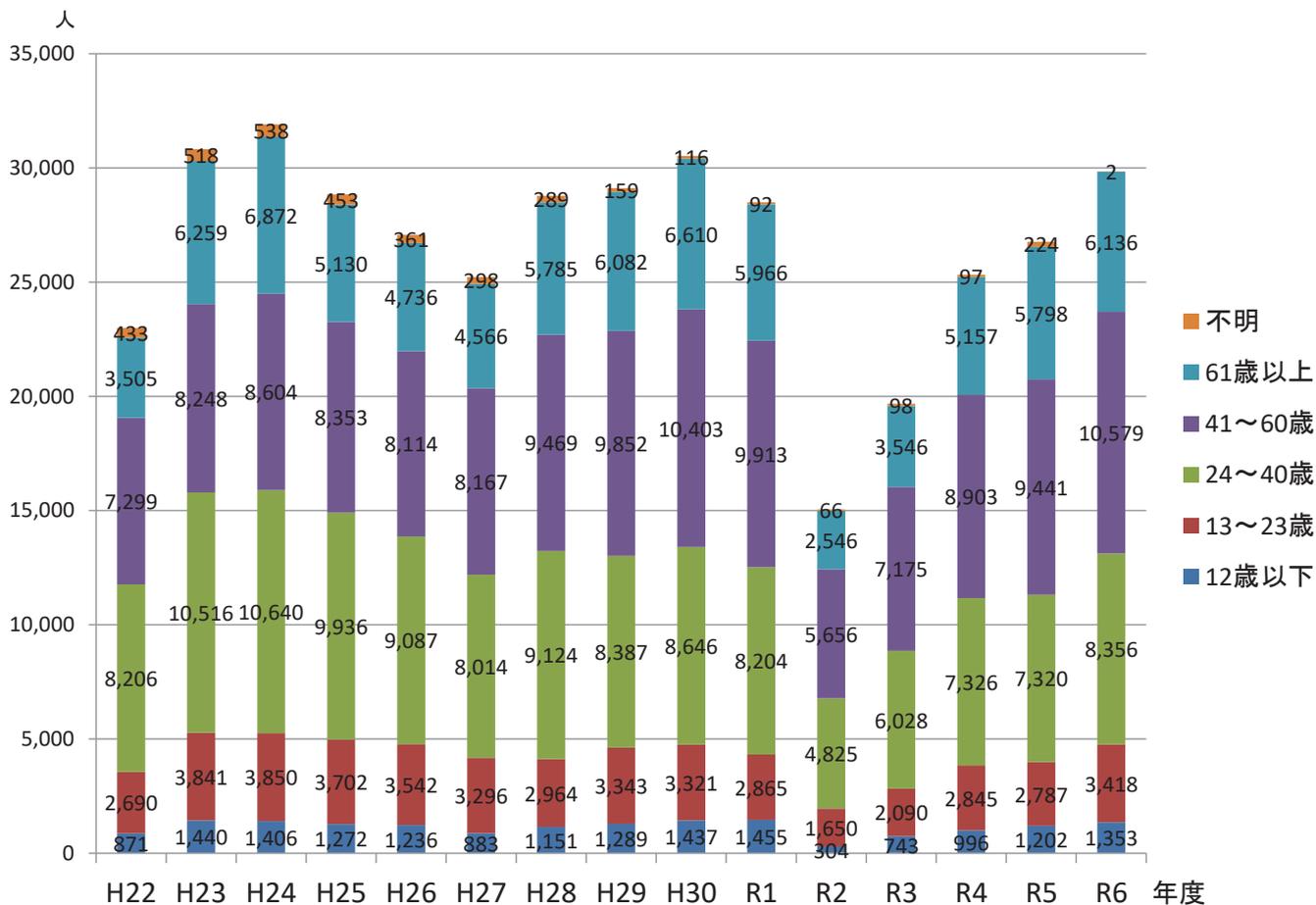
1-4 小笠原村のリサイクル率の推移



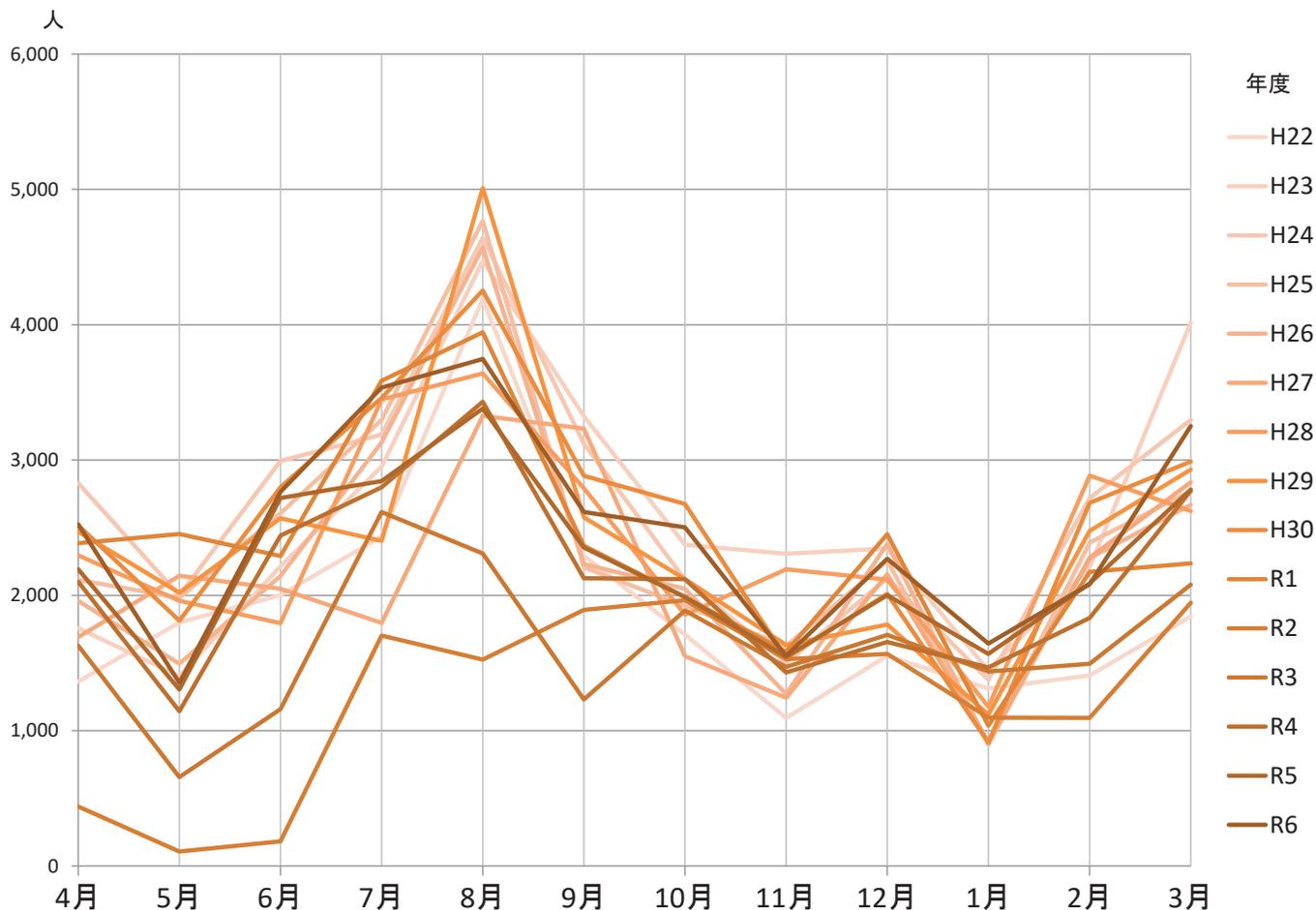
1-5 来島者数 (おがさわら丸 目的別)



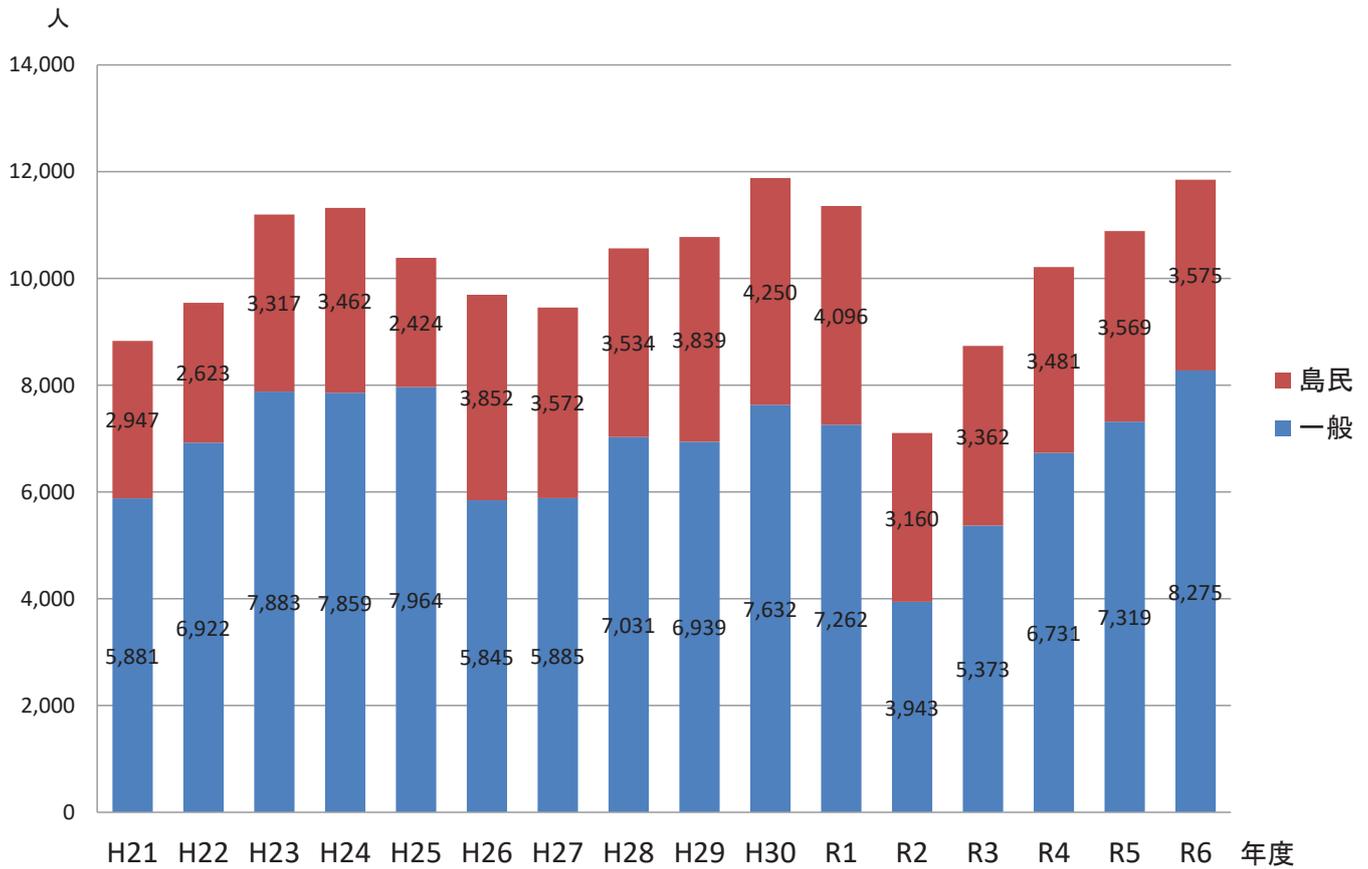
1-5 来島者数（おがさわら丸 年齢別）



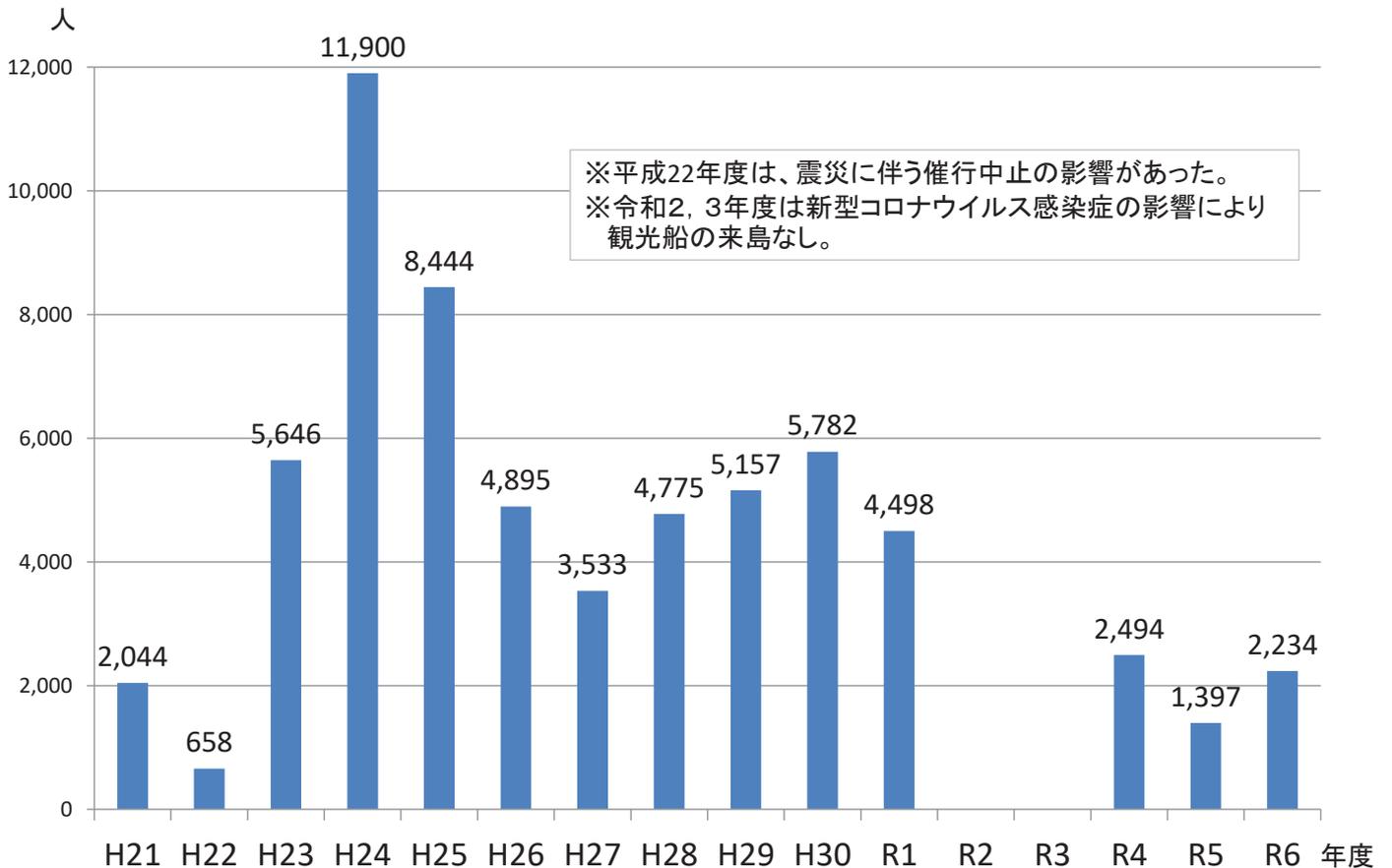
1-5 来島者数（おがさわら丸 月別）



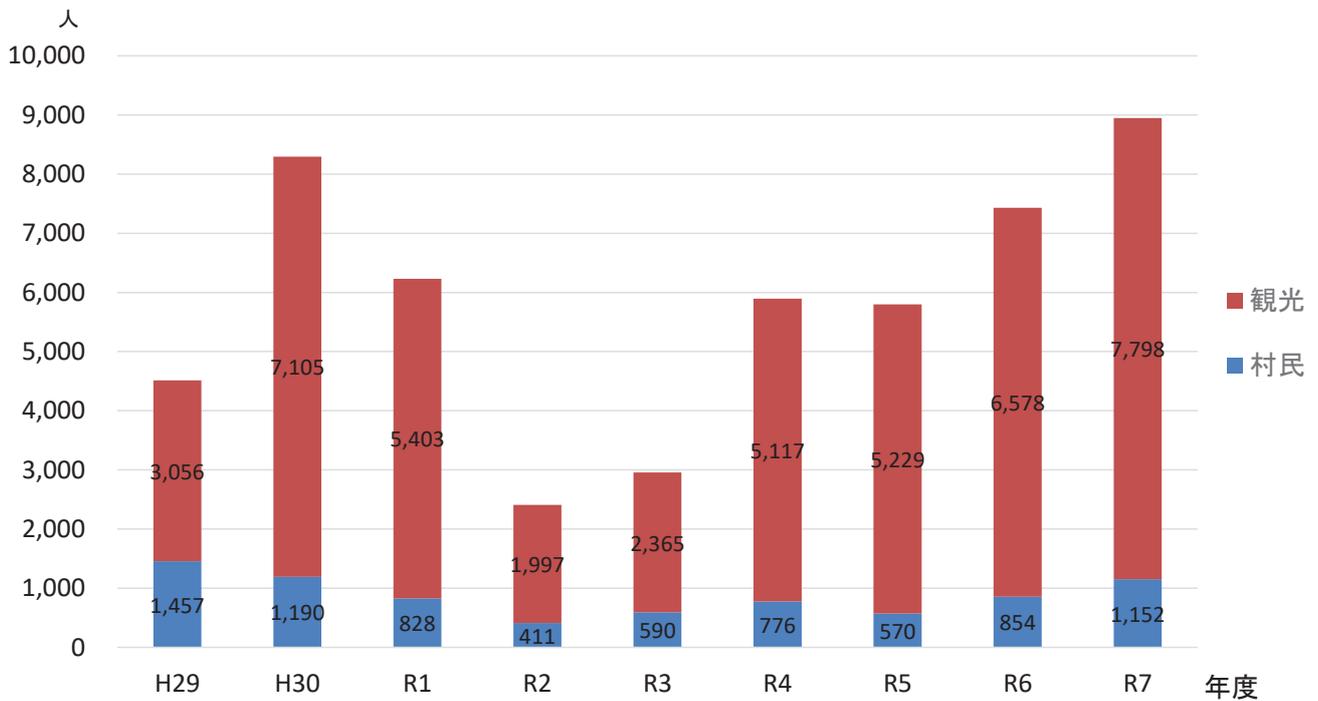
1-5 来島者数（ははじま丸）



1-5 来島者数（観光船）



1-6 施設利用者数（小笠原世界遺産センター入館者数）



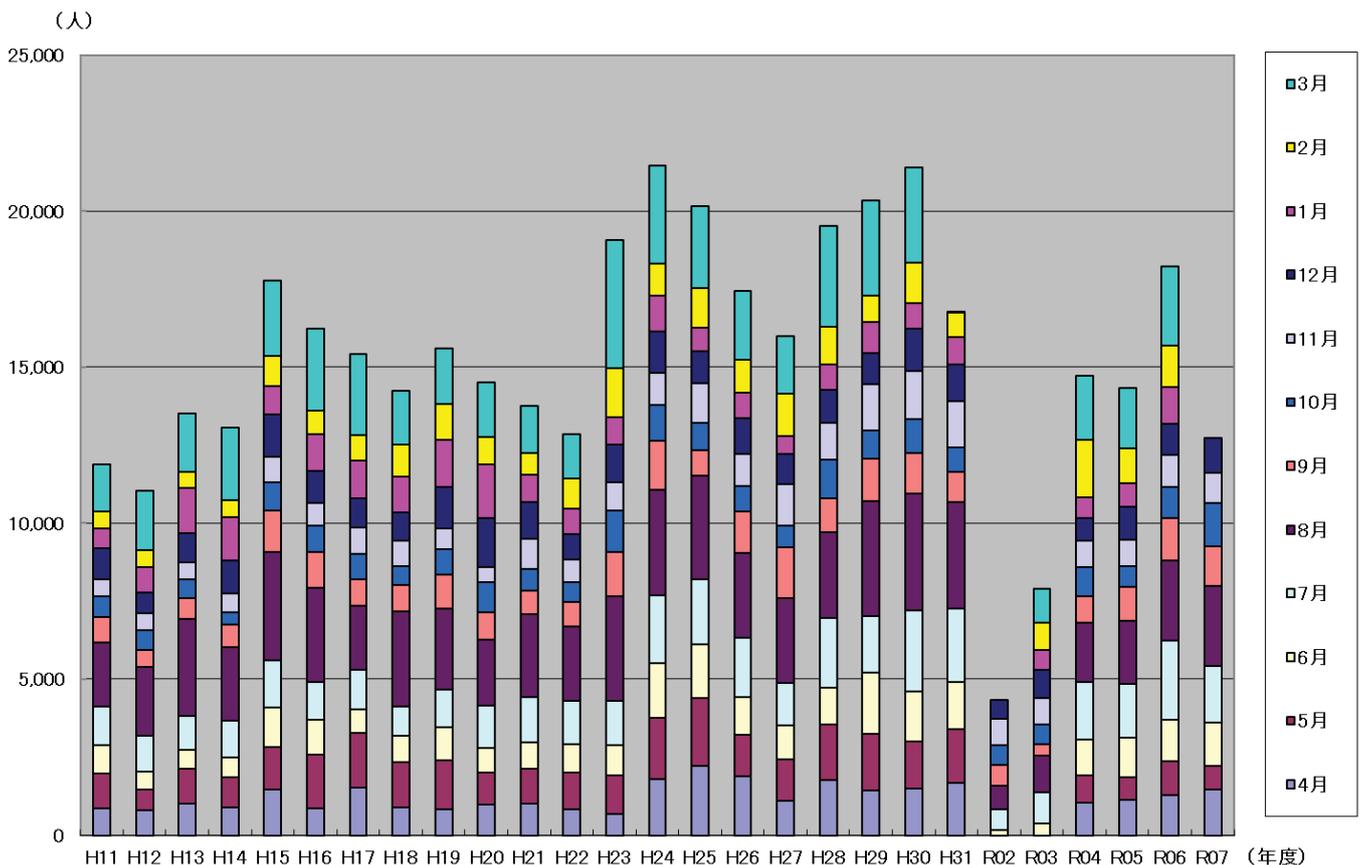
《開館日》

おがさわら丸および観光船入港中
9:00~17:00

※着発期間および年末年始は不定期休館

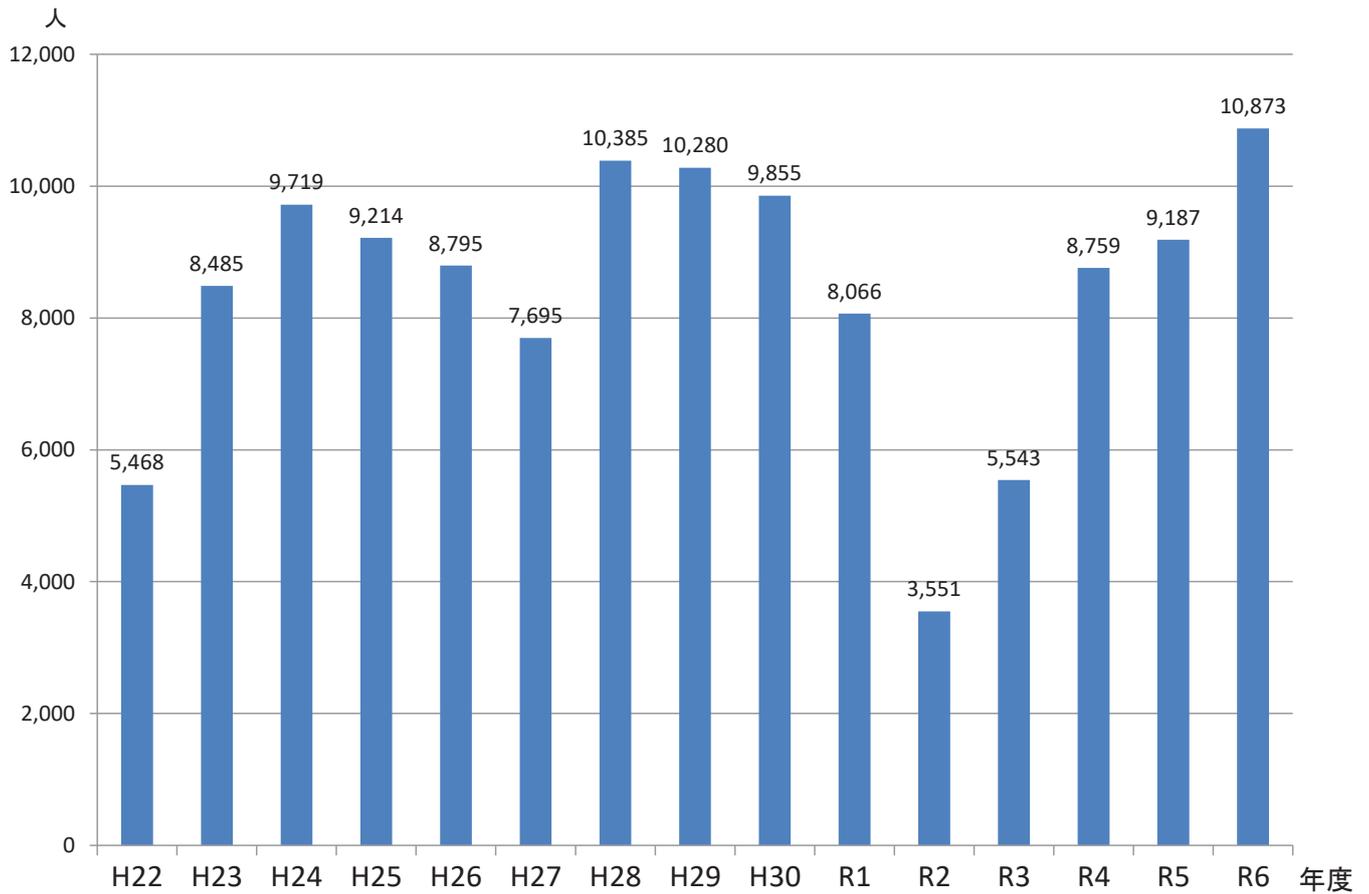
※ H29年度は6月からの入館者数
R7年度は2月末日現在

1-6 施設利用者数（ビジターセンター入館者数）

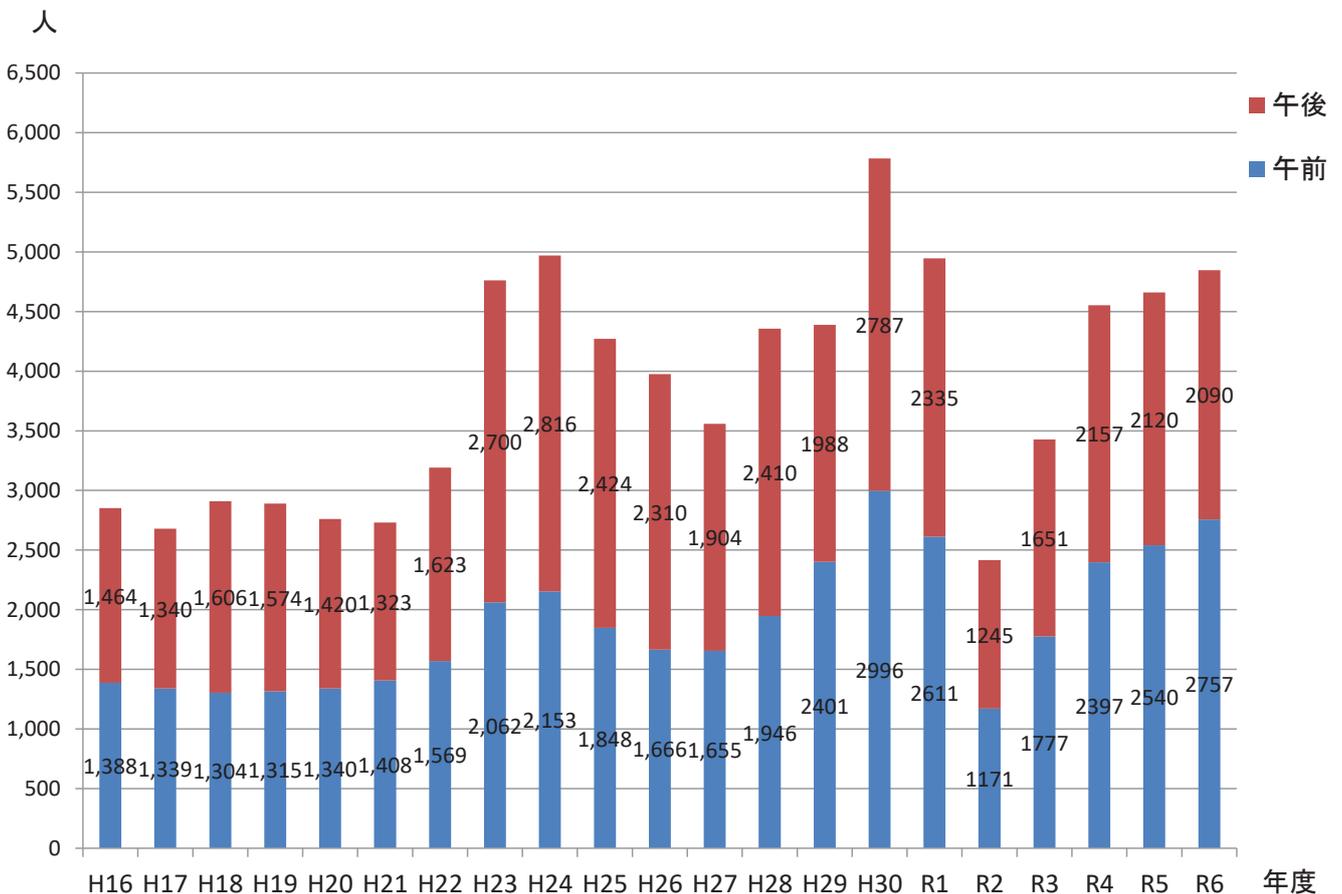


【参考】入館者であるため、島民も含む。また、複数回の入館者も含む。
令和7年度は12月末日時点

1-6 施設利用者数（海洋センター）

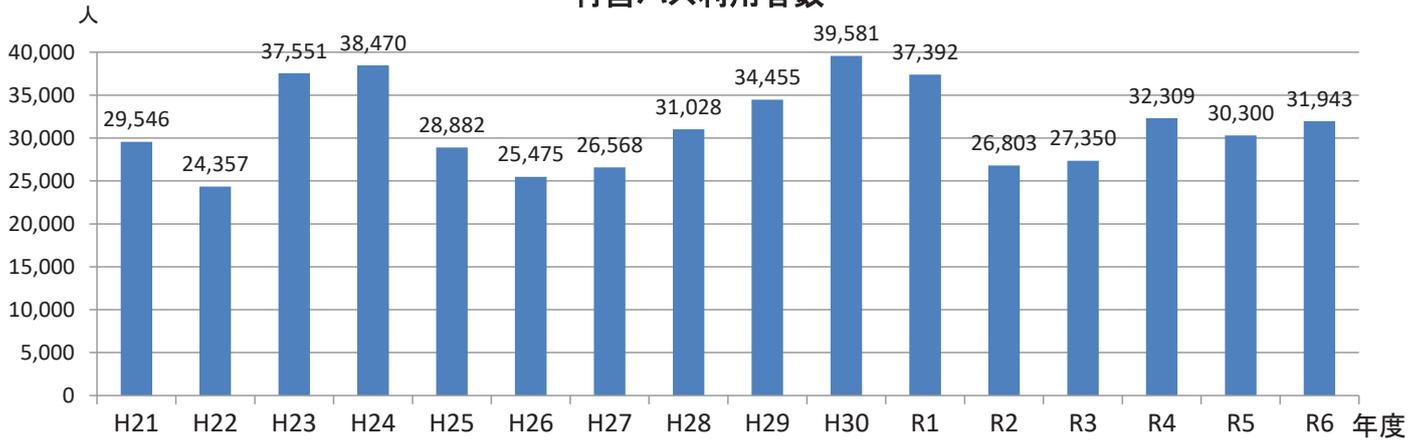


1-6 施設利用者数推移（ロース記念館）

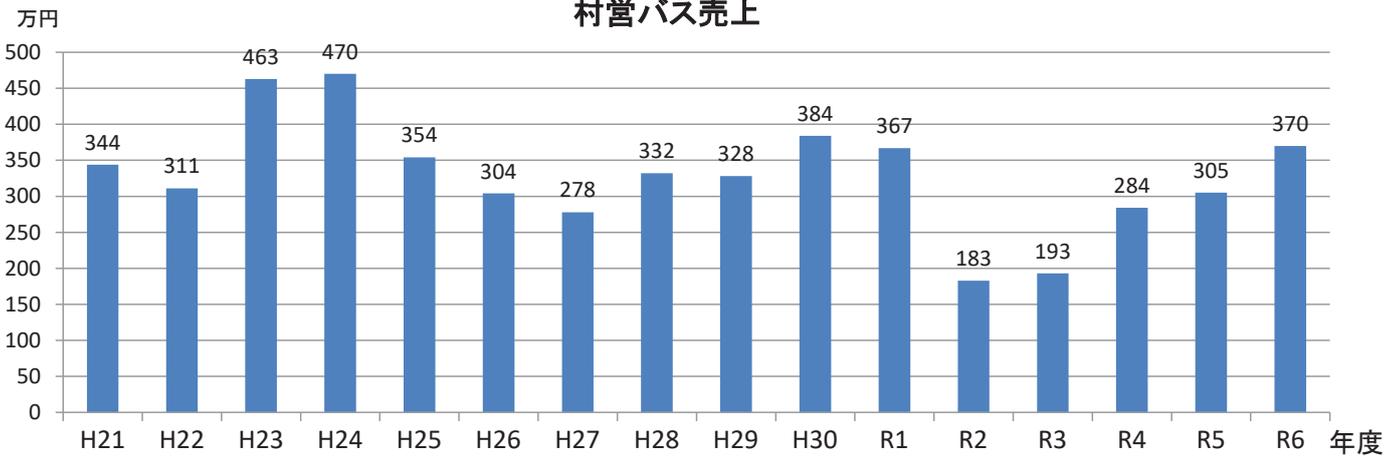


1-7 村営バスの利用状況

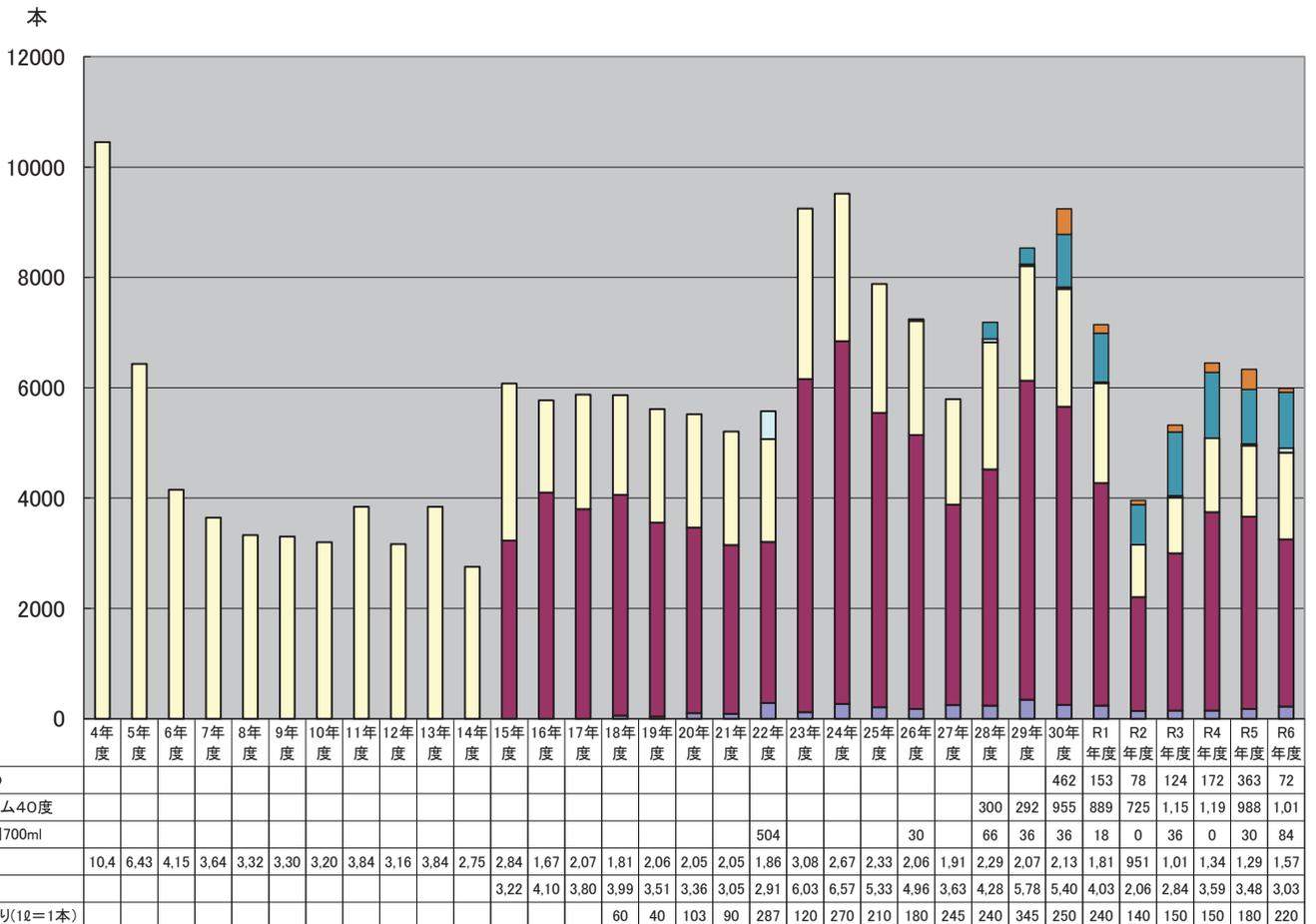
村営バス利用者数



村営バス売上

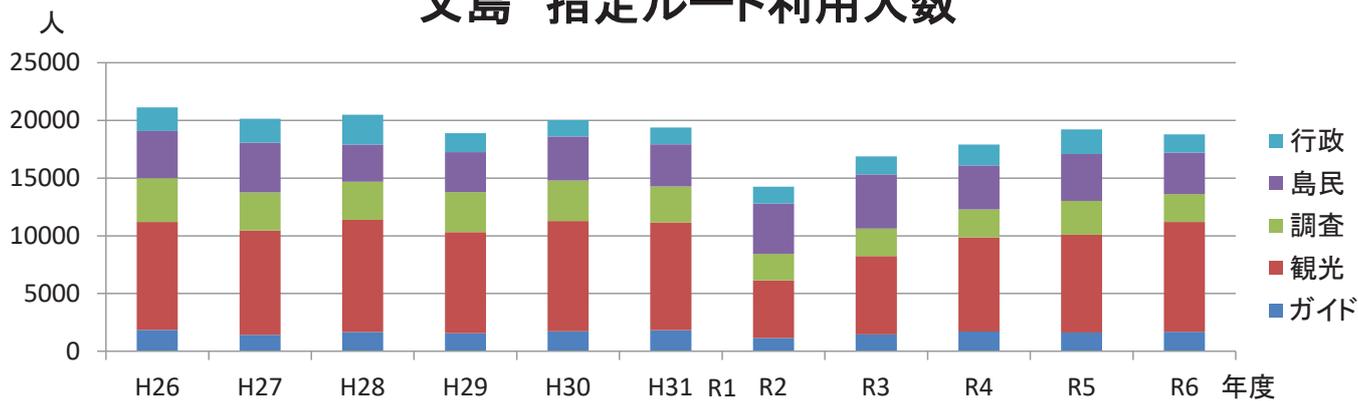


1-8 ラム酒販売本数

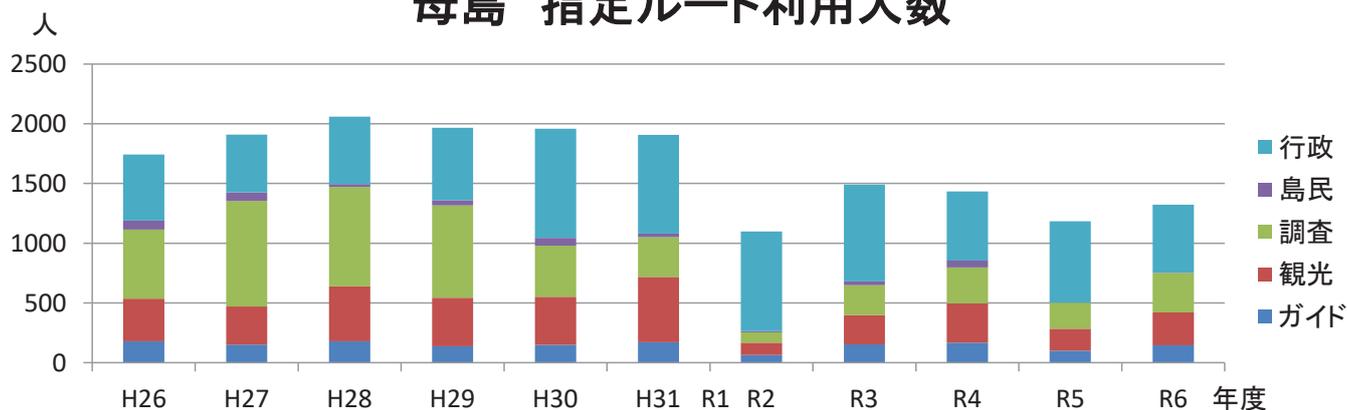


1-9 入林者数の推移（父島、母島）

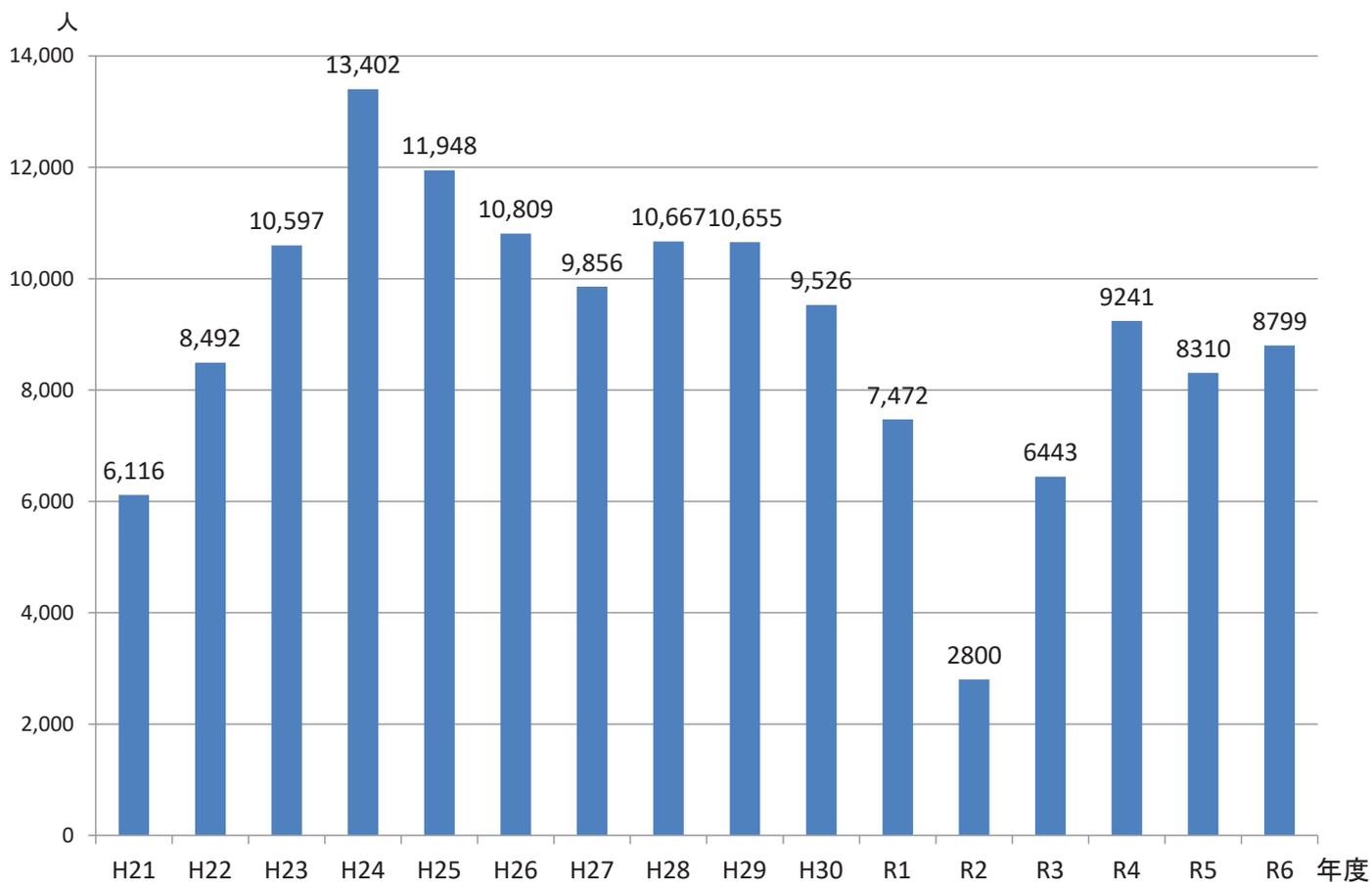
父島 指定ルート利用人数



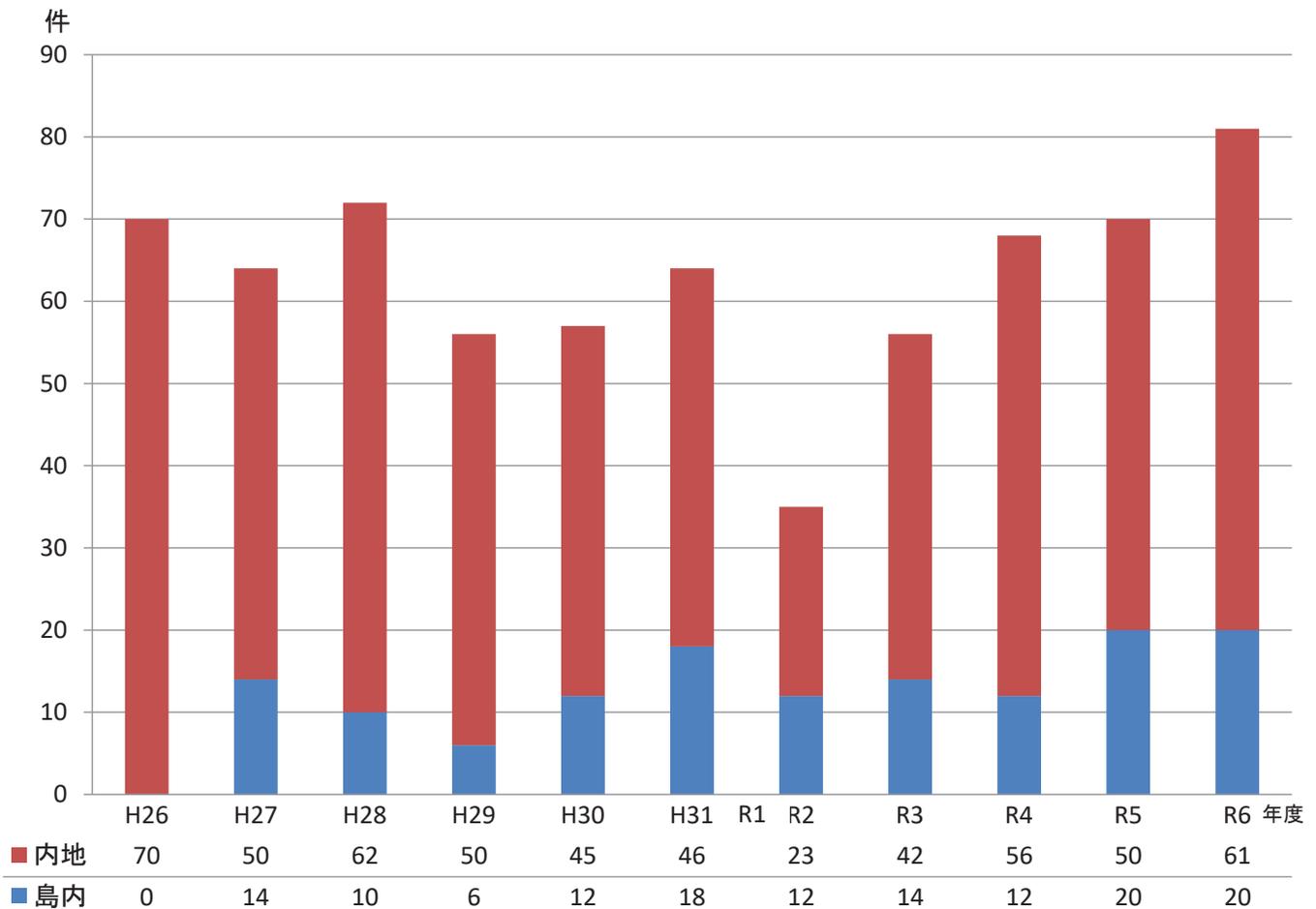
母島 指定ルート利用人数



1-10 南島上陸者数の推移（年度別）



1-11 小笠原諸島における許認可件数の推移（国有林入林許可件数）



1-12 観光満足度調査の結果

1. 主要項目満足度

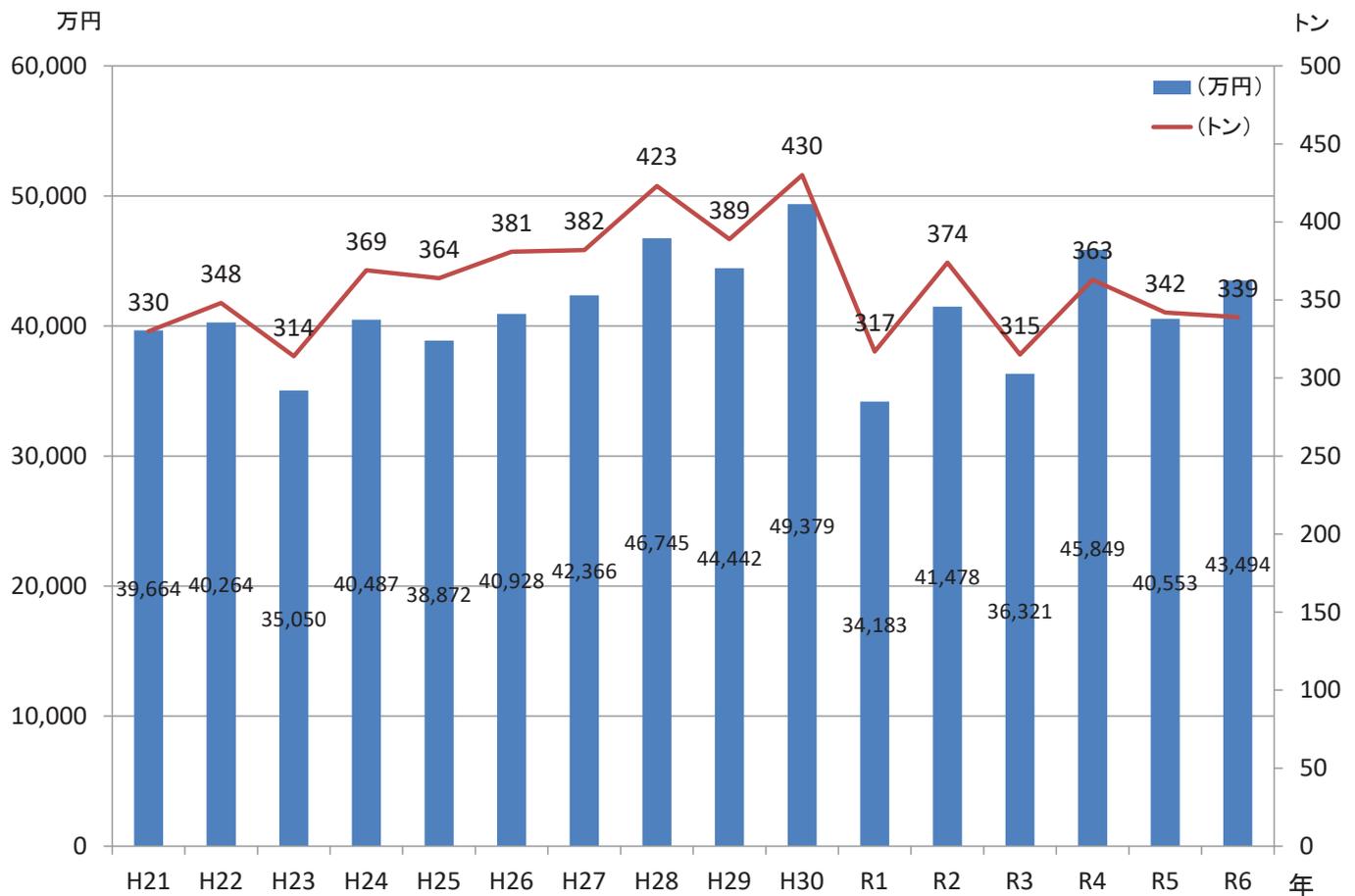
年度	おがさわら丸	自然資源	おもてなし	宿泊施設	食事(外食)	土産品	再来訪意向	推奨意向	総合満足度
平成22年度	0.97	2.51	2.24	1.96	—	1.00	2.18	1.90	2.04
平成23年度	0.69	2.38	2.15	1.82	—	0.87	1.91	1.78	1.83
平成24年度	0.51	2.43	2.13	1.79	—	0.94	1.95	1.86	1.87
平成25年度	0.80	2.56	2.21	1.98	—	1.08	2.19	2.02	2.08
平成26年度	1.01	2.56	2.23	2.01	1.58	1.05	2.11	1.98	2.16
平成27年度	0.92	2.57	2.30	2.07	1.55	1.11	2.08	1.96	2.16
平成28年度	1.63	2.59	2.27	2.12	1.68	1.24	2.18	2.01	2.21
平成29年度	2.03	2.51	2.25	1.97	1.61	1.23	2.10	2.02	2.13
平成30年度	1.92	2.58	2.28	2.03	1.70	1.32	2.11	2.06	2.19
令和元年度	1.89	2.55	2.28	1.98	1.79	1.31	2.20	2.03	2.14
令和2年度	1.85	2.54	2.19	1.67	1.75	1.31	2.38	2.13	2.22
令和3年度	2.01	2.61	2.33	2.01	1.82	1.46	2.41	2.19	2.31
令和4年度	2.09	2.57	2.30	2.07	1.79	1.79	2.36	2.19	2.35
令和5年度	2.00	2.54	2.26	2.11	1.80	1.26	2.32	2.13	2.33
令和6年度	2.07	2.61	2.28	2.10	1.87	1.39	2.30	2.12	2.35
5-6年度比較	0.07	0.07	0.02	-0.01	0.07	0.13	-0.02	-0.01	0.02

2. ツアー満足度

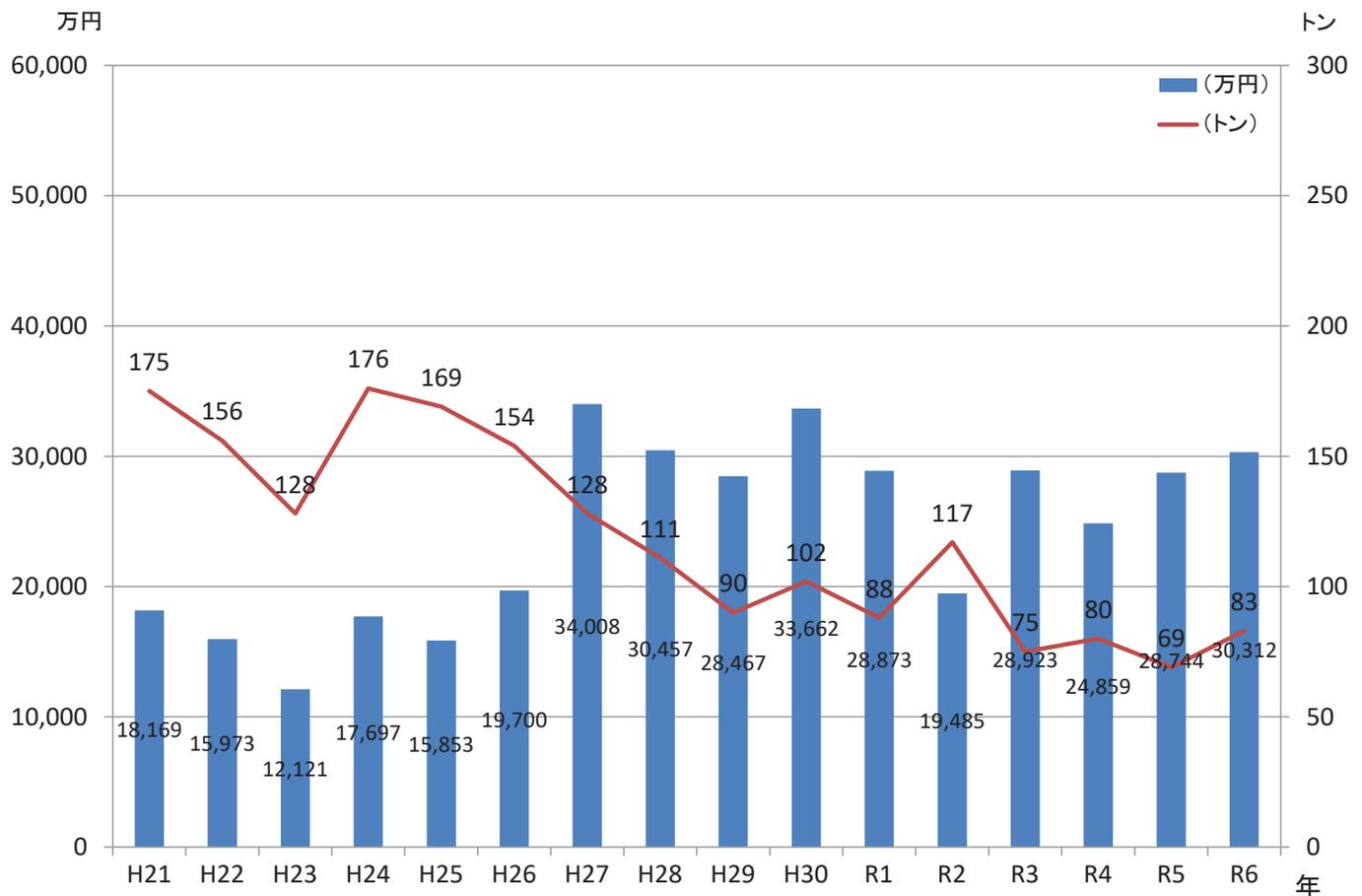
年度	イルカ・クジラウォッチング	ダイビング	ドルフィンスイム	カヤック	トレッキング	島内観光	ナイトツアー	戦跡ツアー	南島観光
平成22年度	2.12	2.14	2.27	2.47	2.18	1.90	1.99	2.00	2.32
平成23年度	1.80	2.14	1.62	2.06	2.13	1.86	1.71	1.81	1.95
平成24年度	1.85	1.95	1.75	2.16	2.13	1.90	1.79	1.99	2.19
平成25年度	2.22	2.36	2.00	2.31	2.32	2.02	2.04	2.31	2.36
平成26年度	2.11	2.42	1.91	2.21	2.23	2.10	1.95	2.29	2.21
平成27年度	2.09	2.39	2.04	2.32	2.34	1.92	2.02	2.14	2.31
平成28年度	2.19	2.33	1.88	2.36	2.39	2.12	2.05	2.20	2.40
平成29年度	2.15	2.17	2.04	2.20	2.29	2.00	2.01	2.00	2.40
平成30年度	2.15	2.27	1.99	2.17	2.39	2.12	2.23	2.08	2.29
令和元年度	2.11	2.26	1.73	2.24	2.35	2.11	2.17	2.16	2.21
令和2年度	2.30	2.29	2.19	2.52	2.39	2.16	2.16	2.35	2.48
令和3年度	2.20	2.36	2.14	2.66	2.53	2.23	2.28	2.36	2.47
令和4年度	2.35	2.35	2.15	2.52	2.52	2.55	2.31	2.45	2.55
令和5年度	2.36	2.44	2.15	2.61	2.55	2.52	2.35	2.25	2.61
令和6年度	2.42	2.50	2.23	2.58	2.50	2.40	2.35	2.41	2.52
5-6年度比較	0.06	0.06	0.08	-0.03	-0.02	0.05	0.10	0.09	-0.03

※ 加重平均 非常に満足3点、満足2点、やや満足1点、普通0点、やや不満-1点、不満-2点、非常に不満-3点として平均値を算出。
 ※ アンケートは「普通」以上に評価する傾向があり、加重平均2.00以上は高評価で、1.00以上は普通からやや好評価と考えられる。

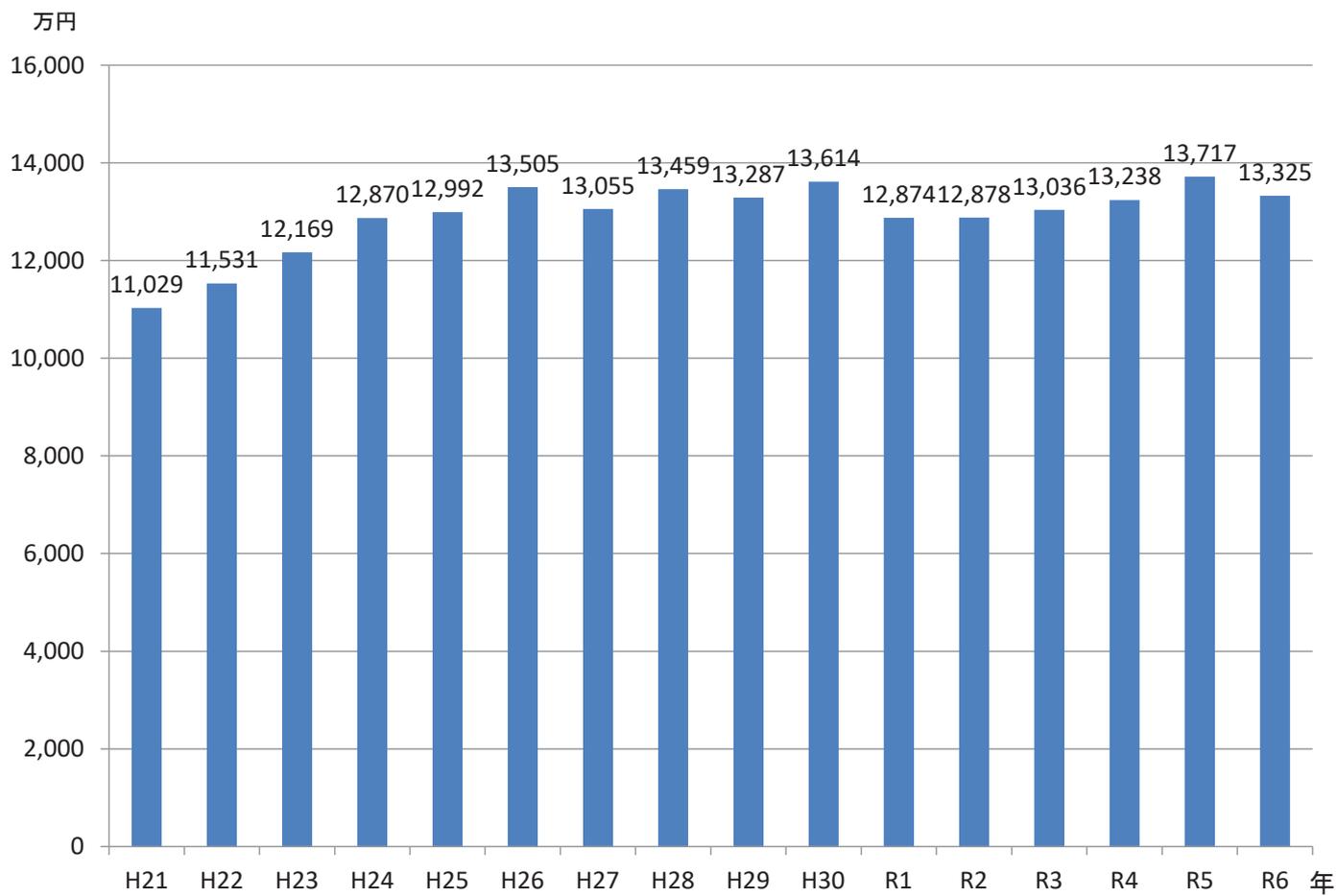
1-13 水揚げ量（父島漁協）



1-13 水揚げ量（母島漁協）



1-14 農産物生産額（父島・母島）

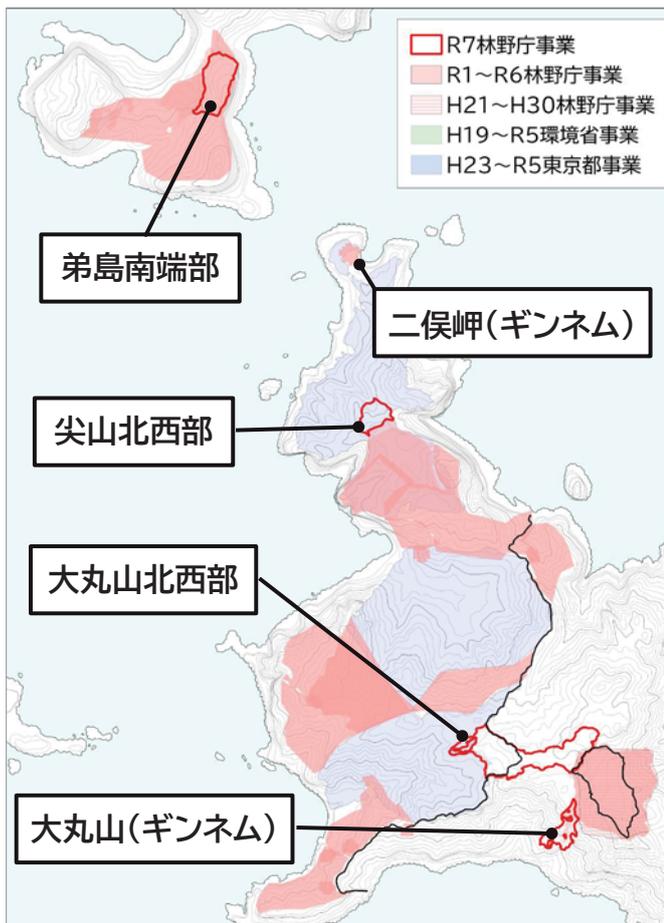


2. 小笠原諸島の生物多様性の保全対策の進展

- 2-1 森林生態系修復事業の実施状況
- 2-2 植生回復事業の実施状況
- 2-3 希少植物の保全状況
- 2-4 ネズミ防除対策の状況
- 2-5 陸産貝類の保全状況
- 2-6 陸産貝類の生息を脅かす外来種対策の状況
- 2-7 希少昆虫類の保全状況 (ハンミョウ、トンボ、シジミ、セセリ)
- 2-8 グリーンアノール防除対策の状況
- 2-9 希少鳥獣類の保全状況 (カラスバト、カワラヒワ、オオコウモリ等)
- 2-10 ノネコへの対応状況
- 2-11 新たな外来種の侵入・拡散防止対策の実施
- 2-12 西之島総合学術調査事業
- 2-13 住民参加・普及啓発等

※各資料タイトル帯の右端に、実施機関を示した。(環):環境省、(林):林野庁、(都):東京都、(村):小笠原村

2-1 森林生態系修復事業の実施状況 【父島列島 弟島・兄島】 (林)

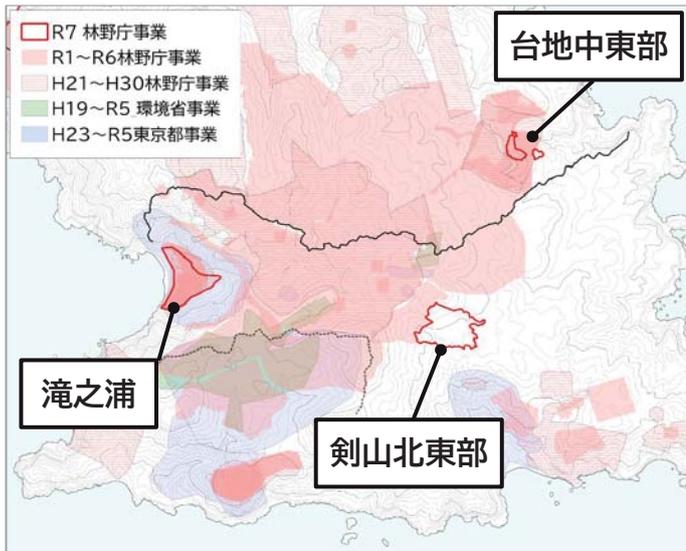


モクマオウ等の駆除(弟島)

地名	駆除本数	主な樹種
弟島南端部	2,777 本	モクマオウ、リュウキユマツ
尖山北西部	1,637 本	ギンネム、モクマオウ
大丸山北西部	1,515 本	モクマオウ、リュウキユマツ
大丸山	46,009 本	ギンネム、モクマオウ
二俣岬	1,338 本	ギンネム

2-1 森林生態系修復事業の実施状況【父島列島 兄島】

(林)



モクマオウ、リュウキュウマツの駆除(兄島)

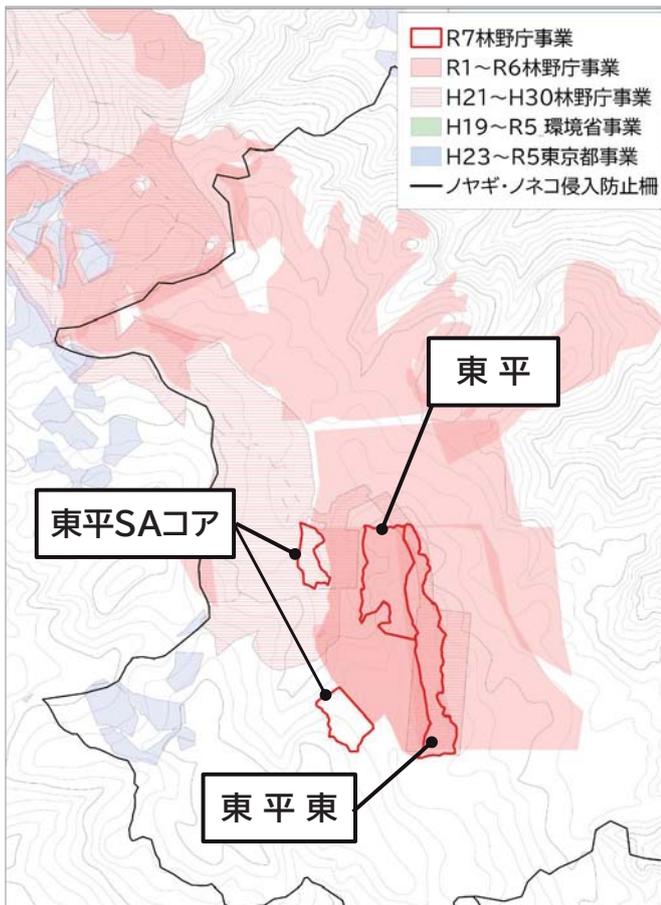


モモタマナの植栽(兄島)

地名	駆除本数	主な樹種
台地中東部	2,491 本	モクマウ、リュウキュウマツ
剣山北東部	6,104 本	モクマウ、リュウキュウマツ
滝之浦	5,029 本	ギンム (駆除)
	10 本	モモタマナ (移植)
	50 本	モモタマナ (播種)

2-1 森林生態系修復事業の実施状況【父島列島 父島】

(林)

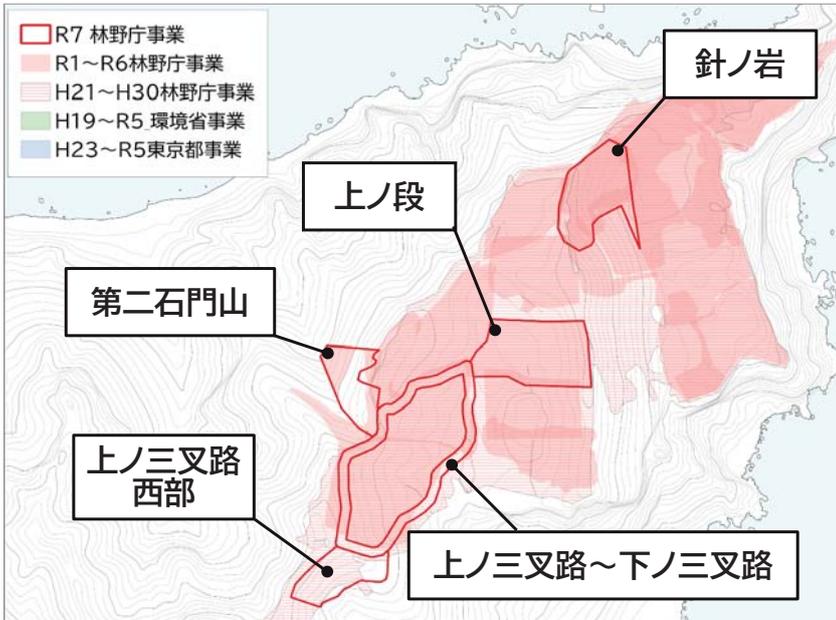


キバナジロウ、モクマオウ等の駆除地(父島)

地名	駆除本数	主な樹種
東平SAコア	8,345 本	キバナジロウ、リュウキュウマツ
東平	3,260 本	キバナジロウ、アカギ
東平東	3,236 本	キバナジロウ、リュウキュウマツ

2-1 森林生態系修復事業の実施状況【母島列島 石門】

(林)



アカギ、シマグワ、ガジユマル等の駆除(母島)

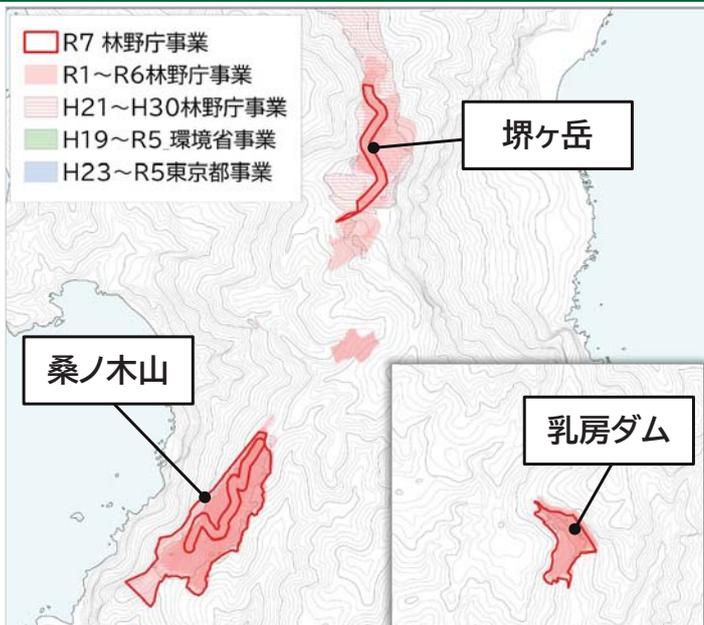


アカギの薬剤注入駆除(母島)

地名		駆除本数	主な樹種
石門	針ノ岩	6,757本	アカギ、シマグワ、ガジユマル
	上ノ段	1,254本	
	第二石門山	15,943本	
	上ノ三叉路～下ノ三叉路	62本	
	上ノ三叉路西部	435本	

2-1 森林生態系修復事業の実施状況【母島列島 堺ヶ岳～乳房ダム】

(林)



アカギの特殊伐採(母島)

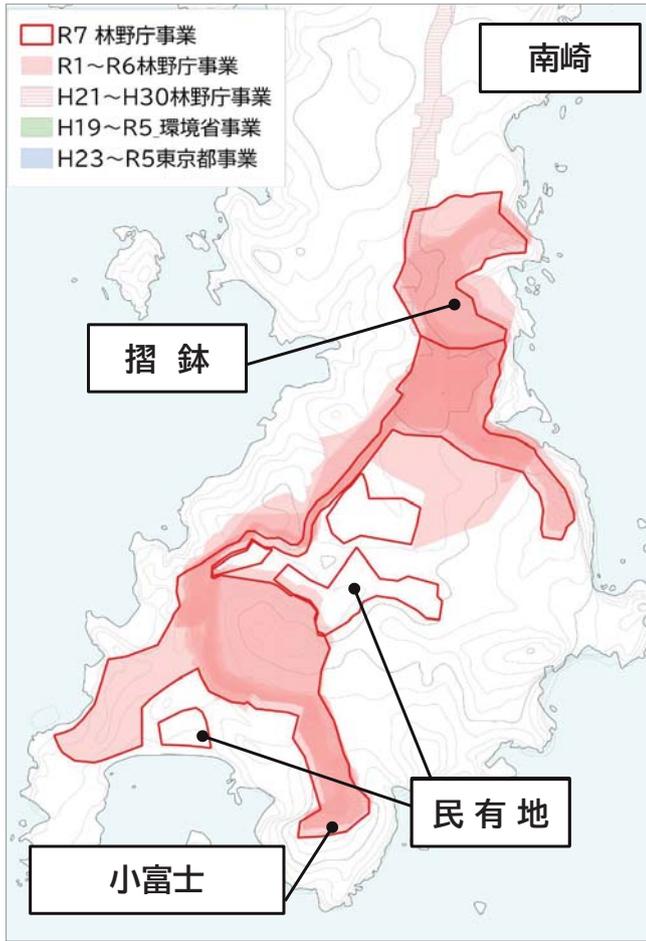
地名	駆除本数	主な樹種
堺ヶ岳	5本	アカギ(特殊伐採)
桑ノ木山	13本	アカギ(特殊伐採等)
	2,600本	アカギ、シマグワ、ガジユマル
	18本	アカツ、シハコトナ等(植栽)
乳房ダム上流部	2,373本	アカギ



伐採後の集材(母島)

2-1 森林生態系修復事業の実施状況【母島列島 南崎】

(林)



南崎摺鉢の外来植物対策



駆除前(令和4年)



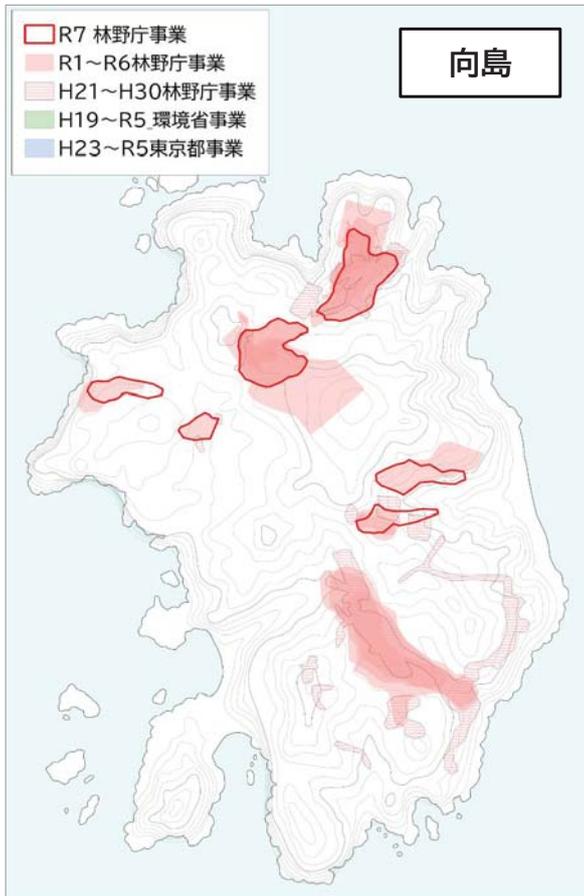
駆除後(令和7年) ※今後も対策を継続

地名	駆除本数	主な樹種
摺鉢周囲	8,340 本	ギンネム、モクマウ
摺鉢以南	30,717 本	ギンネム、シマグワ
	42 本	テリハマボウ、ムシアカガシ 他 (植栽)

※加えて民有地では2,508本の駆除を実施

2-1 森林生態系修復事業の実施状況【母島列島 向島】

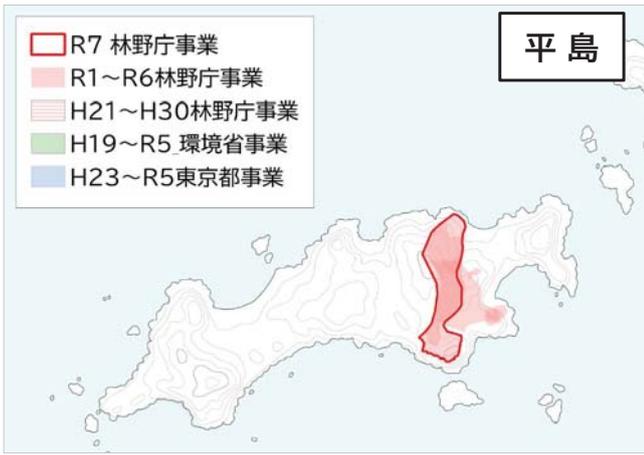
(林)



ギンネムの駆除(向島)

地名	駆除本数	主な樹種
向島	10,418 本	ギンネム、シマグワ
	33 本	アカテツ、テリハマボウ (植栽)

ギンネムの駆除(平島)



駆除前



駆除後

地名	駆除本数	主な樹種
平島	2,988本	ガジマル、ギンネム
妹島	3,243本	ギンネム

母島漁協の協力で、漁船で向島・平島・妹島に渡島しています。



気候変動モニタリング(継続)

平成25年度から気候変動の影響に関するモニタリング調査を実施し結果を分析しています。

モニタリング項目
低標高地の気温、降水量、湿度、風速、日照時間、台風・大雨・強風・干ばつ
雲霧の発生状況



雲霧帯の発生状況調査(母島)

指定ルートモニタリング

指定ルートの適正利用や固有生態系の保全等を検討するため、路面状況や利用による生態系への影響を調査しています。

- ・ 指定ルートの全線調査
- ・ 支障木処理やルートの補修
- ・ 指定ルート利用者数の整理
- ・ ルート概要の整理



指定ルート調査(母島)

2-2 父島列島における植生回復事業の実施状況 — ノヤギ排除作業 — (都)

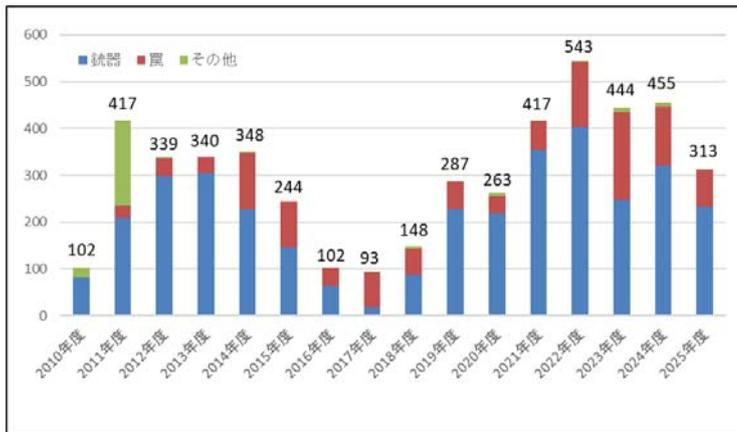
目的

在来植生を中心とした生態系の保全と健全な植生回復のため、銃器及び罠作業によるノヤギ排除を実施し、ノヤギ根絶を目指す。

➤ これまでの東京都によるノヤギ排除事業実施状況 ※ 父島では、1973年から断続的に実施

事業名	事業対象地	面積	年度														排除までの所要年数			
			1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010		～	2025	
ノヤギ排除事業	媒島	1.37km ²																		3年
	嫁島	0.81km ²																		2年
	聳島	2.57km ²																		4年
	西島	0.49km ²																		2年
	兄島	7.87km ²																		4年
	弟島	5.20km ²																		3年
	父島	23.45km ²																		継続中

➤ 父島における実施状況



➤ ノヤギ排除後の自然環境の変化



2-2 父島列島における植生回復事業の実施状況 — 外来植物駆除作業 — (都)

実施概要

- 都府地における植生回復を推進するために、2021年度に「父島列島外来植物駆除計画」を策定し、2022～2026年度までの外来植物駆除作業エリア、駆除対象種、目標林型を整理。
- 本計画は、基本的に森林生態系保護地区修復計画（林野庁関東森林管理局）に準じて、駆除作業エリアを整理した。加えて、都が管理している遊歩道沿いの眺望確保を目的とした駆除や、ノヤギ排除に資する駆除についても記載。
- 外来植物駆除による植生回復状況等を把握するために、モニタリング調査を継続実施

2025年度の実施項目

外来植物駆除作業

- 過年度新規駆除エリアのメンテナンス駆除
弟島：北部及び中央部都府地
- 新規駆除作業
父島：東平都府地

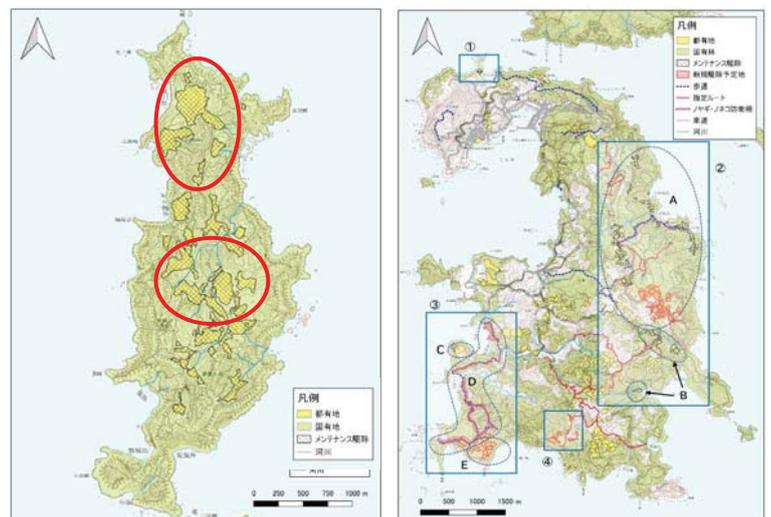
外来植物対策調査

- 既駆除都府地の植物回復状況調査（弟・父）
- 植栽在来植物の生育状況調査（父）

父島海岸線歩道の景観伐採

- 伐採等作業
- 次年度作業地の対象木事前調査

父島列島外来植物駆除計画 駆除対象地図



オガサワラグワと固有陸水動物の生育・生息環境の改善を目標とし、都府地におけるメンテナンス駆除を実施（赤丸エリアにオガサワラグワの自生地、植栽地がある）

森林生態系の回復、希少種保全、景観対策等を目的に順次、赤色の都府地における新規外来植物駆除を実施（適宜、メンテナンス駆除を実施）

2-2 父島列島における植生回復事業の実施状況 -南島エコツーリズム- (都)

これまでの取組み

- ノヤギによる踏圧・食害影響（1971年に根絶）、無秩序な観光利用等により、植生衰退・裸地化・赤土流出、ラピエ損傷などが発生。
- 南島の自然価値を守るため、植生回復のためのハード対策（植生回復工事）、ソフト対策（ガイド養成、利用ルール導入、モニタリング）を2000年頃から実施。
- 2022年度に自然環境モニタリングの20年とりまとめを実施。植生回復状況、利用ルールの遵守状況を評価し、適正な利用のルールを一部改訂（緩和）。



ノヤギ根絶前(1969年)



利用ルールの制定、植生回復工事実施前(2001年)



利用ルール制定から20年後(2022年)

東京都と小笠原村の協定による適正な利用のルール(南島)

利用経路	利用経路以外は立入禁止
最大利用時間	設定しない※
1日当たりの最大利用者数	設定しない※
制限事項	なし※
ガイドー人が担当する利用者の人数の上限	15人

※2023年6月にルールを改訂(緩和)

モニタリング

利用状況調査

繁忙期(GW、夏期、年末年始)に、利用経路の逸脱等、利用のルールの遵守状況を調査
→利用ルールが守られている

自然環境調査

利用経路周辺の植生・転石の状況調査、グリーンアノール等の外来種侵入監視調査を実施



利用経路の植生、利用状況



侵入監視トラップ

外来種対策

外来植物駆除作業

シンクリノイガ、ジュズサンゴ等の外来草本類の駆除を実施(年40回程度)



南西部半島 ジュズサンゴ斉駆除(左:作業前、右:作業後)



駆除地でカツオドリ
の営巣を確認

外来ネズミ類対策

南島全域においてBSを活用した駆除、南島・縦島・門島にSCモニタリングを継続
→南島のネズミ類は低密度状態を維持

2-2 聳島列島における植生回復事業の実施状況 (都)

これまでの取組み

- 1992(平成4)年に環境庁からの依頼を受け、聳島列島においてノヤギに起因する植生衰退、表土流出等の対策として、ノヤギ排除、法面緑化、治山ダム建設等の事業を開始。
- 2005年度より媒島で外来植物駆除事業を開始。しかし、外来植物駆除後の自然遷移では在来植物が占有できないことが指摘され、自然遷移の阻害要因となっているネズミ駆除の実施の検討が求められた。
- 2018年度に媒島、2019年度に嫁島において、全域ネズミ駆除(殺鼠剤の手撒き散布)を実施。
- ネズミの駆除が完了し、自然下においても在来植物の回復が見込まれることから、固有種が生息する残存林を回復させることに注力した、「媒島屏風山植生管理実施計画」を2023年3月に策定し、実施計画に基づき、事業を継続実施。

モニタリング

自然環境調査

- 植生、陸産貝類、昆虫類等の生物群調査
媒島屏風山周辺を中心に重点的に実施。

ネズミ類監視調査

2021年度に媒島、2022年度に嫁島でネズミ駆除完了。センサーカメラによるモニタリングを継続実施(ネズミの確認なし)。



調査で発見された陸産貝類
左:ナカノシヤママキサゴ
右:クチヒタエンザガイ



結実が確認された在来樹
左:オオバシマムラサキ
右:ハツバキ

植生回復作業

外来植物駆除作業(聳島)

全域に分布するギンネムのメンテナンス駆除を継続実施。

固有陸産貝類等の生息環境改善(媒島)

自然環境調査により、媒島・屏風山に固有陸産貝類、固有昆虫類が確認されたことを受け、生息環境改善の一環として在来林回復を目的とした外来タケササ類の駆除及び在来樹の播種・植栽を実施。

土壌流出防止対策(媒島)

海への赤土流出を防止するための法面緑化作業、メンテナンス作業等を継続実施。

経緯

- ・2023年度の検討会において、保護増殖事業対象種12種の中期実施計画を見直し、第3期計画を策定。
- ・課題解決の困難度に応じて種をAからCに分類し、種ごとの課題に応じた順応的な保全対策を展開。(具体的な対策)
モニタリング、外来動物等の食害対策、各種環境ストレスの除去、増殖試験、播種・植栽など

	「自然状態で安定的に存続できる状態」 になるまでの課題解決の困難度	該当種
A	短中期 現在の取組みの継続により、目標に到達することが可能と考えられる種	ヒメタニワタリ、シマカコソウ、ウラジロコムラサキ、ムニンノボタン、コヘラナレン
B	情報不足 有している課題が、短中期に対応可能なものかどうか不明な種	アサヒエビネ、コバトベラ、タイヨウフウトウカスラ、ウチダシクロキ
C	長期 短期的には解決が困難な課題を有し、長期的な対応が必要と考えられる種	シマホザキラン、ムニンツツジ、ホシツルラン



ムニンツツジ新規実生開花



シマホザキラン人工授粉

2025年度のトピック

新規株・開花確認

- ・コバトベラ東2近くで新規実生1個体発見

外来種対策

- ・兄島及び東平における希少植物のネズミ食害対策でバイトステーションや食害防止柵を設置
- ・2025年1月より兄島のネズミ検出箇所において職員による殺鼠剤手撒きを実施

人工授粉・播種試験・移植

- ・コバトベラ、シマホザキラン、アサヒエビネ、コヘラナレンの人工授粉を実施
- ・シマホザキラン及びアサヒエビネに結実を確認
発芽試験のため採取
- ・研究者と共同で、ムニンノボタン、コヘラナレン、ウチダシクロキの種子採取と播種を実施
- ・ウチダシクロキ及びムニンノボタンの穂木を実施
- ・シマホザキランの移植を実施



コバトベラの播種した種子(左上)とその実生

2-3 東平自然再生区のノヤギ排除

父島 東平自然再生区内に侵入したノヤギの再排除

- ・父島東平自然再生区にはノヤギ・ノネコ防除柵が設置されており、柵の内側からはノヤギが排除されていた。
- ・2020年に柵内へのノヤギの進入が確認され、徐々に頭数が増加し、2022年5月時点で60頭程度が定着と推測されたため、再排除を実施。
① 銃器による排除作業(令和5年1月～) → 計48頭 排除
② くくり罠による捕獲(令和4年3月～) → 計4頭 排除
- ・この排除作業により、柵内でセンサーカメラ等で確認されていたノヤギ全頭を、令和5年9月までに排除することができた。



東平のノヤギ・ノネコ柵



ノヤギ



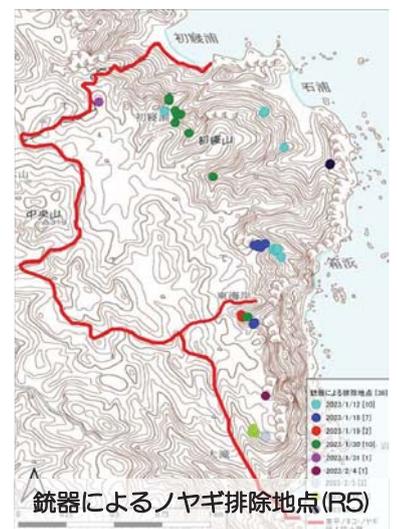
ノヤギ食痕



モニタリング作業中

柵内のノヤギのモニタリング

- ・これまで確認されていないノヤギの残存も考えられたため、令和5年10月以降ノヤギの探索とモニタリングを実施。
→ 令和6年5月以降、2頭の侵入を確認(初寝浦)
→ 令和8年1月以降、2頭の侵入を確認(鳥山)



今後の課題・対策

- ・センサーカメラで侵入した4頭の監視を継続する。
- ・柵の維持管理を行いつつ、侵入した4頭の排除を検討する。

目的

ノヤギ排除後の弟島の在来植生回復のために、湿性高木林の主要木本類の一つであるオガサワラグワの弟島個体群（北部にのみ残存）の生育状況調査や植栽による個体群の域内保全に取り組む

実施内容

自生地

成木開花状況／生育状況調査
 稚樹生育状況調査
 新規稚樹探索

植栽地

植栽用苗木の育生
 新規植栽
 植栽株の生育状況調査



（左）成木生育状況、（中上）開花状況、（中下）稚樹生育状況
 （右上）苗木育生、（右下）植栽状況



自生地
 植栽地
 保全対策実施位置

成果（調査結果等）

自生地

- 新たに2本の開花個体を確認。弟島個体群の成木数は雌27本、雄22本、合計49本（2025年度調査結果）。
- 稚樹の生育状況良好（過年度発見稚樹のうち66本を調査対象として実施、57本が生存）。また、新たに12本のオガサワラグワ稚樹を発見。

植栽地

- 弟島の都有地で60本を新規植栽。
- 2024年度までに植栽した284本のうち、89本が生存。
 2m超に成長した個体もいるが、ほとんどの個体が樹高1m未満。

【目的】

陸産貝類の絶滅回避と個体群の維持・回復、海鳥類の生息・繁殖地保全、植生回復、オガサワラカワラヒワの繁殖地保全（母島属島）等の生態系保全及び環境衛生（集落）

【智島列島】

島名	期間	方法	実施機関	駆除対象	実施状況	達成状況	掲載ページ
智島・鳥島 267ha	2008年8月 2010年1~3月	ヘリ散布	環境省	クマネズミ	実施済	根絶	—
媒島 137ha	2018年9~10月 2019年2~3月	手撒き UAV散布	東京都		実施済	根絶	—
	2018年9月~2022年2月	BS設置			実施済		
嫁島 85ha	2019年7~10月、 2020年3月	手撒き UAV散布			実施済	根絶	—
	2019年7月~2022年12月	BS設置			実施済		

【父島列島・母島列島（無人島のみ）】

島名	期間	方法	実施機関	駆除対象	実施状況	達成状況	掲載ページ
兄島 788ha	2010年1~3月 2016年8月 2021年3月 2024年11月	UAV・ヘリ散布	環境省	クマネズミ	実施済	対策中 (低密度)	2-5 p.29,30
	2015年2~7月	かご罠捕獲			実施済		
	2015年9月~	BS設置			実施中		
	人丸島 6ha 瓢箪島 9ha	2010年1~3月 2016年8月 2024年11月			ヘリ散布	環境省	実施済
2016年8月~		BS設置	実施中				
弟島 520ha	2010年1~3月	ヘリ散布	林野庁		実施済	未達成	—
	2022年6月~	BS設置			実施中	対策中	—
孫島 16ha	2010年1~3月	ヘリ散布	環境省		実施済	再侵入	—
西島 49ha	2007年3、4月	BS設置	民間事業者		実施済	対策中 (低密度)	—
	2010年1~3月 2016年8、11月 2024年11月	UAV・ヘリ散布	環境省		実施済		
	2016年11月~	BS設置		実施中			
東島 28ha	2008年8月 2010年1~3月	ヘリ散布	環境省	実施済	根絶	—	
巽島 4ha	2010年1~3月	ヘリ散布	東京都	実施済	対策中 (根絶確認中)	—	
	2018年9月~	BS・手撒き散布		実施中			
南島 34ha	2012年1月、2017年1月、 2018年1月、2020年1月	手撒き散布	東京都	実施済	対策中 (低密度)	—	
	2012年1月~ (2017年4月~)	BS設置		実施中			
向島 138ha	2020年2~6月	BS設置	管理機関	実施済	対策中 (低密度)	—	
	2020年12月~		環境省	実施中			
	2024年4月~	東京都	実施中				
平島等 75ha	2022年12月、 2024年1月	手撒き散布	小笠原村	実施済	対策中 (根絶確認中)	2-4 p.25	
	2023年2月~	BS設置		実施中			
姪島 111ha	2024年7月~	UAV・BS・手撒き散布	東京都	実施中	対策中 (低密度)	—	

【有人島】

島名	期間	方法	実施機関	対象	実施状況	達成状況	掲載ページ	
父島 2345ha ・ 母島 1988ha	山域	通年	希少植物食害防止、 ノネコ・ノヤギ対策の 影響モニタリング	各管理機関	クマネズミ	実施中	対策中	2-4 p.26
	集落・ 農地	年2回	集落かご罠一斉防除	管理機関		ドブネズミ (母のみ)		
通年		かご罠・BS無料貸出、 殺鼠剤購入補助 (農業者対象)	小笠原村	実施中	対策中		2-4 p.26	

母島属島のネズミ対策

- ・オガサワラカワラヒワの保全のため、繁殖阻害の大きな要因の1つと考えられる母島属島のネズミ類の根絶を目指す
- ・オガサワラカワラヒワの生息域内状況が危機的であることを受け、東京都でも2023~2025年度の3年間でネズミ対策に協力することとして計画に着手し、2024年度からの作業は向島・姪島を分担することとして整理された。

各島の取組状況

殺鼠剤の手撒き散布とBSへの充填を併用し、ドブネズミ駆除を実施。向島においては離岩礁および沿岸部急傾斜地にドローン散布を併用。

【向島の実施状況】

- ・2024年3月までは、環境省によるBSでのドブネズミ駆除を実施していたが、対策エリアが不十分であったことから、ネズミの低密度維持ができていなかったと考えられた。
- ・2024年度のBS拡大、2回の手撒き散布の実施以降は、2025年度もBS充填と2回の手撒き散布を継続したほか、手撒き未実施エリアにドローン散布を実施。
- ・2024年度の手撒き散布前は一時的なネズミの増加も見られたが、2025年1月下旬以降は2026年1月中旬時点までセンサーカメラによるネズミの撮影記録はない。

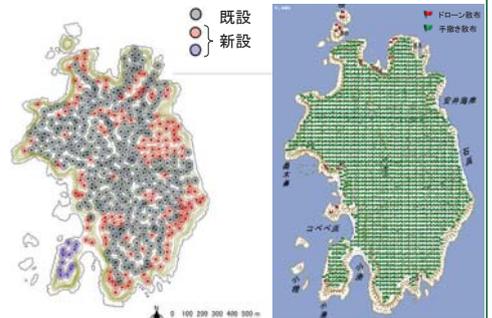
【姪島の実施状況】

- ・2024年7月より、BSと手撒き散布による全島対策に着手したが、海況不良により第2回目の手撒き散布以降の作業を中断した。
- ・手撒き散布後は一度センサーカメラによるネズミ撮影記録が0となったが、地形的に手撒き散布ができない区域があったためか、2025年3月以降にごく低密度であるが、ネズミの撮影が確認された。
- ・2025年度は、作業時期を見直してBS充填と2回の手撒き散布を継続したほか、環境省による離岩礁及び沿岸部急傾斜地にドローン散布試験の併用により、島内全域の散布を実施し、散布後の2025年7月以降は2026年1月中旬時点までセンサーカメラによるネズミの撮影記録はない。

【今後の予定】2026年度からの対策は、環境省が実施する。

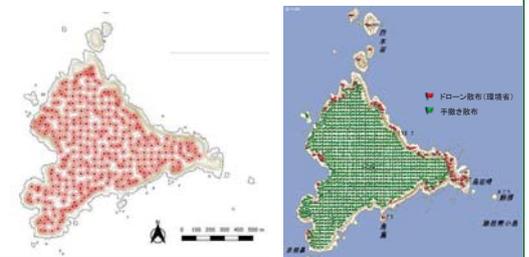
向島BS設置箇所
320 ⇒ 492箇所

向島手撒き散布地点
1,847箇所
向島ドローン散布地点
14箇所



姪島BS設置箇所
304箇所

姪島手撒き散布地点
1,115箇所



取組状況

【目的】

オガサワラカワラヒワの保全に寄与するため、繁殖地である平島において、オガサワラカワラヒワの繁殖期前にドブネズミの生息密度を低減させるため、ネズミ駆除を実施。

【対策範囲】

平島、小属島(丸島、二子島、離岩礁)

【対策内容】

① R4~R6にかけて村が、手撒きによる殺鼠剤(スローパック)の散布とベイトステーション(BS)によるネズミ対策を実施

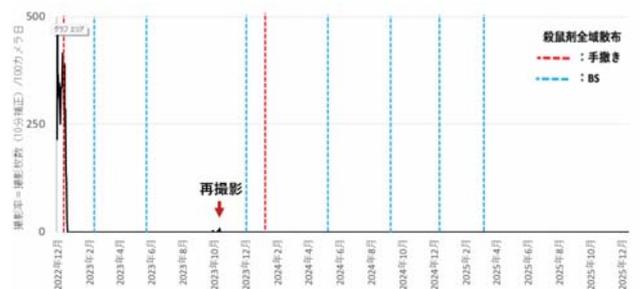
② ドブネズミのモニタリング調査(右グラフ参照)

令和7年度に村から環境省に事業を引き継ぎ、平島20台、小属島5台のセンサーカメラでドブネズミのモニタリング調査を実施中

※ ネズミ誘引のため、カメラ前のBSは稼働中



小属島では自動画像送信機能付きカメラ(SIMカメラ)に交換し、遠隔モニタリングに切り替え



センサーカメラでのネズミ撮影頻度(平島)

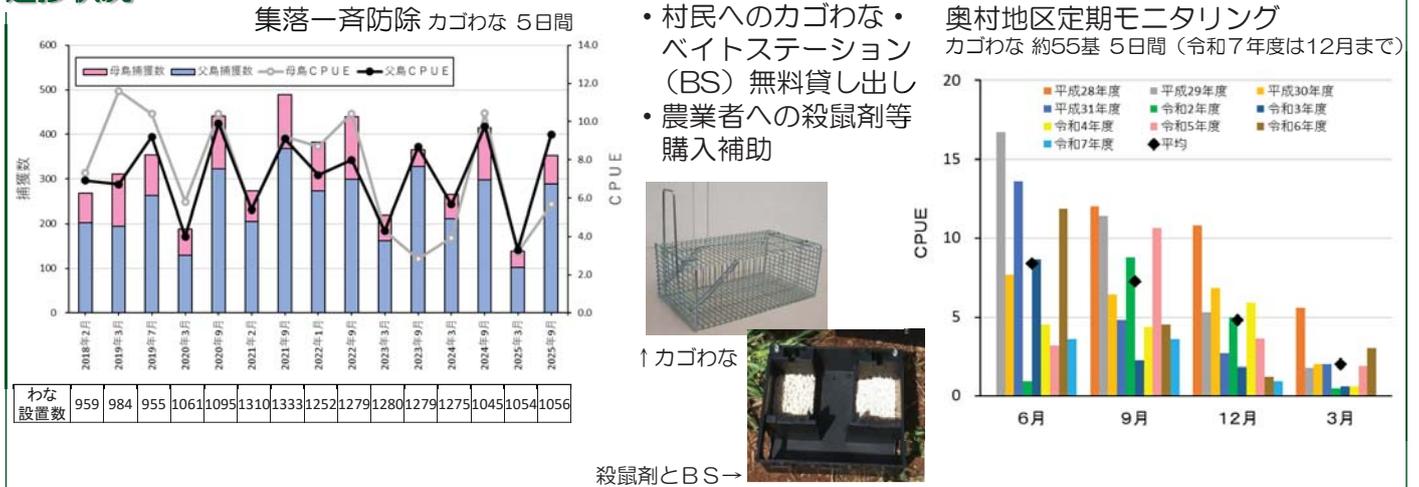
課題・今後の対応

- ・令和7年度12月時点でネズミは確認されていない。2年間ネズミが確認されていないため、引き続きモニタリング調査を実施し、根絶判断について検討する。

本取組の目的

生態系保全事業との関連による増減が想定される外来ネズミ類の対策について、生態系に限らず生活や農業を守るための対策を関係行政機関と連携して実施する。

進捗状況



これまでの取組経緯

- ◆H23年度～：農業者への殺鼠剤購入補助開始
- ◆H27年度：「小笠原有人島におけるネズミ対策にかかる行政連絡会」を関係機関で組織し、公衆衛生改善、農業被害防止、希少種保全と目的別に議論
- ◆H28年度～：カゴわな貸出開始、集落内一斉防除試験(翌年、本開始)
- ◆R3年度～：BS貸出開始
- ◆R6年度～：一斉防除時に有志によるBS防除を試行

課題・今後の対応

- ◆生活、農業被害の情報収集の継続
- ◆集落に隣接する林縁部での防除強化を試行
- ◆より効率的・効果的な防除策の検討

背景

- ・属島におけるネズミ根絶のためには、島内全体に隈無く殺鼠剤を散布する必要があるが、手撒きやBSによる散布では人が立ち入れる範囲に限られる
- ・ヘリコプター散布は海上流出リスクが高いため、海岸部や離岩礁で海上流出リスクを抑えられる手法が必要

ドローンによる殺鼠剤散布機及び散布手法の開発

殺鼠剤の海上流出リスクを抑えられる散布機の開発

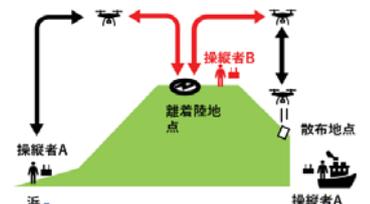
- ・東京都がネズミ対策を実施している姪島において、崖地や離岩礁などアクセスが困難であり、手撒き散布による殺鼠剤散布が実施できていない場所(42か所)で、8月にドローンによる殺鼠剤の空中散布を実施
- ・8日間の散布作業を実施し、合計209.6kgの殺鼠剤を散布
そのうち600gが海上に落下。
- ・当初48か所を目指していたが、6地点は地形や植生の状況により海上に落下する可能性があったため、散布未実施
- ・波高1m~1.5m程度であれば船上からの離発着運用も可能(但し、船上から離発着を繰り返すとドローンの慣性計測装置が正常に機能なくなる恐れがあるため、殺鼠剤の補充作業などは陸地で行うことが望ましい)
- ・波高が2mを超えるような時期の場合は、陸地での離発着を想定する必要がある

【今後の予定】

- ・現状の積載量が600gと少なく、飛行回数が多いためさらに積載量大きいドローンの検討
- ・散布機の防水性能の向上



ドローン飛行



ドローン飛行 イメージ

主な対策

- 2010年 域外保全の開始
- 2014年 屋外飼育施設での飼育試験開始
- 2018年 個体群再生の検討
（巽島への補強、南島への再導入）
ウズムシ防除技術開発に向けた基礎研究の推進
- 2019年 個体群再生計画の立案、外部評価
- 2020年 個体群再生計画の策定
巽島における移殖実施計画の策定
巽島への補強を開始
- 2022年 南島における移殖実施計画案の作成、検討
- 2023年～ 移殖実施計画の策定、南島への再導入を開始

カタマイマイ属2種の個体群再生

○チヂジマカタマイマイ

父島巽崎と巽島でしか生息が確認されていない。

○アナカタマイマイ

巽島と母島北端部で生息が確認されているが、母島北端部は遺伝的な差異があり、進化的な価値を有す。



本来の生息地から個体が消失していくことは、種の絶滅に極めて近い状態で、遺産価値を損なうおそれがある。



巽島の個体群を安定させるため、両種を移殖。かつて両種が生息していた南島に移殖し、個体群を再生し、両種の種としての絶滅を回避することを目指す。

ウズムシ類侵入状況

ニューギニアヤリガタリクウズムシ

1990年頃に父島北部で確認
その後父島島内において分布を拡大
陸産貝類へ壊滅的な影響



エリマキコウガイビル

2024年11月に父島中央部で初確認
以降継続して中央部で確認されている
母島では2014年に初確認、以降分布を拡大
樹上性の固有陸産貝類への影響が懸念される



■巽崎地域

- ・2017年に半島中央部でウズムシの侵入が確認され、現在ヤマキサゴ類が壊滅的な状況
- ・先端部ではまだウズムシが確認されておらず、チヂジマカタマイマイ等が残存
- ・継続的なモニタリングを実施中



個体群再生－巽島への補強、南島への再導入－

寄生生物対策について

陸産貝類へ感染が確認されている寄生生物ナメクジカンセンチュウへの対策として、以下の感染対策を実施している。

- ・移殖個体は通常飼育から隔離し、人工飼料、人工環境で飼育
- ・移殖直前に移殖個体の一部を解剖し、ナメクジカンセンチュウの感染がないことを確認
- ・移殖直前に随伴生物のリスク削減のため飢餓処理を実施

南島

過去にチヂジマカタマイマイ、アナカタマイマイが生息 ⇒ **再導入**

【調査等状況】

- ・植生、土壌水分環境、外来動物（ウズムシ、ネズミ）の侵入状況等の調査を継続
- ・現時点でウズムシの確認なし
- ・南島では東京都が継続的にモニタリングしながら駆除計画を検討中
- ・南島では移殖適地と考えられるタコノキ群落の自然更新補助作業を実施中

小笠原世界遺産センター



父島



モモタマナ林

南島



タコノキ群落



巽島

巽島

現在チヂジマカタマイマイ、アナカタマイマイが生息 ⇒ **補強**

【調査等状況】

- ・植生、土壌水分環境、外来動物（ウズムシ、ネズミ）の侵入状況等の調査を継続
- ・現時点でウズムシの確認なし
- ・巽島ではネズミ駆除（殺鼠剤手撒き、BS）を継続的に実施しているが、ネズミの痕跡あり

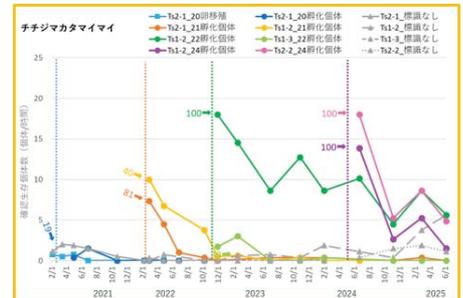
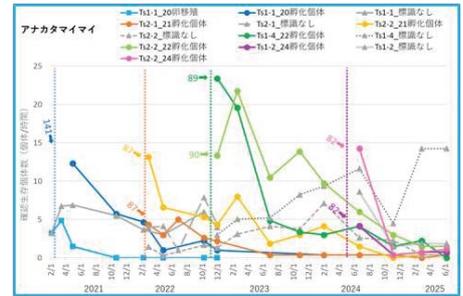
個体群再生－異島への補強の実施

これまでの取組経緯

- 【2020年度】
11月：アナカタマイマイ 152卵、チチジマカタマイマイ 27卵
2月：アナカタマイマイ 141個体、チチジマカタマイマイ 19個体
- 【2021年度】
アナカタマイマイ 174個体、チチジマカタマイマイ 121個体
- 【2022年度】
アナカタマイマイ 179個体、チチジマカタマイマイ 149個体
- 【2024年度】
アナカタマイマイ 164個体、チチジマカタマイマイ 200個体



移植後の再発見個体数の推移



2025年度モニタリング結果

- アナカタマイマイ
 - ・2021・2022年・2024年度移植個体で幼貝の成熟を確認
 - ・2022年度に移植を行った地点で標識なし個体（≒野生個体）の増加を確認
- チチジマカタマイマイ
 - ・2021・2022年・2024年度移植個体で幼貝の成熟を確認
 - ・2021年度より移植を行っている地点で標識なし個体（≒野生個体）の増加を確認

2025年度の状況と2026年度の予定

- ・過年度移植個体の定着モニタリングを実施
- ・2024年度以降移植地点の周辺においてタコノキ群落の枯死を確認、移植個体の再発見率が低下
- ・一部の移植個体で成長を確認、一部の移植地点で野生個体の増加を確認
- ・今後はモニタリングを継続し、過年度に実施した移植の評価を実施予定

個体群再生－南島への再導入の実施

取組状況

- 【2023年度】
2023年12月7日より屋外網室での飼育を開始
2023年12月21日より網室から放出
・アナカタマイマイ72個体
・チチジマカタマイマイ87個体
 - 【2024年度】
2024年12月28日より屋外網室での飼育を開始
2025年2月15日より網室から放出
・アナカタマイマイ（千尋個体群） 102個体
・チチジマカタマイマイ（南崎個体群） 132個体
 - 【2025年度】
2025年12月28日より屋外網室での飼育を開始
・アナカタマイマイ（千尋個体群） 188個体
・チチジマカタマイマイ（南崎個体群） 219個体
- 2025年度移植のポイント
移植地点の追加、網室滞在期間を延長（約1年間）



モニタリング状況

- ・2023年度移植個体は2024年10月以降生存個体発見無し
- ・2024年度移植個体は2025年10月のモニタリングで父島カタマイマイの生貝が発見されているものの再発見率は著しく低い
- ・2025年度移植個体は網室内で高い生存率を維持

情報共有

- ・南島は観光利用が盛んであるため、ガイドや利用者への説明や周知を実施
- ・観光利用者等の南島渡島者が参加できるWEBフォームを利用し移植個体のモニタリングシステムを構築
- ・小笠原世界遺産センターInstagramや村民だより等における定期的な情報発信

2026年度は移植個体の定着モニタリングを実施
モニタリングの結果を踏まえ今後の移植計画や環境改善策等の取り組みを検討予定

2-5 陸産貝類の保全状況（父島、内地）～生息域外保全～

（環）

生息域外保全として、世界遺産センター保護増殖室、扇浦屋外飼育施設、東京動物園協会（都内4園）で飼育。

世界遺産センター保護増殖室

- カタマイマイ属（父島、兄島産6種14個体群、総数約5140個体）を飼育中
- 全ての種で累代飼育に成功
- 遺伝的多様性保持のため、計画採卵を実施し、目標採卵数を達成



飼育の様子



扇浦屋外飼育施設

- 全種において成熟や繁殖を確認
- アナカタマイマイでは、F1世代が成熟しF2世代が誕生
- チジマカタマイマイでは、F1世代が誕生し成熟を確認
- 2023年7月に稼働した上部開放柵では、チジマカタマイマイの繁殖を確認するも、外来のコハクガイによる卵食害やエリマキコウガイビルの侵入を確認



上部開放柵

東京都動物園協会

- 2017年9月より、葛西臨海水族園、井の頭自然文化園でカタマイマイ、恩賜上野動物公園、多摩動物公園でアナカタマイマイの飼育を開始
- 2021年度より、各園にて飼育個体の展示を開始
- 2023年10月より、葛西臨海水族園でキノボリカタマイマイ、恩賜上野動物公園でチジマカタマイマイの飼育を開始
- 各園で分担し、試験飼育（近親交配の影響、低温飼育等）や、個体の父島搬送に向けた人工環境飼育を実施中



恩賜上野動物園

試験飼育

- 2023年より兄島産エンザガイ属の試験飼育を内地で開始したが死亡が相次いだため、2024年に父島施設での飼育を開始したところ、F2世代が誕生
- 2024年7月から兄島産オガサワラキセルモドキ属の試験飼育を開始したところ、個体の成熟及び繁殖を確認



ヘタナリエンザガイ



ハハジマキセルモドキ

2-5 陸産貝類の保全状況（兄島）～ネズミ対策の状況～

（環）

兄島の陸産貝類の絶滅回避と個体群維持、回復を目的に外来ネズミ対策を実施。

クマネズミ

固有の陸産貝類を食害するなどして生態系に被害を与えている



（左写真）クマネズミより食害を受けたカタマイマイ属の殻

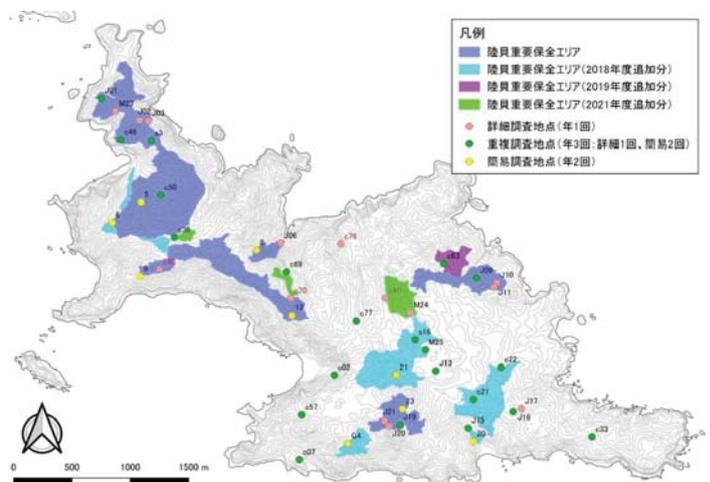
（右写真）ヘリコプターによる殺鼠剤の空中散布

対策の経緯

- 2010.2 ヘリによる殺鼠剤散布
- 2012.6～ センサーカメラによるモニタリング
- 2012.9 クマネズミ再確認
- 2015.2～ 保全エリアを選定しカゴ罠での捕獲
- 2015.8～ カゴ罠からバイトステーション（BS）での対策に切替え
- 2016.8 ヘリ等による殺鼠剤散布（兄島、瓢箪島、人丸島）
- 2017.7 クマネズミを再確認
- 2018.4～ 重要保全エリアの追加拡張、BSの増設
- 2020.5 高床式BSへの切替開始（2025.2完了）
- 2021.3 内陸部でヘリによる殺鼠剤散布
- 2021.5 クマネズミを再確認
- 2022.2 重要保全エリアを追加拡張
- 2024.11 ヘリによる殺鼠剤散布（兄島、西島、瓢箪島、人丸島）
- 2024.12 クマネズミを再確認

現在の対策状況

- （2012.6～ センサーカメラによるモニタリング）
- 2025.1～ ネズミの検出地点で殺鼠剤の手撒きを実施
- 2025.2～ BSを再稼働



兄島における陸産貝類重要保全エリア、および陸産貝類モニタリング地点

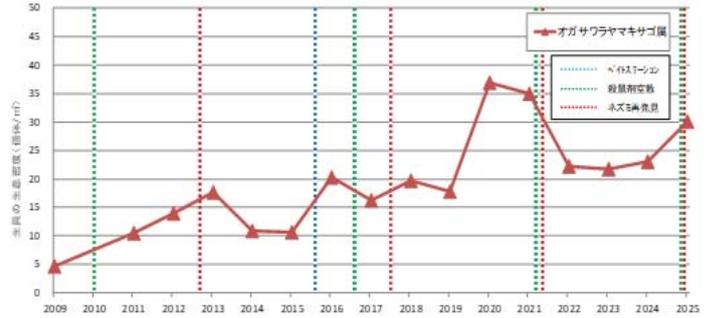
2-5 陸産貝類の保全状況（兄島）～陸産貝類の生息状況と食害推移～

（環）

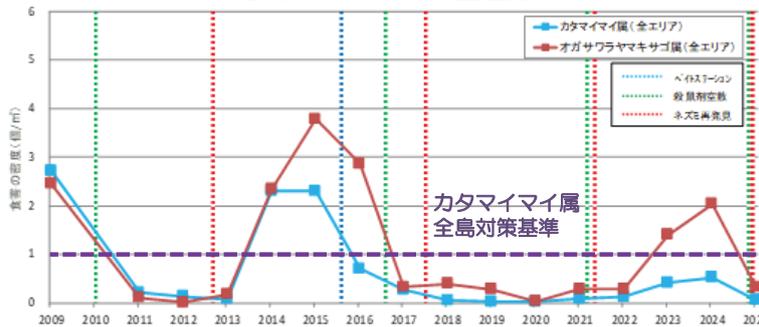
カタマイマイ属の生息密度



オガサワラヤマキサゴ属の生息密度



両属のネズミ食害密度



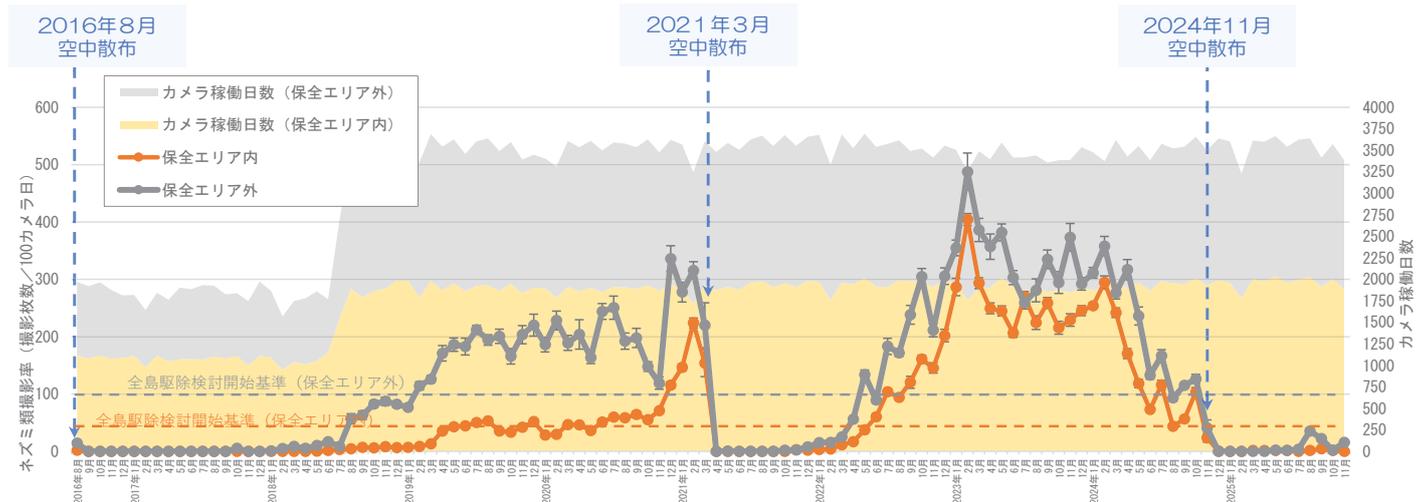
※いずれも兄島全島平均

- 生息密度はカタマイマイ属で昨年度より増加し全島平均で2.88個体/m² オガサワラヤマキサゴ属でも昨年度と増加し全島平均30個体/m²。
 - ネズミ食害密度はカタマイマイ属、オガサワラヤマキサゴ属共に昨年度から大きく減少しているが、各地点でわずかに確認されている。
- ※2025年10月時点

2-5 陸産貝類の保全状況（兄島）～ネズミモニタリング調査結果～

（環）

センサーカメラによるネズミ撮影率の推移（重要保全エリア内外）



- 2021年3月の殺鼠剤空散により全島的に低密度化に成功したものの、2022年11月には空散前と同程度まで撮影率が上昇したことを受け、2024年11月に殺鼠剤空散を実施
- 空散後カメラの撮影枚数は大幅に減少したが、複数地点のセンサーカメラでクマネズミの生存個体を検出



- 低密度ではあるが全島的に残存個体が生存
- 今後も継続してSCによる撮影頻度及び陸産貝類の食害状況調査等のモニタリングを実施

2-5 陸産貝類の保全状況（母島）～生息域外保全～

（環）

母島固有陸貝の試験飼育

●オガサワラオカモノアラガイ

飼育状況の概要

- 2015年 堺ヶ岳个体群の試験飼育を開始
長らく安定的な飼育ができません
- 2020年 試行錯誤の末、累代飼育に成功
- 2021年 衣籠个体群の飼育を開始
- 2025年 引き続き2个体群を飼育中



オガサワラオカモノアラガイ等の飼育状況



繁殖用飼育ケージ

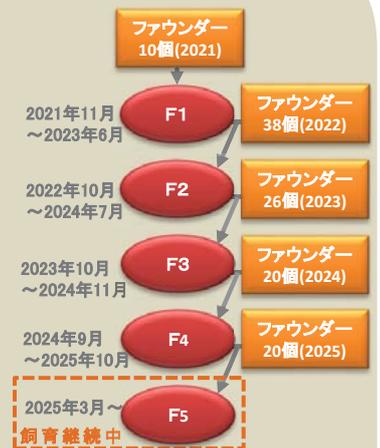
堺ヶ岳个体群

- ・F2世代以降ファウンダーを追加せずに飼育を継続。
- ・F7世代142個体、F8世代248個体（計390個体）を飼育中（2025年12月現在）
- ・F4世代で遺伝的多様性が低下（成長段階を揃えるための成長抑制試験が影響したか）
- ・F5世代で個体数が減少したが、その後の世代では増加。
- ・引き続き、試験个体群としてファウンダーを追加せずに管理。



衣籠个体群

- ・局所的に生息し、遺伝的にもユニークな集団
- ・エリマキコウガイビルが侵入しているため、系統保存の観点から野生個体との遺伝交流も含めた管理を試行。
- ・F5世代693個体を飼育中（2025年12月現在）
- ・引き続き、域外保全个体群として、野生個体との遺伝交流も含めた管理を試行。



2-5 陸産貝類の保全状況（母島）～生息域外保全～

（環）

母島固有陸貝の試験飼育

●ハゲヨシワラヤマキサゴ

- ・2011年に再発見されるまで絶滅したと考えられていた母島固有の樹上性ヤマキサゴ
- ・2022年に23個体のファウンダー捕獲。
- ・オガサワラオカモノアラガイに準じた加湿飼育により累代飼育を達成。
- ・2025年12月現在、F1～F3世代計640個体を飼育中。
- ・遺伝的多様性に配慮した管理方法の検討のため、遺伝解析に着手。

孵化後間もない幼貝



マーキングした飼育個体

●トウガタノミガイ属sp.C

- ・現在唯一の生息確認地である母島西台にエリマキコウガイビルが侵入し、絶滅の可能性が高まる。
- ・2025年9月、12月に計30個体を捕獲し、加湿型容器にて試験飼育を開始。
- ・12月時点でP世代23個体、F1世代27個体を飼育中。
- ・比較として、ナカダノミガイ2個体の飼育も開始。F1世代10個体を飼育中。



sp.C



ナカダノミガイ

●ヒラセヤマキサゴ

- ・2006年に再発見されるまで絶滅したと考えられていた、母島石門に固有のヤマキサゴ。
- ・2022年より計20個体のファウンダーから飼育を開始。2024年以降はファウンダー確保できず。
- ・幼貝死亡率の高さが課題だったが、飼育方法の改善により生存率が向上。
- ・2025年12月時点、P世代4個体、F1世代56個体を飼育中。



石灰岩



飼育中のF1世代

●キビオカチグサ近縁種（sp.B）

- ・キビオカチグサ近縁種のうち、母島の石門に固有の系統。成貝で殻径が2mm程度の微小貝。
- ・微小種であることから飼育設備の検討を重ね、2023年に50個体のファウンダーを捕獲して飼育再開。
- ・飼育管理方法はおよそ確立。累代達成を目指して継続飼育中。



スケールは1mm

孵化した幼貝

オガサワラオカモノアラガイ衣館個体群の移殖（補強）の実施

目的

- ・非常に狭い範囲に孤立して生息する衣館個体群について個体の移殖（補強）による地域絶滅を回避する
- ・貝食性コウガイビルが存在下であっても、補強により野生個体群の存続が図れるかを試行する

令和6年度移殖の結果

- ・2025年2月 幼貝75個体を移殖
- ・2025年6月 繁殖可能サイズまで成長を確認
- ・2025年8月 移殖個体を一定数確認
→個体群維持に貢献している可能性



成貝になった移殖個体 (6月確認)

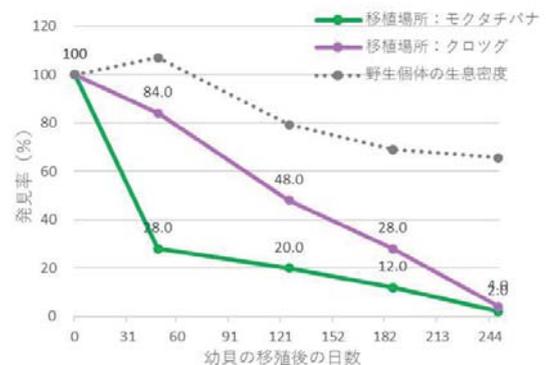
移殖場所



移殖後の幼貝の成長



移殖個体の再発見率の推移



令和7年度移殖の進捗

- ・2025年8月 ファウンダー20個体を捕獲
→飼育個体と交配し、採卵
- ・2026年2月 幼貝100個体を移殖
- ★2026年3月 「テンスジオカモノアラガイ属の個体群再生計画」策定

2-6 陸産貝類の生息を脅かす外来種対策の状況 ～新たな外来種侵入防止対策～ （環）

「新たな外来種の侵入防止」

- ・外来種対策の最優先事項として科学委員会等で検討
- ・2015年度に新たな外来種の侵入・拡散防止に関する検討の成果と今後の課題を整理

2017年度 母島検討会を設置

- ・父島と比較し外来種の影響が少なく、遺産価値が多く残っていることから、地域団体から母島の課題について議論する場の設置が求められていた。
- ・検討会を設置、母島の遺産価値や課題等を整理

2018年度 母島部会を設置

- ・科学委員会の部会（母島部会）に位置付け。
- ・陸産貝類に大きな影響を与えるウズムシ等の外来種対策を優先的に議論。
- ・特に侵入リスクの高い土付き苗対策について、基本的な考え方や実施体制等を整理

2019年度

- ・土付き苗温浴実施に向けた調整、試行運用開始
- ・温浴の取組みを母島の自主ルールとして位置づけ

2020年度～

- ・土付き苗温浴の利用促進、実績の蓄積
- ・建設工事等の外来種対策指針の作成
→ 2024年度より公共工事や一部の民間工事を対象に試行運用を開始

土付き苗に関する考え方

- ・外来種が潜入・付着している可能性が極めて高い
- ・外来捕食者や農業害虫等が持ち込まれ、母島の世界自然遺産の価値や産業が脅かされる恐れがある。
※実際、現在母島で大きな問題となっている外来種の一部は沖縄からの土付き苗で持ち込まれた可能性が指摘

土付き苗は母島へ持ち込まないことが基本
持ち込む場合は温浴等により外来種を極力排除する

※小笠原村シロアリ条例により、沖縄や父島等のシロアリ生息地の苗木（「植栽用樹木等」）の母島への持ち込みは禁止。

母島の自主ルールとして位置づけ、2020年より土付き苗の温浴処理の取組みを開始（通称「ははの湯」）



2023年から受付窓口が小笠原アイランド農協母島支店に！

温浴設備「ははの湯」の稼働時の様子

★2025年度（2月時点）ははの湯稼働実績：0件

工事資材等に関する考え方

- ・一部資機材では外来種の潜入・付着のリスクがある
※特に内地の港湾区域や父島で使用・保管されたものに関してはヒアリなどの外来アリ類や外来ブラナリア類が付着する可能性

母島に持ち込まれる資機材について、外来種随伴のリスクを把握し、リスクに応じた対策を行う
母島に特化した共通の対策指針を作成する。

ツヤオオズアリ

- ・アフリカ原産の外来アリ。父島と母島に分布。
- ・IUCN侵略的外来種ワースト100選定種。
- ・節足動物や陸産貝類を捕食し生態系に悪影響

主な経緯

2015年 母島南崎で生息を確認 (2月)
 同年3月~ 母島における分布調査を実施 (結果は右図)
 同年6月 母島南崎で生態系への影響を確認
 2016年 「新たな外来種の侵入・拡散防止に関する地域課題WG」の下に設置した「ツヤオオズアリ作業部会」にて対策を検討。

●バイト剤による対策事業を開始

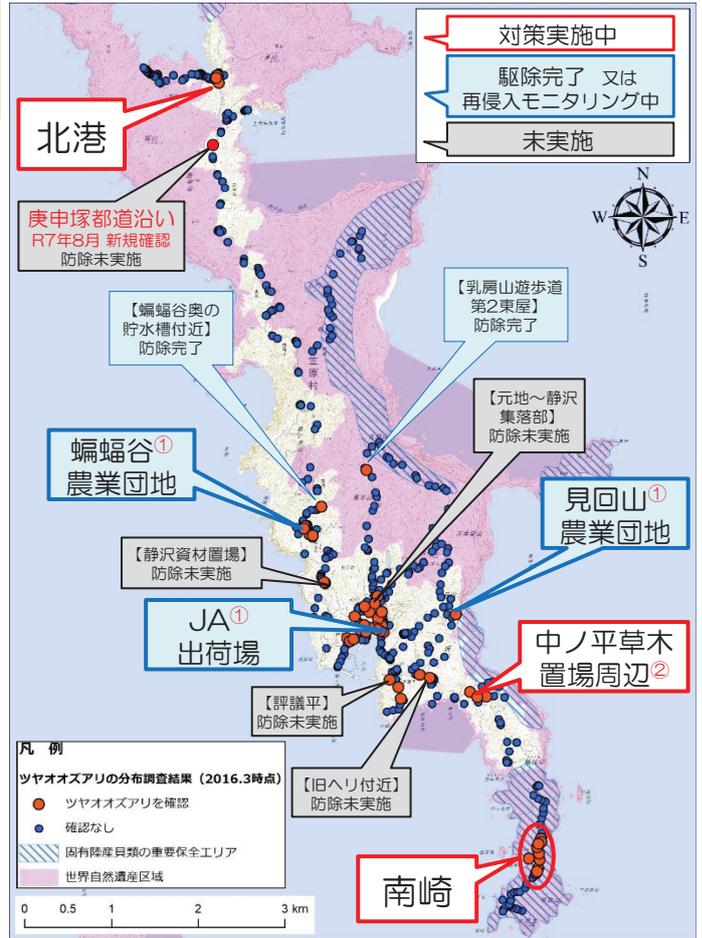
母島南崎 (2016.3~ 環), 母島北港 (2015.10~ 都)
 母島農地等 (① 2018~2020, ② 2023~ 村)
 父島宮之浜 (2017~ 各機関協働 →2021~ 都)

2025年の対策状況

母島南崎: 推定生息範囲が約6.7haまで縮小。
 母島北港: 2023年3月に再確認されたためバイト剤による駆除及びモニタリングを継続。
 母島農地等: ②中ノ平草木置場周辺の駆除対策を継続。
 父島宮之浜: 調査エリア未検出、2024年4月から直営のモニタリングに移行。

★2025年8月 庚申塚で新規確認 (研究者による自主調査)

母島におけるツヤオオズアリ対策状況



目的

固有陸貝や土壌生物層を保全するため、母島南崎のツヤオオズアリを根絶する

バイト剤による防除対策によりツヤオオズアリの生息範囲を縮小させることに成功している。



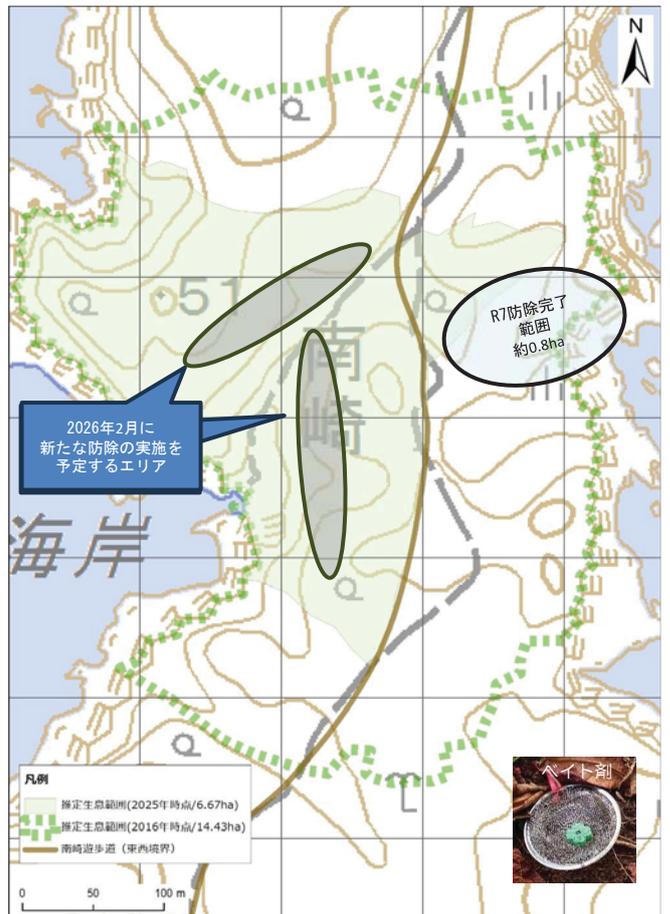
主な経緯

2015年 南崎にてツヤオオズアリの生息が確認
 ※遊歩道整備の資材に付着して侵入したと推察
 2016年 推定生息範囲 (14.43ha) を特定
 本格的な駆除を開始
 2018年 対策エリアの一部で駆除達成 ※
 対策方針を拡散防止→生息範囲縮小へ転換
 ※モニタリングによる非検出が8ヶ月~12ヶ月連続で駆除達成判断
 2019年 駆除完了エリアの一部で再検出 (10月)
 2021年 再検出地点で再度駆除完了判断
 2022年~ バイト剤による駆除を継続実施

2025年の対策状況

- ・3つのモニタリングラインで駆除完了
 →2025年2月より新規エリアにバイト剤を新設
- ・推定生息範囲は6.7ha (当初の約46%) に縮小
 今後も対策を継続して生息範囲縮小→地域根絶を目指す

推定生息範囲及びバイト剤設置箇所 (令和7年12月時点)



2-6 陸産貝類の生息を脅かす外来種対策の状況 ~母島ウズムシ侵入調査~ (環)

目的

母島では未侵入のニューギニアヤリガタリクウズムシの非意図的な侵入に備え、行動マニュアルの作成や早期検出のための調査を実施。併せて、他種ウズムシ類についても記録。



R7年度調査においてニューギニアヤリガタリクウズムシの確認なし

エリマキコウガイビル (*Bipalium vagum*)

- 2014年8月に評議平で初確認された貝食性ウズムシ
- 沖縄からの土付苗に紛れて侵入したと推定
- 東崎以外の地域に広く分布。
- 2024年12月には父島でも侵入を確認。
- 特に樹上性の微小~小型種に甚大な影響。
- 現時点で効果的な防除技術がないことが課題

- 2024年6月 南崎蓮池付近で確認
 - 2025年6月 西台(母島北端部)で確認
- 特に微小な陸産貝類への影響が懸念される



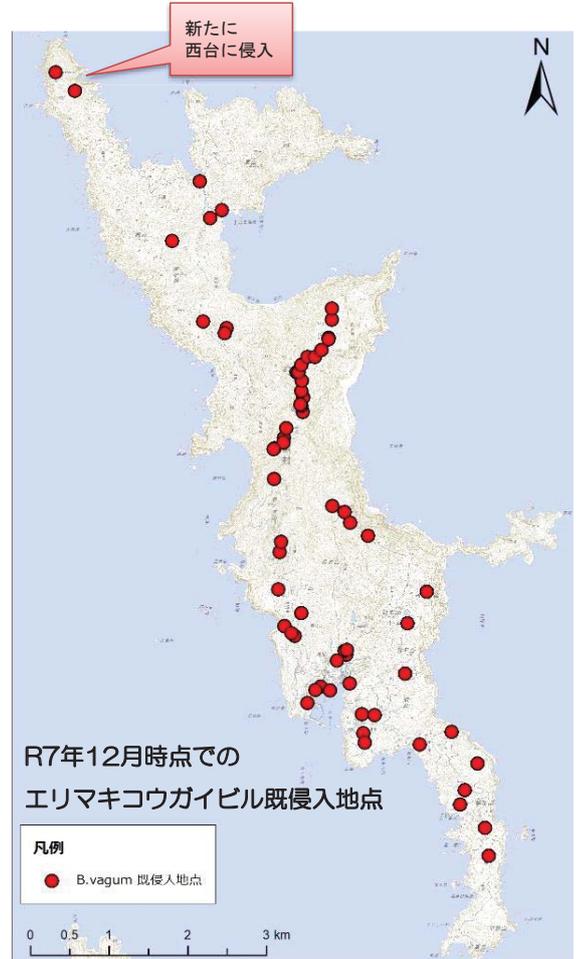
オガサワラオカモノアラガイ



ヒメカタマイマイ



チャコウラナメクジ



2-6 陸産貝類の生息を脅かす外来種対策の状況 ~アジアベッコウマイマイ対策~ (環・村)

アジアベッコウマイマイ

- 雑食性で固有陸貝や希少植物、農作物への影響が懸念
- 土付き苗に紛れて侵入したと推定(母島でのみ確認)

目的

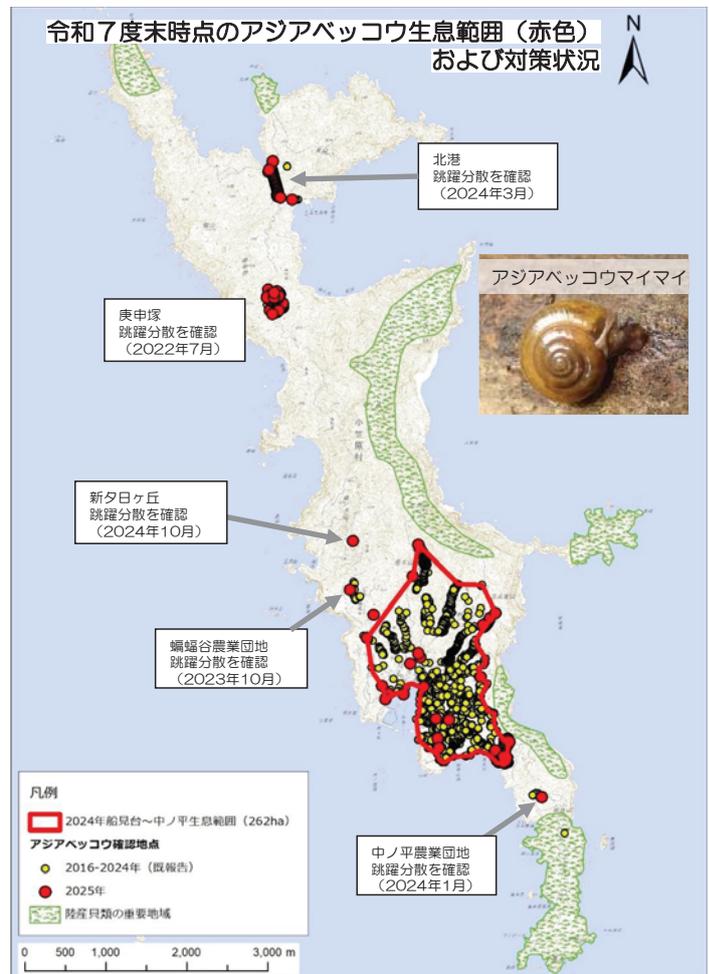
固有陸産貝類重要生息地への分布拡大防止

主な経緯

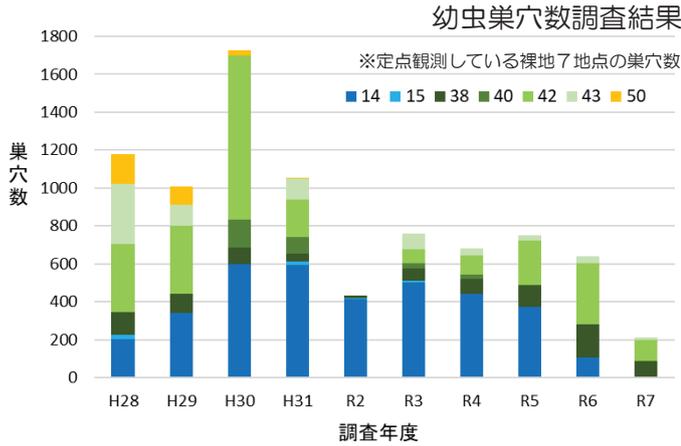
- 2016年 母島評議平で初確認
- 2017年~ 評議平周辺で駆除剤散布
- 2020年 元地集落への跳躍分散を確認
- 2021年 元地集落で大発生、中ノ平への跳躍分散
乳房山遊歩道周辺で駆除剤散布開始
- 2022年 中ノ平草木減容場、庚申塚資材置場への跳躍分散を確認
乳房ダム、砂防ダム上流域への進出を確認
- 2023年 東港資材置場、蝙蝠谷資材置場、蝙蝠谷農業団地、中ノ平農業団地への跳躍分散を確認
- 2024年 北港、新夕日ヶ丘への跳躍分散を確認

2025年の対策状況

- 農による駆除及び分布調査
(集落部、取水ダム集水域、船木山、北港等)
- 農と駆除剤(メタルデヒド剤)散布を併用した対策
(庚申塚、中ノ平、蝙蝠谷、新夕日ヶ丘)



生育域内での取り組み



- ・生息確認数は昨年度からさらに減少し、依然として少ないまま。
- ・減少要因と考えられるモクマオウ等外来植物駆除など既存の取組に加え、新たな環境改善手法開発をめざし、除草や土留め、人工土だまりなどの試行を実施している。



生息域外保全、野生復帰の取り組み

- ・伊丹市昆虫館と小笠原世界遺産センターで飼育が継続され、現在は技術向上や給餌手法の工夫等により安定的な飼育数を維持できている。2025年度からは野生生物生息域外保全センターが新たに飼育に参加。
- ・兄島の生息地に飼育個体を放す取組を2015年度から継続し、放した個体の移動や定着状況をモニタリングして確認している。
- ・自立的な個体群創出のため再導入を停止した裸地で、2024年まで移殖個体の子孫による自立的な繁殖が確認された。しかし、2025年に該当個体群の大幅な縮小が確認されたため、引き続き減少要因の解明や野生復帰の試行が求められる。

年度	再導入個体数		
	成虫	幼虫	計
H27	27	-	27
H28	41	-	41
H29	180	-	180
H30	15	-	15
R1	18	-	18
R2	128	-	128
R3	194	142	336
R4	389	248	637
R5	151	82	233
R6	43	266	309
R7	74	549	623



希少トンボ類3種の生息状況

オガサワラアオイトトンボ、オガサワラトンボ、ハナダカトンボ（国内希少野生動物種）の保護増殖事業を実施中。

	好適環境	弟島		兄島		西島		父島		母島	
		記録	現在								
オガサワラアオイトトンボ	止水	○	○	×	△	-	×	○	×	×	×
オガサワラトンボ	止水	○	○	○	○	-	☆	○	×	○	×
ハナダカトンボ	流水	○	○	○	○	-	×	○	×	○	○

△：幼虫のみ確認 ☆：人工トンボ池設置後確認
※ハナダカトンボは姉島で古い記録あり

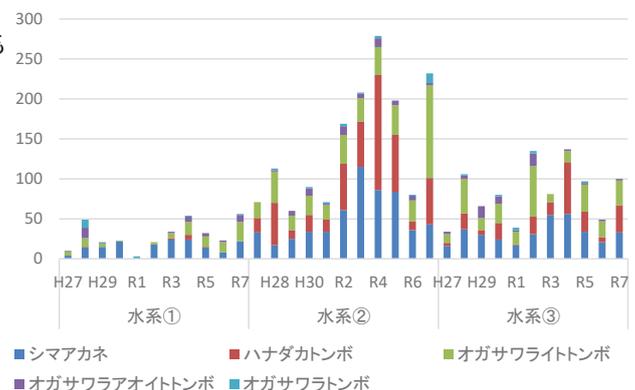


生息状況把握のためのモニタリング

- ・弟島3河川、兄島4河川でトンボ類のモニタリングを実施。
→昨年度は少雨の影響と思われる確認個体数の減少が確認されたが、今年度は回復傾向。
- ・2024年に母島の沢27水系で固有トンボのモニタリングを実施。（5年に1度の全沢調査）
→12河川で生息を確認。前回（2019年）の8河川よりも確認河川数、個体数ともに増加傾向。特に、外来植物駆除を進めている水系では良好な生息状況



弟島3水系における固有トンボ類の生息状況



生息環境改善の取り組み

- ・トンボ池のメンテナンス
兄島・弟島・西島に人工トンボ池を設置し、繁殖に適するよう落葉除去等を実施。
- ・沢・集水域での外来植物等の駆除を実施
兄島：モクマオウなど 弟島：シュロガヤツリなど
母島：アカギ、ガシュマル、ポトスなど

2-7 希少昆虫類の保全状況（オガサワラシジミ）

（環・都）

- ◆ オガサワラシジミは、シジミチョウ科ルリシジミ属に分類される小型のチョウ。
- ◆ かつては父島、兄島、弟島、母島、姉島に生息していたが、2004年以降は母島でしか確認されておらず、2020年4月の目撃以降は確認がない。
- ◆ 2005年から多摩動物公園での飼育下繁殖に着手し、累代飼育が行われたが、2020年8月に飼育個体が途絶。
- ◆ オガサワラシジミ保護増殖検討会では、野生下での減少要因として、下記の複数の要因が影響したのではないかと結論。



2016年～2017年にかけての①干ばつ、②餌木の開花不良、③大型台風
長期的には④グリーンアノールの捕食、⑤外来植物による餌木の生育環境の悪化

- ◆ 2021以降、東京都と環境省において作成した調査計画（2023年に見直し）に基づく調査（定期モニタリング、一斉調査、冬季食痕調査）を実施したが、オガサワラシジミは確認されていない。

	調査計画（当初計画）
	①定期モニタリング 定期的な目視観察（1回30分～2時間程度）を実施
	②一斉調査 発生盛期である夏季に、成虫及び幼虫、食痕の探索を一斉に実施。 ※関係機関・団体が協力して20～30名程度・2日間体制で実施
	③冬季食痕調査 冬季のオオバシマムラサキ蕾・葉から幼虫食痕を探索

今後の対応

保護増殖事業検討会において、本種の絶滅判断や今後必要な調査の有無について検討する。

2-7 希少昆虫類の保全状況（オガサワラセセリ）

（環）

オガサワラセセリ（セセリチョウ科）

- ・小笠原固有のチョウ
- ・かつては父島、母島に生息が確認されていたが、戦後は母島列島のみで確認されている
- ・幼虫はオガサワラススキを食草とし、海岸の草原帯に生息する
- ・国内希少野生動植物種、絶滅危惧IB（EN）



成虫



ススキの葉に隠れていた幼虫

生息状況把握のためのモニタリング

- ・母島南崎（2021年～）及び蓬莱根（2023年～）のススキ草原における毎月のモニタリングを実施し、継続的に個体を確認。
- ・母島属島における生息状況調査を実施。
→ 調査を実施した平島、向島、姪島、姉島、妹島において生息を確認。
- ・外来狩バチによる本種の幼虫の捕食、ネズミ類によるススキへの高頻度の食害が判明。

普及啓発の実施



小学生による飼育

母島南崎のススキ帯におけるグリーンアノール防除試験

- ・本種の保全を念頭に、草地環境及び周囲の林縁でのトラップ設置によるアノール防除試験を実施中。草地ではよりアノールの捕獲率が高いことが判明。



林縁に設置したアノールトラップ



草地に設置したアノールトラップ



捕獲されたアノール



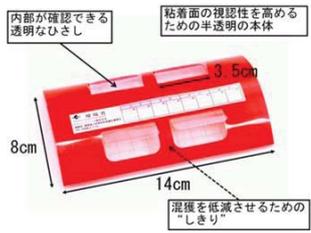
新夕日における飼育個体の放蝶

2-8 グリーンアノール防除対策の概要

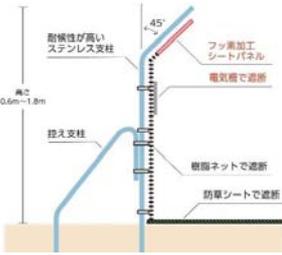
(環・林・都・村)

- ・ 柵による遮断と粘着トラップによる捕獲・探索を実施。
- ・ 兄島で最も重要な地域を囲う大丸山囲い込み柵を設置。

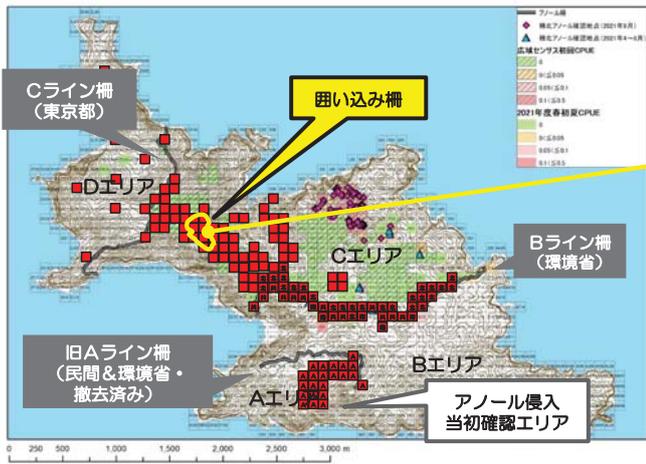
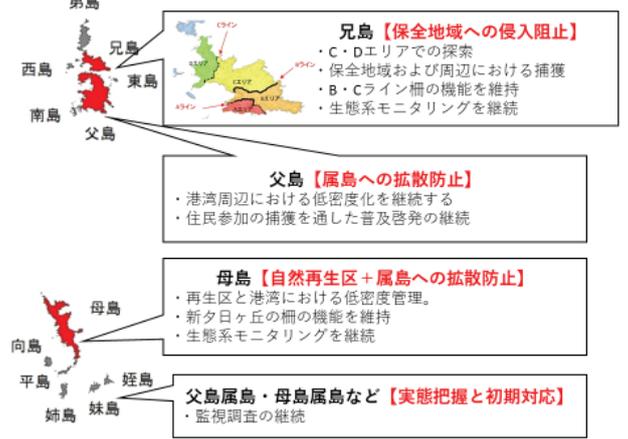
アノールトラップ (計約6万個)



アノール侵入防止柵 (Bライン)



ロードマップ2023-2027



大丸山保全地域 全周約1km、面積約4ha

- ・ 保全対象種213種のうち、北西部台地で144種、特に大丸山保全地域のみで104種（全体の49%）が記録。他地域と比べても保全の重要性和実現性が総合的に高い結果に。
- ・ 2024年度末に大丸山囲い込み柵を設置。
- ・ 柵の管理及び柵内部の昆虫類モニタリングを実施中。

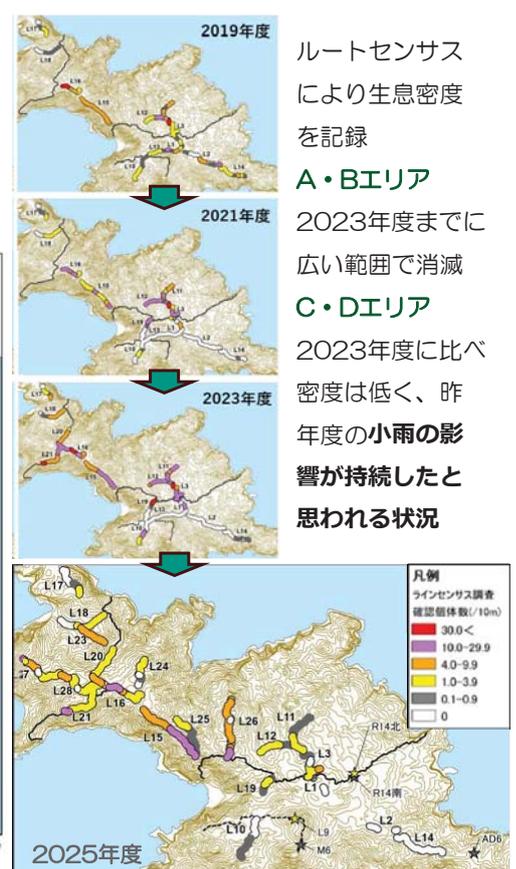
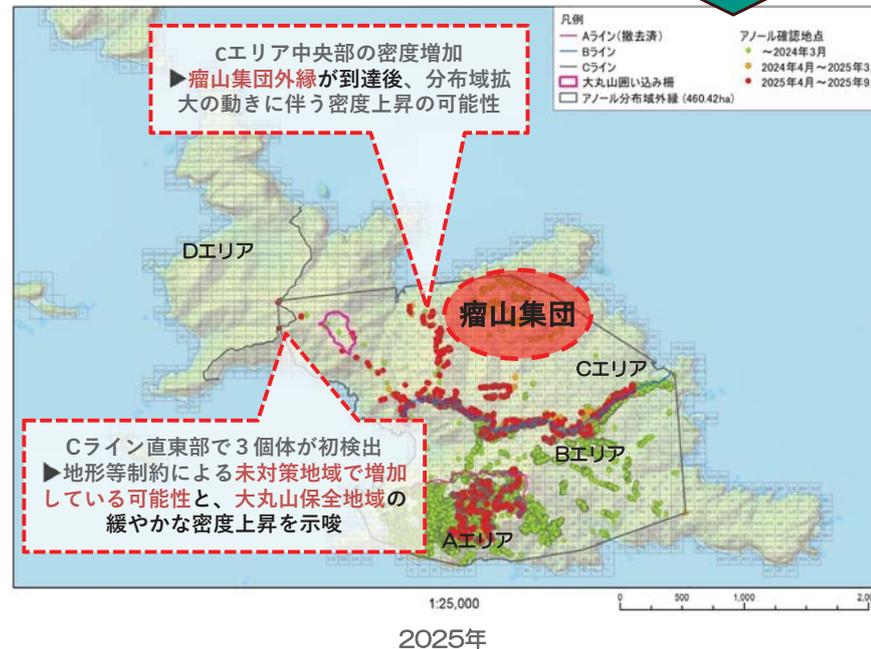
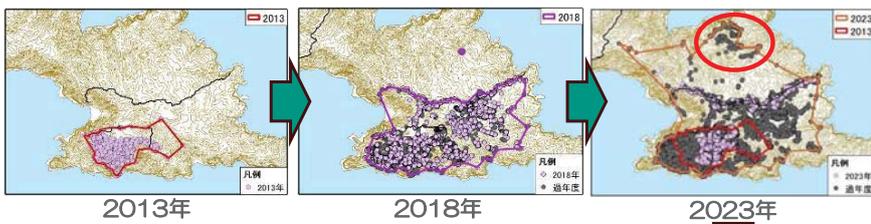
2-8 2025年度兄島アノールと保全対象種の現状

(環)

兄島でのアノールの検出状況

多数のアノール (瘤山集団) を確認

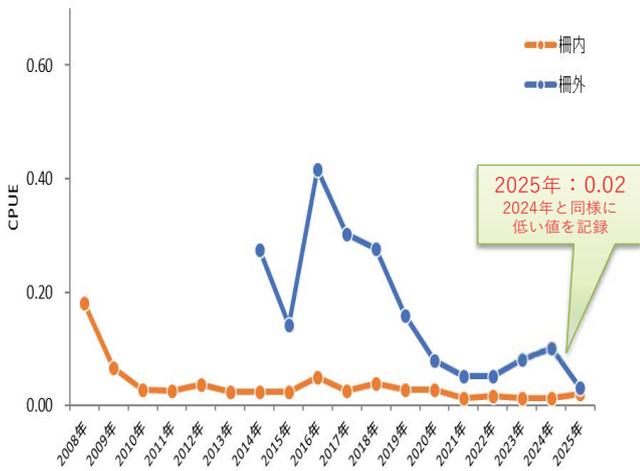
ヒメカタゾウムシ生息状況



2-8 母島のグリーンアノール対策（母島新夕日ヶ丘）

（環）

囲い込み型防除柵内・外のグリーンアノール密度



グリーンアノール防除柵



新夕日ヶ丘



子ども向けイベントの実施



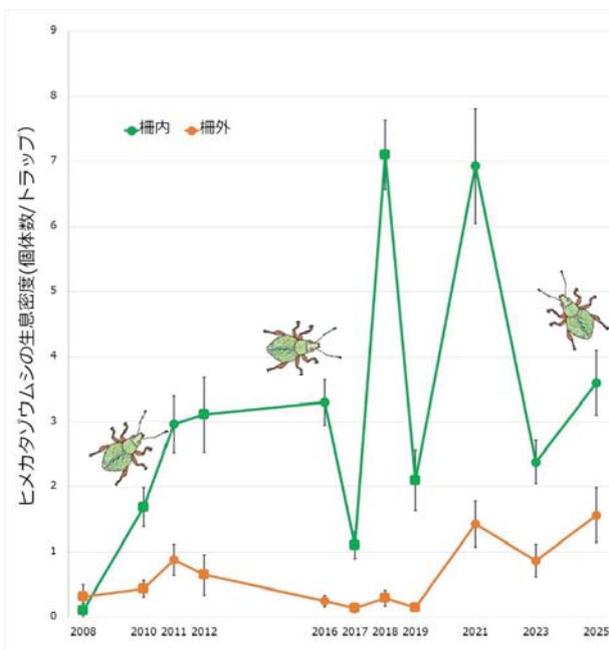
新夕日ヶ丘の利用に関するワークショップ

- ・ 囲い込み型防除柵内では引き続きアノールの低密度状態を保っている。
※昨年に引き続き、年間CPUE（100トラップ日あたりのアノール捕獲数）が非常に低い値を維持。
- ・ 柵内外の草木の刈り払いや樹木の高所伐採を継続。2025年以降、柵の改修を予定。
- ・ 子供向けイベント及び新夕日の利用に関するワークショップを実施。
- ・ 自然再生事業の普及啓発の場として、歩道整備や普及啓発看板の充実を進めている。
- ・ 老朽化等で維持管理上問題のあった柵を全線改修工事を実施。

2-8 母島新夕日ヶ丘における保全対象種の状況

（環）

新夕日ヶ丘のアノール防除柵内外におけるヒメカタゾウムシの生息密度調査



ヒメカタゾウムシ



小枝トラップ

この柵外地域では2016年以降、ヒメカタゾウムシの生体、食痕ともに発見できていない。

約2.3倍

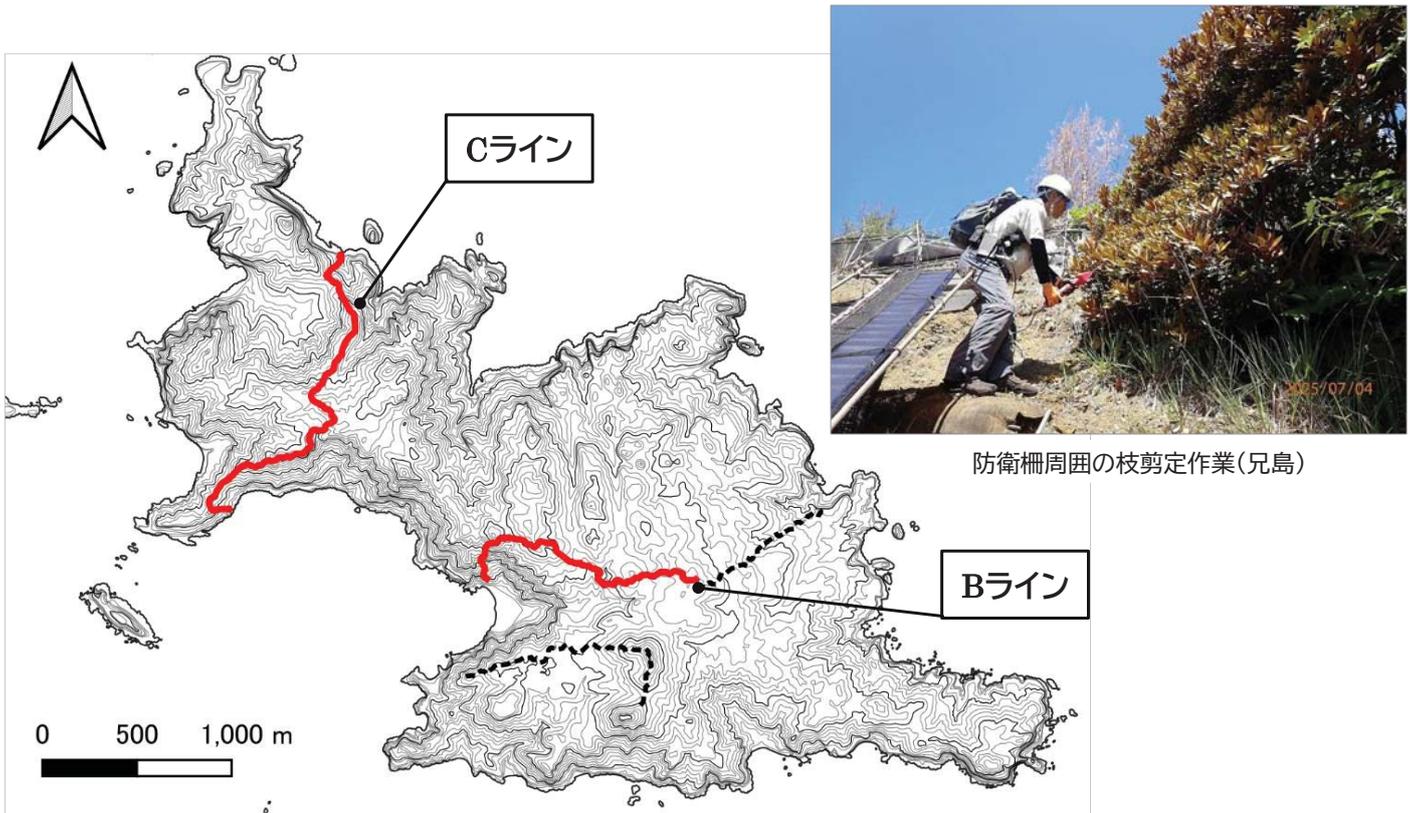


新夕日ヶ丘周辺のヒメカタゾウムシの分布

- ・ ヒメカタゾウムシは2010年以降、一貫して柵内に多い。
- ・ 柵内では安定的にヒメカタゾウムシの繁殖環境を維持できていると考えられ、今後も変化を把握する必要がある

防護柵の機能維持

年2回、柵周囲の枝剪定などをおこない、評価のために周辺で在来樹木の衰弱・枯損を調査しています。



防衛柵周囲の枝剪定作業(兄島)

2-8 アノール捕獲技術開発の進捗

環境DNAによる探索試験



タコノキの葉からの採材



シマイスの葉からの採材

【目的】粘着トラップ以外の新たな検出手法の確立を目指し、環境DNA分析の有効性を検証。

【試験内容と結果】

- 採材作業の所要時間短縮など、検出手法改善を検討。
▶所要時間が半分以下の採材手法でも検出可能なことを確認。

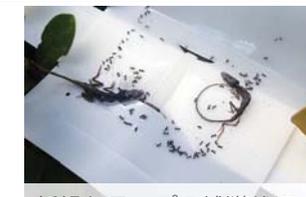
【今後の予定】

- 次年度は兄島全域での実践投入と手法確立を併行して実施予定。

生分解性トラップ試験



新規トラップ設置の様子



新規トラップの捕獲状況

【目的】回収不要なトラップの開発による捕獲効率化。

【試験内容と結果】 ※連携企業による自主事業

- 生分解性樹脂に生分解性粘着剤を塗布したトラップによる野外試験を父島にて実施。▶野外で1か月程度の耐久性とアノールを捕獲可能なことを確認。

【今後の予定】

- 捕獲性能や耐久性、混獲リスク検証のための試験を兄島にて実施予定。

電動式の疑似餌による誘引試験



蝶型の模型



トラップを迂回する個体

【目的】効果的、効率的な捕獲方法の開発を目指し、電動式の疑似餌による誘引による捕獲効率を検証。

【試験内容と結果】

- 飛翔するチョウとその動きを模した装置を作成し、野外で試験。誘引された個体をトラップで捕獲できるか観察。▶疑似餌による誘引効果を確認できたが、一部の試験区では逆に捕獲数が減少した。▶トラップの屋根が疑似餌を見えにくくさせるため、疑似餌がアノールのトラップ迂回を促している可能性。

【今後の予定】

- 他の形状のトラップとの組み合わせなどの検証。

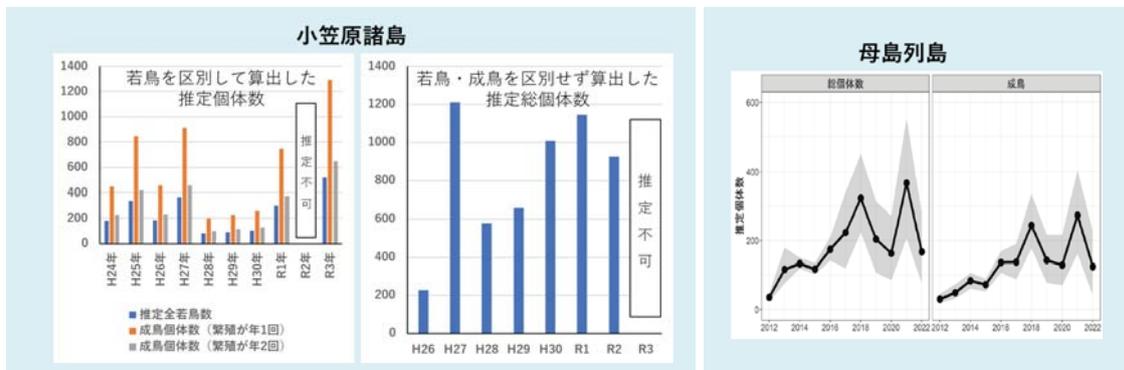
2-9 アカガシラカラスバトの保全

(環・林・都・村)

- 目標** : 自然状態で安定的に存続できる状態にすること
- 取組** : 関係機関が足環装着や目撃情報の収集、生息・繁殖状況の調査、生息環境の改善、域外保全等を実施。
- 成果等** : 個体数は増加しており、ノネコ対策等の成果と考えられる。ただし、まだ個体群が安定している状態とは言えない状況。域外保全として3園（恩賜上野動物園、多摩動物公園、井の頭自然文化園）において平成18年より飼育繁殖を実施し、自然育雛にも成功している。



(足環を装着した個体)



標識採捕法による推定個体数（令和3年度まで）

2025年度のトピック

- ・ノネコ対策は継続し、アカガシラカラスバトの保全に効果をあげていると考えられる。
- ・父島では衝突事故等が発生しており、多発地点での注意喚起等の対応が必要と考えられる。

2-9 オガサワラカワラヒワの保全 ~域内保全~

(環・林・都・村)

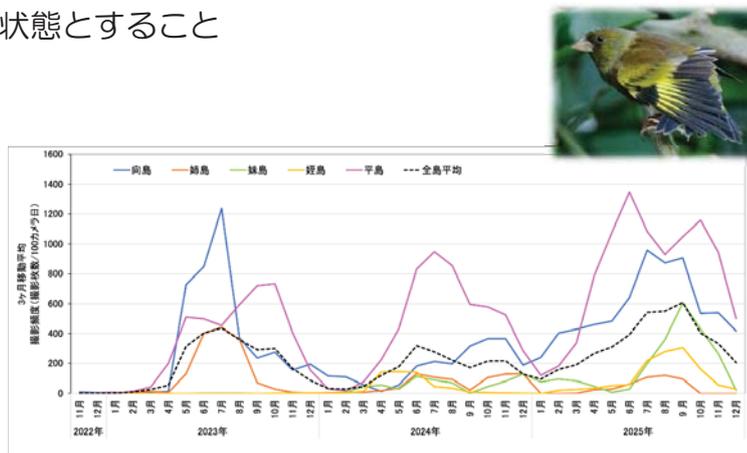
目標 : 本種が自然状態で安定的に存続できる状態とすること

生息域内のモニタリング状況

- ・2024年の干ばつの影響で減少に転じたが、2025年は個体群密度が回復傾向
- ・大型人工水場に設置したセンサーカメラでは、向島、妹島、姪島、平島において撮影頻度の増加が確認された。

⇒ネズミ対策のほか、人工水場、人工餌場の設置の効果と考えられる。

★各種保全の取組みを一層推進していくことが重要。



大型人工水場での確認数 林野庁、東京都、Islands care

域内保全の取組み

対策	場所	内容
ネズミ対策 	母島属島	ドブネズミがオガサワラカワラヒワの繁殖期の卵やヒナの捕食、餌資源の競合を引き起こしていると考えられ、殺鼠剤を用いた駆除の実施 → 詳細は2章2-4参照
ノネコ対策 	母島	ノネコによる捕食圧の低減のため、特にオガサワラカワラヒワの飛来する母島南部でのノネコ捕獲 → 詳細は2章2-1Q参照
生息環境の改善 	母島・母島属島	植生の管理・外来植物駆除
水場、餌場の確保	母島・母島属島	人工水場や餌場の増設

取組状況

- ・2021年9月～ 域外飼育開始
 - 捕獲実績 2021.9～2025.10にかけて延べ20羽 (♂12羽♀8羽)
 - 飼育総数 2026.2末現在16羽 (♂10羽♀6羽) うち東京都事業分 13羽 (♂8羽、♀5羽)

捕獲・初期飼育状況



- ・動物園との連携による飼育繁殖
 - 動物園職員による現地飼育繁殖への技術支援
 - 近縁種による飼育繁殖技術の確立
 - 本種での飼育繁殖
- ⇒ 2025年3月 上野動物園での本種飼育開始
 2025年4月 NPO事業でも本種飼育開始 (個体譲渡)
 2025年6月 NPO事業も含め3施設で飼育繁殖成功 (6羽が巣立ち)



父島屋内繁殖ケージ



上野動物園屋内繁殖ケージ

- ・母島保護増殖施設の建設
 - 契約不調により、施設建設が中長期的に困難



父島での育雛状況



上野動物園での巣立ち状況

今後の対応・課題

- ・動物園との連携強化により、本種の飼育繁殖の実績を積み上げ、飼育繁殖技術を確立する。
- ・母島列島での生息域内個体群の増強に向けた母島への保護増殖施設建築については、代替地確保による仮設施設の設置を検討して母島での飼育繁殖体制を確立を目指す。

2-9 オガサワラオオコウモリの保全

オガサワラオオコウモリと人が共生する社会づくりを進め、本種が自然状態で安定的に存続し、生態系の中でその機能を十分に発揮できるようになることを最終目標とする。

経緯

- 2017年度 保護増殖事業検討会立上げ
- 2018年度 第一次中期実施計画 (2019-2023年度) を策定
- 2019年度～ 中期実施計画に基づく保全対策を展開 (関係機関・団体)
- <中期実施計画 (2019-2023) の主要内容 ※改定予定>
- (1) 生息状況等の把握 (ねぐら成立条件調査、個体群の動態調査など)
- (2) 生息環境の維持及び改善 (餌場の確保、ノネコの排除など)
- (3) 農業等人間活動との両立 (農作物の栽培状況実態調査など)
- (4) 傷病個体の救護等 (傷病個体の治療・リハビリ、事故等予防措置)
- (5) 普及啓発の推進 (学校等における普及啓発や情報発信)
- (6) 効果的な事業の推進のための連携の確保



GPS発信器による行動調査



冬期の餌場である海岸林の在来植生の再生

2025年度のトピック

- ・中期実施計画 (2025～2029) について検討。
- ・父島小港海岸及び洲崎で生息環境確保のための海岸林再生を実施。
- ・上野動物園において飼養中の保護個体 (R2保護) の一般公開展示を開始。

2-9 オガサワラオオコウモリによる食害対策

(村)

本取組の目的

村民とオオコウモリが持続的に共存することができる環境を創るため、オオコウモリに対する安全性が担保された硬質樹脂性ネット（トリカルネット）等を使用した施設の設置等を補助し普及することにより、オオコウモリによる農作物被害を軽減するとともに、オオコウモリの防鳥ネット等への絡まり事故を防止する。

＜施設設置実績＞



これまでの経緯

- 平成24年度 オオコウモリ食害対策事業開始
- 平成26年度 農作物被害防除対策需要調査実施（父島）
- 平成29年度 食害対策事業検討委員会設置（毎年開催）
- 平成30年度 農作物被害防除対策需要調査実施（母島）
- 令和元年度 母島においてオオコウモリ急増
農業者との意見交換会開催（母島、R1~6開催）
新仕様施設試験施工（母島）
- 令和2年度 防護網試験設置（父島）
- 令和4年度 母島におけるオオコウモリによる食害の顕在化
関係機関・団体連携による農地パトロール実施（母島）

課題・今後の対応

- これまでの取組みの継続
- 母島における農作物被害防除のため新たな補助事業による施設設置の推進
- 防護網の生産性・利便性の向上
- 設置済み施設の管理状況の点検等によるオオコウモリの侵入事故防止

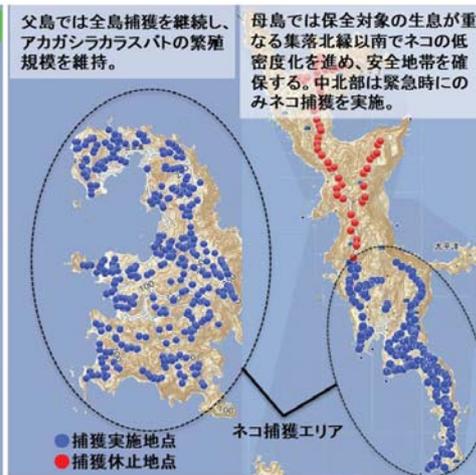


2-10 ノネコへの対応状況

(環・都・村)



保全対象鳥類の生息状況



2025年度のネコ捕獲エリア



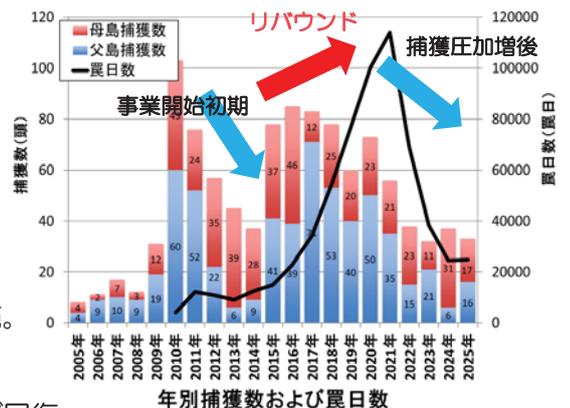
捕獲ネコは東京都獣医師会、小笠原海運、地域の協力を得て、内地搬送、馴化、希望する飼い主へ引渡している。これまでに1166頭を搬送（2026年3月上旬時点）

＜父島＞

- アカガシラカラスバト等の鳥類保全のため、**全島山域**でのノネコの完全排除を目指して捕獲中。
- 罾を警戒するネコが残るため、技術開発に注力。
- ★成果：アカガシラカラスバトの生息状況改善
南崎での海鳥繁殖地の回復

＜母島＞

- 2016年まで全島で捕獲していたが、現在は**捕獲範囲を保全対象種の生息地等が重なる南部地域に集中**。
- 2025年度から再エネ事業の環境配慮として石門にて捕獲を実施。
- 2021年以降はオガサワラカワラヒワ保全強化のため、飛来地域全域（集落北縁以南）に捕獲圧をかけ、**ノネコが低密度化**。
- ★成果：南崎ではカツオドリやオナガミズナギドリの集団繁殖地が回復。



本取組の目的

◆ペットの適正飼養の推進、集落のネコ対策等により、「人とペットと野生動物の共存」を目指す

これまでの経緯

- ◆1990年代～ 野ネコ対策事業（TNRによる）とネコ条例の運用、ノラネコの把握により集落のネコを管理
- ◆2006年 小笠原ネコに関する連絡会議の発足：山域のノネコ捕獲が本格化（後に環境省が事業化）
- ◆2015年～ ネコ対策の経験をふまえ、新たな外来種となりうる犬猫を含めたペットに関する制度を地域課題WGで検討
- ◆2016年 小笠原動物協議会の設立 翌年5月に動物対処室の運営開始 →ペットの適正飼養指導を強化
- ◆2020年3月 小笠原村愛玩動物の適正な飼養及び管理に関する条例（ペット条例）を制定。翌年4月に一部施行。
- ◆2024年4月 ペット条例に関する審議会（2021年11月設置）の犬の適正飼養に関する答申を受け、ペット条例を改正。
- ◆2024年10月～ ペット条例の持込み申告の試行開始

進捗状況

- ◆ペットの飼養登録：156世帯登録（R8.2.1時点）
- ◆ペット条例の動物の持込み制限の検討開始（R7～）
- ◆集落ネコ対策では、山域のノネコが集落に定着しないよう、村と環境省が連携してネコ捕獲を継続するとともに、むやみな餌やり・個人によるノネコ捕獲をしないようお願い

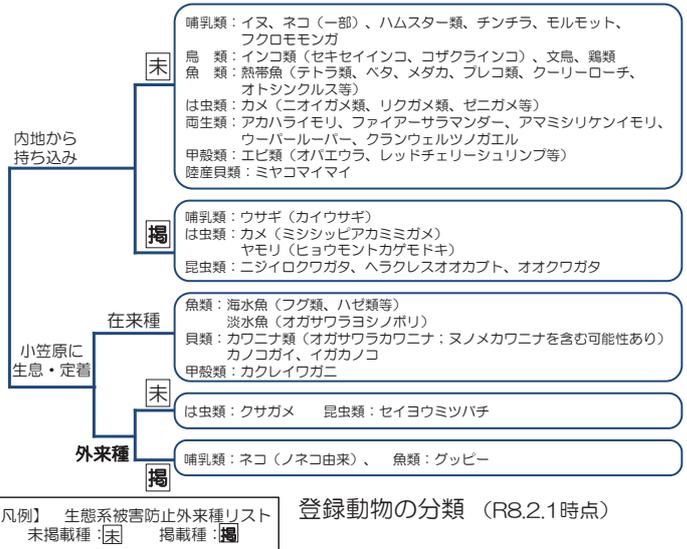
飼養登録状況（R8.2.1時点）

動物種	猫	犬	その他
登録頭数（父・母）	77（54・23）	62（55・7）	134（116・18）
登録世帯数（父・母）	57（42・15）	51（45・6）	63（56・7）

複数種飼養している世帯があるため、重複がある

課題・今後の対応

- ◆ペット条例の運用を通じた動物との付き合い方の村民全体の意識醸成の強化（特に持込み申告の普及啓発）
- ◆環境省事業との連携による集落ネコ対策の継続



2-11 新たな外来種の侵入・拡散防止対策の実施 ~小笠原世界遺産センターでの外来種対策~ (環)

施設概要

小笠原諸島は、一度も陸地とつながったことのない海洋島で、独自の進化を遂げた多くの生物や生態系を有します。人や荷物の運搬などにより、意図的・非意図的に本来生息しない生き物を兄島などの属島に運び、固有の生き物に深刻な影響を与える恐れがあります。それらを防止する目的で、小笠原世界遺産センターでは、燻蒸室や冷凍室を設け、外来種対策を行っています。

燻蒸室・冷凍室の主な利用状況

総処理件数：38件（2025年3月～2026年2月）
（内訳：燻蒸処理 16件、冷凍処理 22件）

日付	処理項目	使用機関
2025年	5月 弟島外来種対策 対策資材の冷凍	小笠原村
	6月 昆虫調査 調査資材の燻蒸	九州大学
	7月 西之島調査 調査資材の燻蒸	環境省
	8月 聳島ルート整備 整備資材の冷凍	林野庁
	9月 外来種対策 対策資材の冷凍	東京都
2026年	3月 外来種対策 対策資材の燻蒸	環境省



新たな外来種の侵入や拡散を防止するため、属島への荷物の搬入・運搬時や到着した資材等に昆虫が付着している時など、遺産センターの燻蒸室・冷凍室が利用できます。

外来種対策の主な対象

-  ノヤギ
-  ノブタ
-  ノネコ
-  ハツカネズミ
-  クマネズミ
-  ドブネズミ
-  オオヒキガエル
-  グリーンアノール
-  ツヤオオズアリ
-  アジアベッコウマイマイ
-  ニューギニアヤリガタリクウズムシ
-  ミカンコミバエ
-  アカギ
-  モクマオウ
-  ギンネム
-  ガジュマル
-  シンクリノイガ

対策の状況

-  未着手
 -  対策中
 -  駆除中
 -  駆除完了
- ※ 「対策中」...対策を実施しているものの駆除が進んでいないもの
 「駆除中」...対策を実施し駆除が進んでいるもの

聟島列島



父島列島



母島列島



経緯



- 西之島は2013年以降の噴火で陸地面積が増え、現在は、新たな生態系の形成過程を観察できる貴重な場となっている。
- 一方、自然改変や外来生物の持ち込みなどにより、その価値が損ねられる可能性もあり、原初の生態系の初期生物相を把握した上で、保護担保措置や長期的なモニタリングを検討する必要がある。
- 2017年に「西之島の価値と保全にかかる検討委員会」が設置され、2019年に提言をとりまとめたが、直後に再度噴火が起こり、島全体の生態系がリセットされた。
- 2021年度、ドローン等による上陸を伴わない陸域・海域調査を主に実施。2023、2024年度は探査機による調査を実施。2025年度はドローンによる遠隔調査に加えて3年ぶりの上陸調査を実施。

進捗



- 2025年度（7月）は3年ぶりに西之島へ上陸し、陸上及び海域の調査を実施。
- 海鳥について、カツオドリ、アオツラカツオドリ、クロアジサシ、オオアジサシの繁殖を確認。カツオドリは新たに北部でも営巣を確認する一方、セグロアジサシの確認個体数は激減。
- カツオブシムシの生息を3年ぶりに、台地上でのカニの存在を4年ぶりに確認。
- 令和2年の大規模噴火後、初めて植物の生育を確認。
- 調査期間外も一定期間情報を収集できる体制の構築に向けて、無人探査機や衛星通信装置等を試行的に設置。

• 今後も調査を継続することで原初の生態系の初期生物相を把握しつつ、地域関係者等と協議しながら保護措置（法規制等）を検討する予定。

写真提供：自然環境研究センター 森英章

2-13 住民参加・普及啓発等 ～民間団体との協定締結による森林づくり～

民間団体との協定締結による森林づくりーモデルプロジェクトの森ー

林野庁が推進する「協定締結による国民参加の森林づくり」の一つで、それぞれの地域や森林の特色を生かした効果的な森林管理が可能となる国有林において、民間団体などと協定を結び、地域住民や参加・協力する民間団体などとの間で合意形成を図りながら協働・連携して実施する森林づくり。

名 称	協 定 団 体
村民の森	特定非営利活動法人 小笠原野生生物研究会、小笠原グリーン株式会社
西島の固有森林生態系修復と保全の森	特定非営利活動法人 小笠原海洋島研究会、特定非営利活動法人 小笠原野生生物研究会
東島森林性海鳥の地	特定非営利活動法人 小笠原自然文化研究所

【活動例】西島の固有森林生態系修復と保全の森

【協定団体】 特定非営利活動法人 小笠原野生生物研究会

【活動の目的】 侵略的外来植物に覆われた西島の外来種を駆除し、島で採取した種子を播種し、植生回復を目指す。ひいては動物も含めた生態系全体の回復を目標とする。

【令和7年度の活動】 外来植物の駆除、在来種の植栽を実施。



2-13 住民参加・普及啓発等 ～ボランティア・環境教育等の受入れ～

(林)

令和7年度の外来植物等のボランティア・環境教育等は9回、136名が参加。

小笠原中学校

小笠原の環境保全の取組を学習し、電信山歩道沿いでモクマオウ等の駆除を体験



都立国立高等学校

世界自然遺産における自然保護活動を学習し、小港でトラノオなど外来種の駆除やモモタマナ等在来種の播種を体験



筑波大学大学院

世界自然遺産地域での管理や保全の取組について、東平アカガシラカラスバトサンクチュアリー内で現地を観察しながら学習



2-13 住民参加・普及啓発等 ～村民参加の森づくり～

(村)

目的

- ◆ 返還50周年を契機として小笠原固有の樹木「オガサワラグワ」を中心に村民や来島者が自然を身近に感じられる場と機会の創出
- ◆ 林木育種センター、島内協力者等との連携により希少種の保護にも貢献



これまでの経緯

- ◆ **オガサワラグワ** (平成29年～)
 - ・ 林木育種センターからのクローン苗を島内協力者が順化・育成
- ◆ **オガグワの森** (平成28年～)
 - ・ 現況調査、残地材処分、アカギ大径木伐採、ルート設定・整備、モニタリング(植生、水生生物)
 - ・ 主なイベント内容: 生き物観察、地図づくり、植樹、レク利用 など
- ◆ **母島の森** (平成29年～)
 - ・ 東京農業大・田中信行教授らと植栽箇所や樹種、作業の進め方を検討
 - ・ シマグワ・アカギ・ギンネム・ササの薬注・伐採
 - ・ 主なイベント内容: ギンネム伐採、地図づくり、植樹、苗の計測 など

進捗状況

年月日 場所	参加者 (スタッフ)	内容
R7.9.7 オガもり	29名 (15名)	昆虫観察
R7.11.30 ハハもり	18名 (4名)	昆虫観察
R8.1.31 オガもり	11名 (8名)	地ならし、 野点茶会

オガグワの森

父島の長谷ダム上流の2つの沢に挟まれた約1haの在来種と外来種が混成した二次林



母島の森

母島の静沢集落北側のギンネムが繁茂する避難路を兼ねた散策路沿い



前日々に捕まった昆虫観察

課題・今後の対応

- ◆ 将来像の検討と共有
- ◆ 継続的な維持管理体制

本取組の目的

- ◆村民に小笠原の自然に対する興味を深めてもらうとともに世界遺産の課題を共有する
- ◆視察会では保全対象種や対策の現場を体感してもらう
- ◆村民ボランティアでは外来種駆除作業を通じて取組を体感してもらう

進捗状況

実施日	村民(スタッフ)	場所	内容
R7.5.10	17名(10名)	弟島	ボラ
R7.11.24	13名(9名)	西島	ボラ
R7.11.29	12名(4名)	平島	視察会

セセリ探索(平島)



オガヒワ観察(平島)



トンボ解説(弟島)



外来植物の駆除作業(弟島)



在来植物のタネ植え(西島)



ヤゴ探索(西島)



これまでの経緯

- ◆村民向け視察会(H25～ 兄島、弟島、聳島、平島、向島)
- ◆村民ボランティアによる外来種駆除作業(H13～ 南島、西島、弟島)
- ◆ははじま丸による父・母島列島周遊クルーズ(R4,5)

課題・今後の対応

- ◆各機関が連携して取組を継続
- ◆裾の広い村民に参加してもらえるようメニューや実施場所を工夫

小笠原世界遺産センターでの普及啓発

世界自然遺産・小笠原諸島への関心を深め、世界自然遺産の価値や課題を共有すること、地域と連携した世界遺産の保全の取組を進めることを目的として、遺産センターでの普及啓発事業を実施。

◆教育関係

- ・移動教室レクチャー(6/24 母島小学校6年生対象)
- ・夏休みレクチャー(8/22 とびうおクラブ児童対象)
- ・研修レクチャー(9/8 日本大学実習生対象)
- ・マイマイ授業(11/5、12、19 小笠原小学校1年生対象)
- ・兄島環境学習(10/22、11/8 小笠原高校1年生対象)
- ・ハンミョウ授業(12/17 小笠原小学校3年生対象)

◆講演会(オンライン併用)等

- ・講演会『オガサワラヌマエビのすごい進化』(8/18 一般対象 計52名)
- ・講演会『小笠原の地質も遺産にするために』(11/20 父島、22 母島 一般対象 計64名)
- ・講演会『小笠原諸島の固有植物の送粉者』(11/30 一般対象 計51名)
- ・講演会『すごいぜ新夕日』(2026/1/26 母島 一般対象 計19名)
- ・講演会『小笠原諸島の淡水エビ類』(2026/2/15 一般対象 計30名)
- ・講演会『小笠原の知られざる固有昆虫』(2026/3/11 一般対象 計91名)

※他機関、域団体等との連携・合同開催含む

その他普及啓発

世界自然遺産・小笠原諸島への関心を深め、世界自然遺産の価値や課題を共有すること、地域と連携した世界遺産の保全の取組を進めることを目的として、遺産センター外での普及啓発も実施。

◆企画・展示等

- みどりの月間写真展『小笠原×自然美』
(4/14～6/3 一般対象)
- 企画展『中通島とハナバチ』
(7/2～17 一般対象)
- 夏休み企画展『ぎよぎよ展』
(7/20～8/30 一般対象)
- 特別展『小笠原ネコプロジェクト展』
(9/8～10/28父島 11/18～12/1母島 一般対象)
- 特別展『岩石展』
(11/20～2026/1/29 一般対象)

◆普及啓発イベント

- 遺産センター de HALLOWEEN
(10/31 一般対象 計180名)

◆遺産センター外での取組み

- 海ごみゼロウィーク
(5/30～6/8 一般対象)
- ビーチクリーンin洲崎
(6/7 一般対象 16人)
- 新夕日ヶ丘自然体験イベント
(9/7 一般対象 19人)
- 母島アカギ木工教室
(11/2、3 一般対象 計50名)
- 乳房山マイマイ観察会
(2026/2/15 一般対象 7人)



岩石展



マイマイ観察会

※他機関、域団体等との連携・合同開催含む

3. 世界遺産に関する基礎資料

- 3-1 世界遺産の定義
- 3-2 世界遺産の登録状況（世界、件数）
- 3-3 世界遺産の登録条件
- 3-4 世界自然遺産の基準
- 3-5 小笠原諸島の世界遺産までの経緯（時系列）
- 3-6 小笠原諸島の世界遺産の登録基準
- 3-7 小笠原諸島の世界遺産の区域

3-1 世界遺産の定義



世界遺産とは？

世界遺産条約（世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約）に基づいて世界遺産リストに登録された、

人類が共有すべき
「顕著な普遍的価値」
をもつ資産

◇世界遺産条約の目的

顕著で普遍的な価値を有する遺跡や自然地域などを、人類全体のための世界の遺産として保護・保存し、国際的な協力及び援助の体制を確立すること

◇締約国数

196カ国（2025年現在）

◇事務局

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）



世界遺産の登録状況

世界遺産
(1,248件)

文化遺産（972件）

顕著な普遍的価値を有する記念物、建造物群、遺跡、文化的景観など

自然遺産（235件）

顕著な普遍的価値を有する地形や地質、生態系、景観、絶滅のおそれのある動植物の生息・生息地などを含む地域

複合遺産（41件）

文化遺産と自然遺産の両方の価値を兼ね備えている遺産

2025年7月時点

<http://whc.unesco.org/en/list/>



世界遺産の登録条件

顕著で普遍的な価値を有すること

- 世界遺産条約に基づく「クライテリア（価値基準）」を満たす
- 評価される価値の独自性が明らか
- 十分な規模と必要な要素を持つ

価値が将来にわたって守られること

- 法的措置等により、価値の保護・保全が十分担保されていること（完全性）



世界遺産の基準

(vii) 景観

…最上級の自然現象、類い希な自然美

(viii) 地形・地質

…地球の歴史の主要な段階の顕著な見本

(ix) 生態系

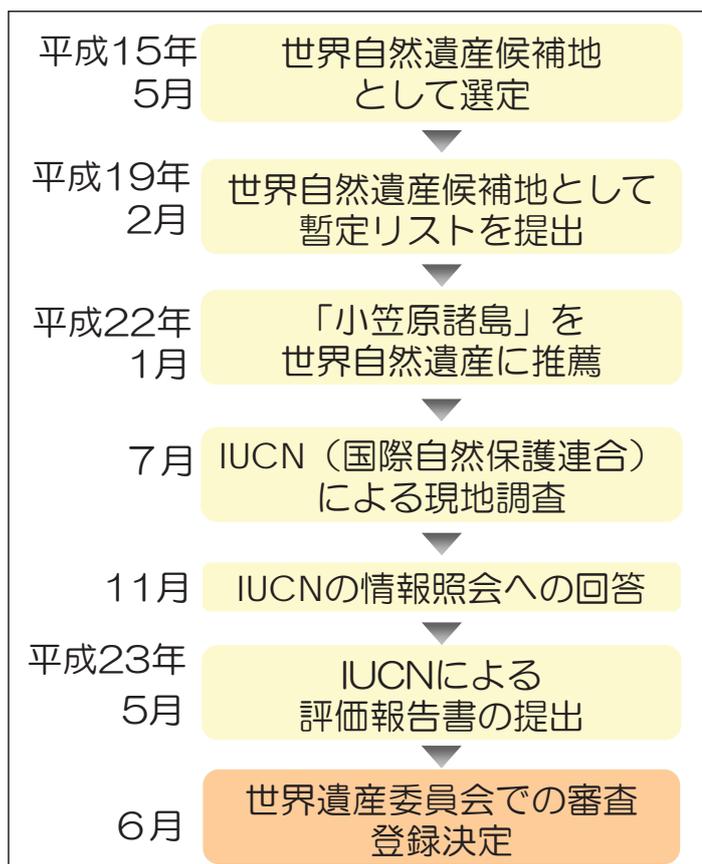
…進行中の生態・生物学的過程の顕著な見本

(x) 生物多様性

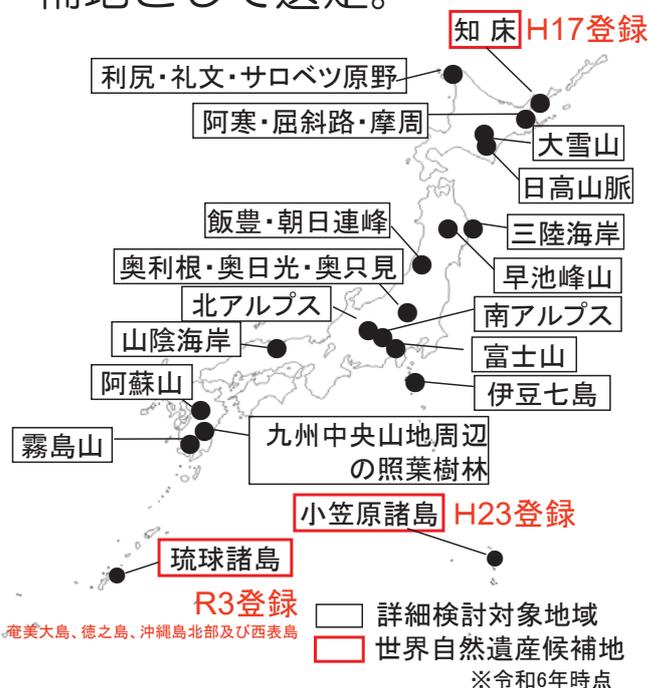
…生物多様性の生息域内保全にとって最も重要な自然の生息地を包含

上記4つのうち、1つ以上に該当すれば自然遺産として認められる。

3-5 小笠原諸島の世界遺産までの経緯（時系列）



- 19の詳細検討対象地域から「知床」「小笠原諸島」「琉球諸島」を自然遺産候補地として選定。



3-6 小笠原諸島の世界遺産の登録基準

(ix) 生態系

◆固有種率が極めて高い。



兄島の植物の固有種率



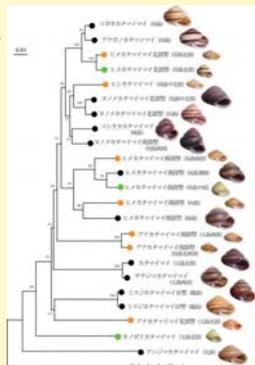
◆植物では活発な進行中の種分化の重要な中心地となっている。



◆生物が様々な場所に適応して進化した証拠がよく残っている。



キノボリカタマイマイ

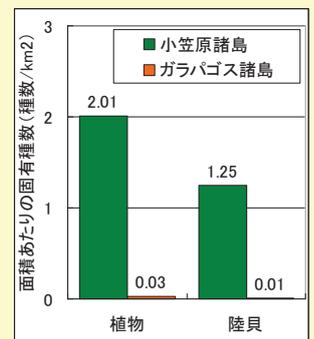


カタマイマイ属の系統関係

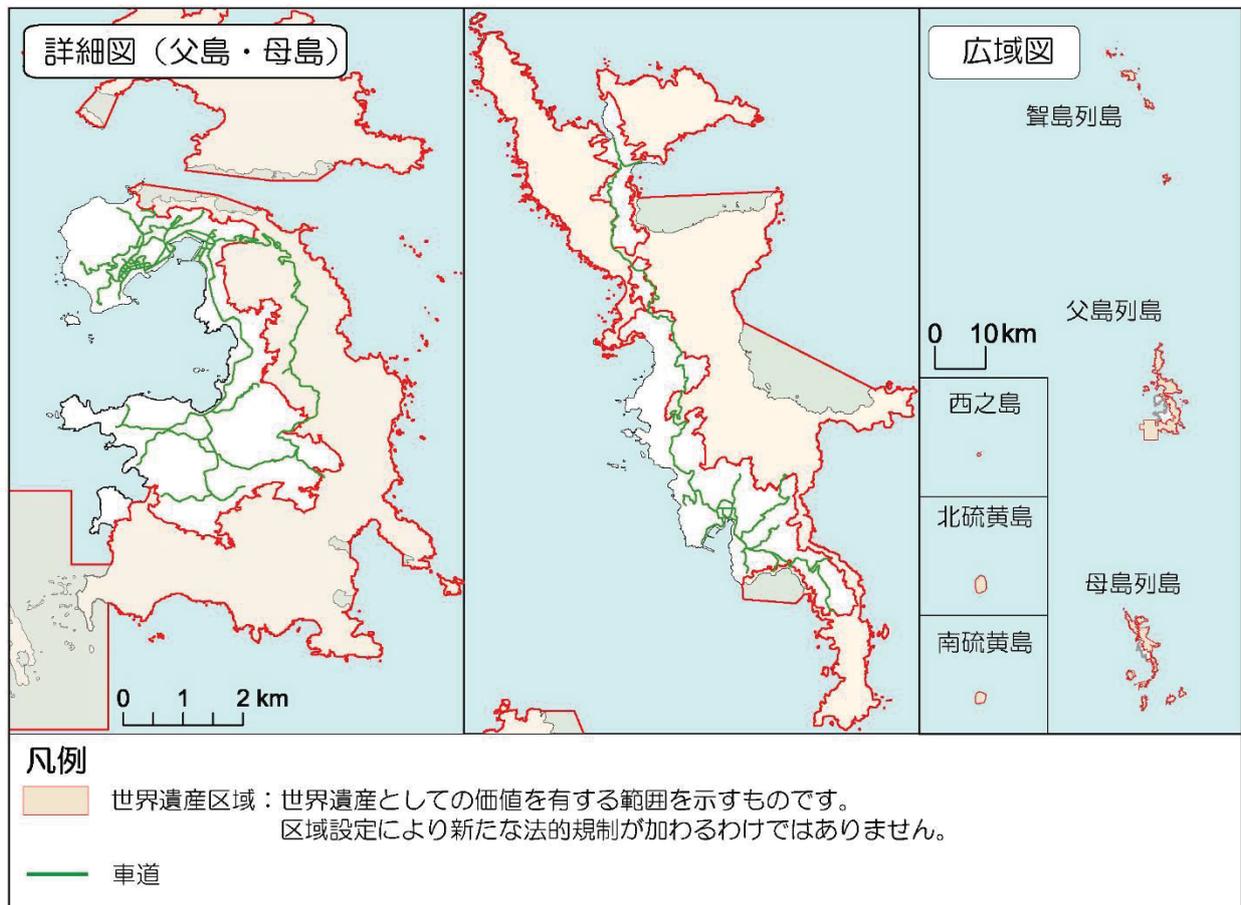
◆面積が小さい割に、陸貝と植物の固有種の割合が並外れて高い。



陸産貝類の固有種率



3-7 小笠原諸島の世界遺産の区域



◇◆発行元・お問い合わせ先◆◇

基礎資料集に関するお問い合わせは、下記の発行元（地域連絡会議事務局）へご連絡ください。

環境省小笠原自然保護官事務所

Tel/Fax : 04998-2-7174/7175
(母島自然保護官事務所 3-2577)

林野庁小笠原諸島森林生態系保全センター

Tel/Fax : 04998-2-3403/2650

東京都小笠原支庁土木課自然環境担当

Tel/Fax : 04998-2-2167/2302

小笠原村環境課

Tel/Fax : 04998-2-2270/2271